ルシャナの仏国土 四

第四章 海光る

一. 激突

ホルスの海賊船・ローズナイト号は、物資調達のため、海洋貿易国カレナルド近海の孤島にある母港ターコイズに停泊した。

ここは、いわゆる海賊船基地である。停泊料が少し高いが、他の港では受け入れてもらえぬような船でも接岸 することができ、通常物資の調達や船員の雇い入れも可能だ。

その日は、ホルスと羅針盤ジャッカルが交易品や生活物資の買い出しに出て、月刊の船員新聞も買った。海で暮らす者たちのために、世界中のニュースを一ヶ月単位でまとめて伝える新聞である。

「お?アリョーシャ、あいつ即位したのか!嫁さんまで貰いやがった!」

アレクセイの即位と結婚を伝える記事を見つけたホルスは顔を綻ばせた。

「いつぞやお越しになった方ですね。」

「うん。兄上の義理の弟・・・ってことになるか。て一ことは、俺の、どうなるんだ?あぁ、しち面倒くせぇ!」 彼は髪をぐしゃぐしゃ掻き回した。ややこしいことを考えて頭をフル回転させる時の彼の癖である。

「なら親方、親方の弟さんということにしとけばいいじゃないですか。」

ジャッカルは、ローズナイト号の参謀である。ウユニ人の特殊能力も合わせ持ち、常に冷静沈着に判断を下す。彼のおかげで命拾いしたことが何度もある。

「ま、それもそうか。良い奴みたいだったしな。」

海賊とは名乗っていても、ホルスは無益な殺生や略奪はしない。無国籍の貿易商人と言ったほうが正確であろう。ただ、乗組員は彼自身が道場破りで船の建造費を貯めていく過程で集めてきた者が多く、血の気が多い。 時々は、一般商船を襲い、剣豪たちと一戦を交わらせたりしてやらないと、彼らの鬱憤が貯まってしまう。それをホルスは『ガス抜き』と名づけている。

「そろそろまた、ガス抜きせんといかん頃かもしれんなぁ。」

「それが難点ですね。どうにも収まりがきかない連中ですから。」

羅針盤ジャッカルは、ホルスがウユニに行った時、海に憧れつつもウユニ人で左眼だけが大きく赤くて不気味だからという理由でどの船からも断られていたところをスカウトした。普段は、他の人を驚かせぬように眼帯をしている。

「別に、見た目がどんなだって構わねぇじゃねぇかよ。海に憧れてるもんはよ!それに、ものは使いようだ。そのウユニのカ、俺たちのために使ってもらおうじゃねぇか!」

「キャプテン・ホルス!」

ジャッカルは、顔をくしゃくしゃにした。ようやく海に出られるのか! 「おい、泣くんじゃねぇ。泣く海賊がどこにいる!しゃんとしとけ!しゃんと! これから、俺のことは親方と呼べ。わかったな!」

ライランカ近くの航路を航行中のこと、一隻の大型商船が通りかかった。

「じゃ、あれでガス抜きさせてもらうとするか。おい、野郎ども、ガス抜き開始だ!」

「おー!」

船内が沸き立つ。乗組員は戦いの喜びに打ち震えながら、銘々武器を持ち上げ、歓声を上げる。

「いいか!いつも言っとるが、金品は奪うな。女も犯すな。女子供も絶対に攫うな。外道なことをやりやがったら、 お前ら全員、海にたたき落としてやるから、そう思え!行くぞ!」

「おー!」

船員たちは一斉に大型商船になだれ込む。

いつもなら、そのまま海賊の圧縮で済むのだが、この時は様子が違った。先に行った乗組員の話では、どうやら一人で海賊たちを押し戻している奴がいるらしい。

ホルスが見に行くと、それはなんと女性警官である。

「なんと!女子(おなご)か!これは ますます面白い、俺も相手になってもらおう!」 そうして 真正面から構え合って初めて、ホルスはようやく婦警の剣の色に気づいた。

「おや?その剣は・・・。」

「怯むか!女だと思って侮るな!」

ホルスと、その婦警との戦いが始まった。ホルスとて、ヴィクトル・ルマールの元で佐竹織部から剣を仕込まれ、その後も道場破りで船の建造費を貯めてきた剣豪である。もし剣士試験を真面に受けたら、警察官級剣士クラスだろうと思われる。その彼が、互角に、しかもゆとりなく戦わねばならぬほどの相手は、早々いるものではない。

「お、なかなかやるではないか!」

「この船を守るのが私の務めだ!海賊行為は許さぬ!」

ホルスの腕を以てしても、本当に手強い相手だった。少しでも隙を見せればやられる・・・。

海賊たちも、大型商船の乗組員たちも、二人の戦いを固唾を呑んで見守っていた。

「すげー!あの親方を相手にして、あんなに戦ってる!」

「あんなの見たことない!あの婦警、強いな!」

婦警は、どんどん突っ込んで来る。ホルスは相手の手腕を見定め、自分の闘争本能が満たされると、相手との 距離を置き、自らの剣を収めた。

「何故退く?!」

「あんたが、俺にとっては姪のような者だと知れたからさ。」

「姪だと?私は海賊風情に姪呼ばわりされる覚えはない!」

「その剣を持つ者は、自分の教え子だと俺の兄貴が言っていた。つまり、あんたは俺にとっては姪のような者に 当たるってこった。さすが兄貴だ、これほど凄い剣士を育ておおせたか。」

「どういうことだ?兄貴とは誰なんだ?」

「俺の名はホルス。いつかまた会おう!」

海賊たちを全員引き上げさせて、彼は去った。

船に帰ってから、彼はしまったと思った。あの婦警もおそらくアレクセイを知っていよう。おめでとうと伝言を頼むのだった・・・。

大型商船の船長が婦警の元に寄ってきた。

「いや一、お陰様で被害は全くありませんでした。本当にありがとうございます、春野警部。」

その婦警こそ、アイユーブ警察学校で忍びの技を教えていた春野亜矢であった。現在は警部資格を取って任 務に当たっている。

この黒い剣を見て、あの海賊は自分の兄貴の教え子だと言った・・・。

この剣を持つ者・・・アイユーブ警察学校・・・。指導員の誰かか、それともファイーナ姫・・・は女性だ。あの男は 『兄貴』と言っていたから、姫ではない。あとは、加賀警視正?!

そういえば、警視正は津沢衆から剣術を学んだと言っていた。あの海賊の太刀筋も津沢衆に通じるものがあった。この船はこれからライランカに寄港する。上陸したら、尋ねてみよう・・・。

「うん。ホルスは、いかにも私の弟だ。」

警察学校時代には加賀篤史と名乗っていたクファシル公卿は、あっさり認めた。そうして、以前アレクセイたちに話したこともある自分の生い立ちを亜矢に話して聞かせた。(* 第三章 二.ライブラの記憶 を参照されたし。)

「そうだったのですか。警視正には何か違うものを感じておりましたが。」

「あいつは無国籍を通しているからな。しかし、根は良い奴なのだ。時々船を襲うのは、自分や乗組員の闘争本能を満足させるためで、略奪はしない。分かってやって欲しい。」

「そういえば、彼の腕は相当なもの。被害があってもおかしくなかったのに。むしろ戦うこと自体が目的だったとすれば、それも納得できます。」

「ホルスには、あの似顔絵も渡してある。案外、力になってくれるかもしれん。」

「クファシル公卿殿下・・・。どうもありがとうございます。」

二. 謎の用心棒

ホルスは、ターコイズの港で燃え残ってボロボロになった船を見た。

「何でえ、こりゃ?これじゃ、海賊船じゃなくて、幽霊船じゃねぇか。」

「あーぁ、ほんとにえれ一目にあっちまった。乗組員たちも全員半殺しで、もう抜けるって奴がほとんどだ。

俺もとうとう年貢の納め時かもしんねぇ。自分がされてみて、初めて分かる。ひでぇことしてきたんだな、俺。・・・ 本当に愚かしい悪夢だぜ。」

船主は項垂れた。この船主、実はそれこそ本当の海賊である。思いつくだけの悪事を重ねてきていた。この男にとってみれば、ホルスは同じ海賊仲間であり、割と普通に話せる相手だったのだが。



船主の話によると、いつものように商船を襲ったのだが、それが運の尽き。その船にはとてつもない腕の用心棒がいて、逆に押し戻されたばかりか、乗組員たちは半殺し、船にも火を放たれて、命からがらここまで戻って来たというのである。

「ほほう、海賊相手にそこまでやれるとは。なかなかいねぇぜ。どんな奴か、一度お目にかかりてぇもんだ。」 「冗談じゃねぇ! いくらあんたでもあの男は無理だ。やめとけ。」

「で、その船の名は?」

「ボイド・ポセイドン・・・。あぁ、もう思い出すだけで恐ろしいぜ。・・・」

「ボイド・ポセイドン・・・。」

ところが、である。そのボイド・ポセイドン号に、数日後にホルスは遭遇した。無論、そのまま通りすぎれば何も起こらないはずだった。

だが、根っからの剣豪のホルスは手強い用心棒と聞けばやり合いたくて仕方がない。乗組員たちにこう言い渡した。

「今回は、俺ひとりで行く。誰も手出しなんねぇ。そして、もし俺が負けたら、ジャッカル、お前のテレポートで船ごとターコイズまで飛べ!そのあとはお前に任せる。」

「そんな、ホルス!」妻のノアが泣きそうな顔をする。「やめて!お願い!」

部下たちもロ々に止める。しかし火がついた好奇心は止められない。ジャッカルは黙っている。彼は、もしホルスが殺されそうになったら、彼の意に反してでも、強制的に彼を引き上げさせるつもりだったのだ。

ホルスはボイド・ポセイドンに乗り込んだ。当然、自衛警備団が出てくるが、やはりそれでは物足りぬ。彼の目的はただ一つ!

「やい、用心棒!さっさと出てこい!俺はお前とだけ戦いたいんだ!」

最後に出てきた顔を見て、ホルスは驚いた。「お前は?!」

それは、いつかクファシルから渡された似顔絵とよく似た男だったのだ・・・。

「おい、お前!名は何と言う?言え!」

「うるさいっ!この船の邪魔をする者は許さぬ!」

男は剣を向けてくる。恐ろしいほどの速さだ。並の剣士なら、瞬間的にやられている。

(ん?この太刀筋、どこかで・・・。 そうか、この間の婦警に似ているんだ!)

「おい、名前は何と言う?教えろ!」

その時、横から別の声が答えた。

「海賊さん、その人にはいくら訊いても無駄ですよ。その人は記憶を失っているのです。

私は、この船の船長です。どうやら貴方の目的はこの人のようですね。他には目もくれない貴方を見込んでお話ししましょう。・・・アルベルト、刀を退いていいですよ。」

「しかし・・・。こいつは!」

「おそらく大丈夫です。そうですよね、海賊さん?」

「おう!俺はただ強い奴と戦えりゃ他にゃ興味はねぇ。だが、こいつの顔を見て、目的が変わった。こいつを探してる人がいるんだ。貰った似顔絵よりは少し年が行ってるようだが、まず間違いねぇ。証拠はその太刀筋だよ。

しかし、記憶喪失とはなぁ・・・。」

ホルスは剣を鞘に収めた。これ以上は戦わぬという意思表示である。

アルベルトと呼ばれた用心棒は黙っている。代わりに船長が話しかける。

「この人は、十五年ほど前、誰もいない砂浜で倒れているところを、うちの乗組員が見つけて介抱したのです。でも、どうしても自分が誰で、何故そこにいたのかも分からんというので、とりあえずうちの船に乗せてみたら、いや、強いの何の。それで、用心棒になって貰ったようなわけで。」

「そうだったのか。それなら、こいつを俺に預けてくれんか?心当たりがある。」

「お前、海賊だろ?信用出来るもんか!俺をこの船から離しておいて襲わんとも限らん。」 用心棒が言った。

「ま、そう思われても無理はねぇな。だが、俺は是が非でもお前をある人に引き合わせねばならん。悪いが、少しの間だけ付き合って貰うぜ。いいよな、船長!それとも、この男の記憶を放っておいて、生涯用心棒のままにしておく気かい?そりゃぁ、非道ってもんだぜ。」

船長はホルスを見つめた。この海賊、綺麗な目をしている・・・嘘ではないようだ。

「わかった!連れて行くがいい。」

「船長!」男は動揺した様子だ。

「だが、もしその心当たりというのが違っていたら、必ずこの船に戻してくれ。約束できるか?」

この言葉で、男も船長の真意がわかったらしい。微かだが笑みが浮かんだ。

「あぁ、約束しよう。俺はホルス・ジルティガー。俺の名と我が船ローズナイトの名に賭けて、もし人違いだったら必ずこの船に戻す。もっとも、この男は自分の意に反した拘束などすぐに外してしまうだろうがな。

・・・・そういう訳だ。お前の身柄はしばらく俺が預かる。決して危害は加えんし、いつでも帰してやる。だが、もしお前の帰りを待っている者たちがいるとしたら、そのままで良いはずがねぇ。そうだろう?

それでも俺が信用出来ねぇっていうんなら、とりあえずの目的地を教えてやろう。ライランカの湖畔宮殿にいる クファシル公卿に会うのさ。」

船長と用心棒は驚いた。ライランカの湖畔宮殿だと?海賊と王室に、どんな繋がりがあるというのだ?!

三. ローズナイト号

ホルスが船に戻ると、すぐさま彼に抱きついてきた者がいる。女房のノアだ。

「ホルス!よかった!もう、心配したのよ!本当に無事でよかった!」

「ノア、心配かけてすまなかったな。だが、今は抱きつくの止めろ。客人がいる。」

「あっ!ご、ごめんなさい!あら?・・・この人・・・。」

「そうだ。兄上に尋ね人と言われた似顔絵にそっくりなんだよ。船長の許可をもらって連れてきた。記憶喪失なんだってよ。厄介なことになっちまったが、しょうがねぇな。

用心棒さんよ、俺の女房だ。」

「記憶喪失・・・。」

ノアは、用心棒を見た。



「なんだよ。ジロジロ見るな。それに、さっきからずっと聞いてりゃあ、用心棒用心棒って!俺にもアルベルトって 名前があるんだ!」

「だが、そりゃあの船長が付けただけだろう?ま、折角だから、身元が分かるまで、その名前で呼んでやろう、アルベルト。」

「けっ!」

アルベルトは、嫌気がさした。まさか自分が海賊船なんぞに乗るとは思ってもいなかった!

「まず電報打たねぇと。こっち来い。」

その途中の廊下に大きな掲示板があった。

「これを見ろ。お前と瓜二つだ。俺がお前を連れて行く理由がこれだ。事のあらましは、あとだ。まずは電報を打つ。」

「これが俺・・・。」

「ガーゴイル、電報ー本頼む。宛先は、ライランカの湖畔宮殿、クファシル殿。

ニガオエノオトコ ミツケタ キオクソウシツ ライランカニツレテイク ホルス、以上。」

「アイアイサー!」

通信士らしき男は言われた通りに電報を打った。

「・・・話は本当だったんだな。疑って悪かった。」

「まぁ、分かってもらえりゃいい。ライランカへは三日ほどかかるな。そのあいだに、俺の昔話を話してやるよ。俺 たちが何故そこに行くのかも分かるだろう。」

彼らは操舵室に入った。

「あ、親方!ご無事で!よかったー!」クルーがそう言いながら集まってくる。

「あぁ、みんな心配かけて悪かったな。こいつはアルベルト。大事な客人だ。しばらく乗ってもらう。」

「親方、その人は!似顔絵の人じゃないですか!」

どうやら、この船の全員、あの似顔絵を知っているらしい。それもそうか・・・・。アルベルトは胸をなで下ろす。もちろん油断はならない。だが、だんだんこの海賊の話が本当らしいと思えてきたのである。

ホルスが叫ぶ。

「進路変更!本船はこれよりライランカへ向かう!」

「アイアイサー!」

この船には海賊らしさがあまりない。乗組員はきちんとセーラー襟の海賊服に身を固め、隅々まで掃除が行き届いている。各々が剣を下げている事以外は、まるで一般商船のようだ。

ホルスは彼を船長室に通し、真新しい赤ワインのボトルのコルクをナイフで引き抜いた。

「まず言っとくがな、俺たちは略奪なんてゲスなことには興味ねぇ。ただ、時々はものすごく強い奴と戦いたくなるだけよ。そこんとこは分かれよな。

この船の建造費だって、俺が道場破りで貯めた金だ。血で染まった金じゃねぇ。」 ホルスは笑った。

「それじゃ、本題といくか。・・・」

昔、ヴィクトル・ルマールという環境設計家がいた。彼は、世界各地の孤児院から一人ずつ子供を引き取って、 自分の理想のために子供たちに知識と技術を叩き込んだ。世界平和と環境との共存だ。そのうちの一人がマク タバ人の俺。

ホルスは元々の名だが、ルマールという名前じゃ迫力がねぇから、ジルティガーにした。強そうだろ? だけど、マクタバは砂漠の中に点在するオアシス連合国家だ。皇帝も、たまに起きる揉め事の仲裁をするくら いしかすることがない。

もともと船で海に出たかった俺は、道場破りで金を貯めてこの船を作った。国家なんて厄介なものに振り回されたくなかったから、無国籍でな。

周りからは海賊呼ばわりされてるが、そんなことはどうだっていい。ただ、世界中いろんなとこに行って、旨いもん食って、いろんな人と会って、強い奴と戦えれば満足なんだよ。

しかし、俺にも信念がある。非道なことは大嫌いなんだ。醜くて儚いもんだぜ。

ということで、俺には血の繋がらないきょうだいが幾人かいる。ライランカの湖畔宮殿にいるクファシル公卿というのも、俺の兄貴だ。もともとは、内密に皇帝の補佐をしながら、オルニアで警察官をやってたんだが、ライランカの姫さんと結ばれちまってよ。こっちが驚いたぜ。

お前そっくりの、あの似顔絵も、その兄貴から尋ね人だと言われて渡されたもんだ。詳しいことは知らないが、 お前の顔を見て、俺が驚いたのは、そういう訳だ。

それから、滞在する予定の客室に案内するというので、ついて行くと、途中で十歳くらいの男の子に会った。 「馬鹿野郎!俺が許可する以外は上には出てくるなと言ってあるだろうが!」

「だって、たまには親方に会いたいんだもん。」

その子が言った。

ホルスが叱りつけた。

「おや、この船は子供も乗せるのかい?」

「乗組員たちの家族だ。一緒に暮らさせてやらねぇと、男どもが悪さを起こすかも知んねぇからな。俺も女房と一緒だし、自分だけ夫婦で一緒にいるというのも気が引ける。

下には学校もあるぜ。なんたってこの船は由緒正しい船なんだ。子供たちにもそれなりの職に就いて欲しいのさ。

それにしてもバルゴロス、お前は医者になりてぇんだろ?俺なんかに会いに来る暇があったら、勉強しろ!勉強!」

ホルスは子供を下へと続く階段へと誘導して、アルベルトに背を向けながら言った。

「ほう、海賊に『由緒正しい』があるのかい?」

「なんとでも言え。・・・しかし、考えてみりゃあ、お前にも似顔絵を配ってまで探している者がいることは確かだ。も しそれが人違いでなかったら、会わせてやりてぇなぁ。」

[• • •]

俺を探している奴とは、一体どんな奴なんたろう。そもそも俺は何者なのだ・・・。



四. 滝つぼ

ホルスから電報を受け取ったクファシルは、すぐさま海洋警察ライランカ支庁に飛んだ。支部長に面会を求め、 挨拶もそこそこに本題を切り出す。

「実は、かねてから春野君が探している人物が見つかり、船でこちらに向かっているらしい。

忙しいこととは思うが、春野君を今すぐにでもライランカに呼び寄せられないか?一人の一途な女性の幸せがかかっている。何とかお願いできぬだろうか?」

「そうですか!あの春野君の希望が遂に叶うのですな!。早速現在位置と予定を調べさせます。」

支部長も、春野亜矢のことはよく知っている。本庁のマーベラス長官からも便宜を図るよう指示されているし、 それに王室のお声掛かりもあれば、大っぴらに動いても問題はなかろう。

「しかし、気になるのは、弟が『キオクソウシツ』と打ってきていることだ。再会して、すんなり解決とはいかんかも しれん。」

「そうなんですか。記憶喪失とは、厄介ですな。」

その日、春野亜矢はライランカから直接無線が届くほど近い海域で、商船を護衛してきていた。 ライランカ支庁から無線連絡を受ける。

「春野君か?クファシルだ。聞こえるか?」

「えっ?クファシル公卿殿下?何故この無線を?」

「春野君・・・落ち着いて聞いてくれ。」

無線機の向こうで、相手がひと呼吸置くのが分かった。

「ホルスから、似顔絵に似た男を見つけたと知らせてきた。ライランカに向かっているようだ。調べてみたら、あと三日ほどで着きそうな位置にいる。

まだ君の許嫁本人かどうかは分からない。だが、君に会わせてやりたい。

いいか、くれぐれも無事にライランカまで来るんだぞ!こういう時に事故は起こりやすい。絶対に来い! それから・・・彼はどうやら記憶喪失らしいのだ。覚悟して来るんだ。わかったね?」

さすがの亜矢も言葉を失った。

集・・・・彼が見つかった?とうとう会えるのか?!だが、記憶喪失だと?!私を忘れているというのか! 「春野君!気をたしかに持て!こちらに着くまで、とにかく任務を全うすることだけを考えろ!あとは、私が手配しておく。幸運と無事を祈る!以上だ。」

クファシルからの無線は、そこで切れた。 亜矢は、その場にへなへなと座り込んでしまった。 同僚のマティスが 慌てて彼女を支える。

「春野君!」

亜矢を乗せた船は、何事もなくライランカの港に接岸した。隣には見覚えのある黒い帆船が停泊している。これは、このあいだの・・・?!

「春野君!こっちだ!」

港の中央に、クファシルとホルスが並んで立っていた。

「よお、婦警さん。似顔絵の依頼主がまさかあんただったとはな。・・・全く奇遇だぜ。」



ホルスが言った。

「貴方は・・・その節は、クファシル殿下のお身内とは知らず、失礼いたしました。春野亜矢です。」

「良いってことよ。海賊を取り締まるのは警官として当然のことだ。

だが、これからが問題だぜ。これから顔を確認してもらうが、奴は記憶を失くしている。あんたを見ても分かるかどうか・・・。気をたしかに持って会うんだな。」

「はい。」

亜矢は覚悟を決めて来た。とにかく会わねばならぬ。

「ジャッカル!」

ホルスが、ローズナイト号で待機していたジャッカルを呼んだ。

ジャッカルと共に歩いてくる人物がいた。・・・

「隼・・・!」

亜矢は、ゆっくり近づいた。その顔を確かめながら、これまでの時間の中を泳ぎながら、目の前まで歩いた。頬に手を当てようとする。

「お前、誰だ?」

男は亜矢の手をよけた。亜矢は手を下ろした。やはり記憶がないのか?私を忘れてしまっているというのか?「隼・・・・。私はお前の許嫁だ!本当に忘れてしまったのか?!」

「悪いな。覚えてねぇんだよ。何もかもが闇の中だ。何か証拠があるのか?」

言葉遣いまで変わっている・・・。証拠といえば・・・そうだ!

「隼・・・右の鎖骨あたり、肩口を見せてみろ。赤アザがあるはずだ。」

彼は、服を肩口だけ脱いだ。そこには彼女が言う通り大きな赤アザがあった。表からは見えないこのアザを、この女は知っている・・・。

今、俺の目の前で涙を溜めているこの女は、本当に俺の許嫁だというのか・・・?

「どうやら、間違いはないようだな。」

ホルスが言った。

「アルベルト、お前の本当の名前は、ハヤブサというらしいぜ。この婦警さんは、ずっとお前を探し続けてきたらしい。

ま、今すぐに思い出せと言っても無理だろうが、しばらくはそばにいてやれ。」

その男・ハヤブサは、夢見心地で聞いていた。ハヤブサ・・・それが俺の名?目の前にいるのが許婚?・・・やはり分からない。だが、彼らは嘘をついてはいない。それだけはわかる。

「春野君、マーベラス長官には、私からすでに一ヶ月間の有給休暇を頼んである。

君のことだ、何かしら策を考えてあるのだろう?どんなことでもいい、やってみなさい。」

「クファシル殿下。・・・それなら、ひとつお願いがございます。私と彼を、オルニアに行かせて下さい。荒療治になるかもしれませんが。」

「しかし、まさか海賊船に婦警さんを乗せてやるわけにはいかねぇしなぁ・・・。」

ホルスが頭を掻いていると、横にいたジャッカルが口を開いた。

「私がテレポートで飛ばしましょう。正確な地点を教えて下さい。」



彼らがテレポートされて消えると、クファシルがジャッカルに礼を言った。

「ありがとう。上手くいくといいのだが、」

「きっと上手くいきます。あの人の思いは強い。彼にそれがわからぬはずがありません。たった三日付き合っていただけですが、彼は勘が鋭い人です。クファシル殿下、あのお二人は生まれついての忍び・・・ですよね?」 「何?」ホルスは驚いた。

「それじゃライブラ兄(にい)、あの二人も織部さんと同じだってぇのか?!」 クファシルは答えた。

「あぁ。元々『忍び』だということでは同じなんだ。ただ、織部さんとは同じ一族ではないらしい。」 「そうだったのか。俺はてっきりあの婦警さんの剣はライブラ兄の直伝かと思ってたぜ。」 「とんでもない。彼女のほうがはるかに上だよ。今もし真剣に立ち会ったら、僕のほうが負けるだろうな。」 「ライブラ兄・・・・。」

二人は、故郷の村に来た。

「ここが私たちの故郷、坂棚村だ。見覚えはないか?」

「ないな。それよりも、お前の名前を教えろ。呼びようがねぇ。」 女は彼を見た。

「そうか、思い出せぬか。ならば、思い出すまで待ってやる。来いっ!」 女は、彼を滝が川に流れ込むところまで引っ張ってきた。そのまま滝の裏へと入っていく。

「ここは・・・。」

男が辺りを見回すと、そこは小さな洞窟のような空間だった。女は服をかなぐり捨てる。

「な、何をする?!」

「隼・・・。本当に覚えておらぬのか!お主はここで私を抱いたのだぞ!」

女はどんどん近づいてくる。男は、思わず後ずさりした。そうして、突然目の前の光景が変わり。体がふわっと 浮かんだ。滝から落ちていく。

「しまった!」女の声が聞こえた。

水の中で、彼の体はもみくちゃになり、回転しながら流されていた。と、その中に浮かんだ顔がある。

「かえ・・・で・・・」

彼の意識はそこで一旦途絶えた。

目を覚ますと、女が心配そうに自分を見ていた。

「大丈夫か?まさか手練れのお主が流されようとは思わなんだ。許せ。」

「かえで・・・。」

「隼?お主、今、何と言った?!」

「お前は楓・・・俺の許婚だ!そうだよな!」

彼女の目から涙が落ちた。

「やっと思い出したか、この馬鹿!馬鹿!大馬鹿野郎!・・・」 女は男の胸を幾度も叩いた。涙が止まらない。



「楓・・・。心配かけたな・・・。」

隼は、彼女をきつく抱きしめた。生き別れてから、十六年の月日が経っていた・・・。

五. 月明かりの窓辺で

一時間後、二人は村の長老に会いに行った。長老は代替わりして息子が後を継ぎ、忍びから遠退いて従業員を多く抱える大規模な稲作農家になっていた。今の当主は二人を見ると、たいそう驚き、また懐かしがってくれた。

二人はそこで互いにこれまでの経緯を話し、改めて十六年の月日の長さを感じた。

「それでは、その制服は本物なのだな。」

「はい。紫政帝陛下には、本当にお世話になりました。私と桔梗は今、正式な警察官です。」

彼らと幼馴染みの桔梗は、彼女と同じく警部資格を取ってアイユーブ警察学校で指導官になっている。

「そうか。真っ当な職を得ているのだな。して、隼、そなたはこれから如何に生きていく所存か?また船の用心棒か?それでは二人また離れ離れではないか。」

隼は、少し考えてから答えた。

「私も今楓の話を聞いたばかりで、自分の将来のことはまだ決めかねますが、できる限り楓のそばにいてやりとうございます。そのことを優先して生業を決めようかと。」

「隼・・・。」

楓=亜矢は、胸を熱くした。やはりこの人は変わってはいなかった・・・。

「それで、二人とも今日はどうするのだ?よかったら、一晩泊めてやってもよいが。腹も減っておろう。」 「いえ、お気持ちだけで十分でございます。お世話になった方々がライランカで待って下さっているはずですので。」

亜矢は、クファシルとホルスに何かしらの連絡を付けなければならなかった。すべてはそこからなのだ。

それから、二人はオルニアの首都・湯井岡市に来た。忍びの脚では、村から湯井岡市まで二時間もあれば着いてしまう。

「これから、どうするのだ?」

「明禅館に行く。紫政帝陛下には、本当にお世話になった。一時は戸籍係にも置いていただいたことがある。お礼のご挨拶をせねば。

また、クファシル殿下とホルス殿にも、お主が記憶を取り戻した旨のご報告をせねばならぬ。」

実は、その紫政帝は今この世にはいない。彼は一年前に亡くなり、皇太子だった風馬が、玄洋帝と号して即位している。亜矢が名前を名乗って謁見を求めると、すぐに謁見室に通された。

「亜矢!久しぶりだな!・・・二人いると聞いて、もしやと思ったが、遂に会えたのだな。本当におめでとう!」

「はい!両陛下のお陰を持ちまして、この度めぐり会うことができました。心より感謝申し上げます。」

亜矢は膝をつき、深々と頭を下げた。隼も彼女に合わせて礼を尽くす。

「そうか。父が生きていたら、さぞかし喜んだことであろう。

さて、隼とやら、その顔をよく見せてくれ。亜矢は、君をずっと探し続けた。その一途な思いを君は生涯かけて 受け止めなければならぬ。君にそれが出来るかな。」 「陛下・・・。」

その時の隼の顔を、亜矢は生涯忘れまいと思った。強い決意と優しさに満ちた男の顔だった。

「亜矢は、私を待ち続けてくれました。世界中の海を巡ってまで探し続けてくれました。その強い思いは、私にとってかけがえのない宝です。

私は、彼女との結婚を望みます!」

「隼、よくぞ申した! それでこそ、亜矢が惚れぬいた男よ!この玄洋帝風馬、君たちを心より祝福しよう!」 「陛下・・・ありがとうございます。」

「そうと決まれば、早速結婚式の支度を整えなければ。

まずは、隼、君も一般戸籍に入れなければならぬ。名前は、実は父がもう決めてある。烏丸徹・・・で、どうだ? 同じく鳥の名を含み、何事もやり抜く徹底の徹と書く。」

「紫政帝陛下は、そこまでお決めになっていたのですか!」

亜矢は、改めて老帝の懐の深さを思った。その死に間に合わなかったことが心から悔やまれる。

「玄洋帝陛下、ライランカのクファシル殿下にも、お礼とご報告をしたいのです。お電話をお借りできますでしょうか?」

クファシルは、電話口でたいそう喜んでくれた。

「本当におめでとう!ホルスとアリョーシャ、レオにも伝えるよ!

どうやったかは聞かなくてもよいが、こんなに早く記憶を取り戻せたとは。早速結婚式だな!可能なら参列させて貰いたい。」

「ありがとうございます。本当に皆様のお陰でございます。お礼の申し上げようがございません。

・・・ファイーナ様にもお知らせ致しとうございました・・・。」

亜矢はまた泣き出しそうになるのを堪えた。

ますよう。」

「大丈夫だ、春野君。ファーニャも今、私と共に聞いているよ。私の中にいるのだからな。」

「クファシル殿下・・・。そうですよね。 玄洋帝陛下が、式の支度をして下さるそうにございます。殿下におかれましては、どうかそれまでお待ち下さい

「わかった。彼にもよろしく伝えてくれ。結婚式の詳細が決まったら、また連絡してくれたまえ。」

久しぶりに聞く、かつての警察学校の校長の言葉遣いであった。クファシル殿下はわざとその言葉遣いをして 下さったのだろう、と彼女は思った。

その夜、二人の宿泊室には明禅館内の客間があてがわれた。

「しかし、船に乗って海外を回っていたのでは、道理でいくら探しても見つからぬはずだ。しかも記憶喪失ときている。」

亜矢と徹は浴衣を着て、月明かりの窓辺で寄り添っている。

「本当に苦労をかけたな。あの当時、俺はウユニの地図を作れという命を受けていた。ところがウユニはその 時々に応じて空間構成が変化してしまう。ならばと切り立った崖を登って城に入ろうとしたところ、そこから海に落 ちたらしい。

そこを運良く通りかかって、拾って用心棒にしてくれたのが、ボイド・ポセイドンという商船だったのだ。

ホルス殿は、なんだか強い用心棒がいるというので、挑戦しに来たらしい。だが、俺の顔を見て、心当たりがあるからとライランカに送り届けてくれたのだ。

本当に、出会いというのはありがたいものだ。きっとそれも、お前がずっと俺を探し続けてくれたお陰なのだろうな。

しかし、ウユニに行く前にお前を抱いて、果たしてそれで良かったのだろうか・・・と、今になって思う。あの時、 俺はお前が偵察かなんかに行かされて、もし誰かに身体を奪われでもしたらと思って、まだ初々しかったお前を 抱いた・・・。 重荷になってやしなかったか。」

「何を申す、決してそんなことはない!そんなことを考えていたのか、馬鹿!あの日があったから、私はここまで来られたんだ。

隼・・・いや、徹・・・これからはずっと一緒だ!離れるでないぞ。」

「そんな台詞は、男に言わせろ。・・・・亜矢、本当に、ずっと一緒にいような。今までの分を取り返すんだ。」 そうして話しているうちに、亜矢の体が重くなった。顔を見ると、いつの間にかすやすや眠っている。

徹は彼女の頬に手を触れた。瑞々しかった肌は柔らかく熟れて年齢を感じさせる。こいつは俺のために方々を探し回った。どんなにか辛かったことだろう・・・。

それが安心して一気に疲れたんだな。今日はいろいろ有りすぎた。

記憶喪失の俺と会って、村まで帰って、滝に落ちた俺を助け上げて・・・ん?待てよ。俺が記憶を無くした時と今日、どちらも高いところから水の中に深く沈んで意識が無くなるという点で同じではないか?!

もしかしたら、俺の記憶が戻ったのは、同じ体験、それも命に関わるような臨死体験が起きたせいなのだろうか・・・。

六. 咲き誇る薔薇たち

亜矢が徹を連れて戸籍課に入ると、かつての同僚たちはどっと二人を取り囲んだ。皆、口々にお祝いの言葉を贈る。そして、手続きの後、彼は正式に『烏丸徹』となった。

「結婚式には、皆を代表して、私が行かせてもらうよ。

烏丸君、君が本当に羨ましいよ。彼女を大切にしてやってくれ。」

戸籍課の課長・保坂守が言った。亜矢の元上司である。初対面でどんな対応をとったらよいかがわからなかったが、とりあえずは元部下の婚約者ということで良かろうと判断した。

「皆様には 彼女がお世話になったそうで・・・。本当にありがとうございます。」

徹も、その立ち位置でいた。

言葉遣いも、普通の市民と同じになるように心がけている。

それから、オルニア警察宮廷部にも顔を出した。ここには、警察学校の同期生・宮部淳一と小久保美穂がいる。当日は、たまたま二人とも出勤していた。

「遂に会えたのね!ほんとによかった。おめでとう!」

美穂は亜矢に抱きついた。

「式はいつ?」

「まだ決まってないの。昨日こちらに帰って来たばかりなのよ。」



彼らには、徹が記憶喪失だったことなど告げる必要はなかろう。

「とにかくよかったな。おめでとう。ところで、それが海洋警察の制服なのか。似合ってるな。

鳥丸君、君も警察官になるのかな?亜矢さんが惚れ込むくらいだ。きっと腕も立つのだろう?」 「まだ決めていませんが・・・。」

そうだな、それもいいかもしれない、と徹は思った。

淳一が自ら進んで発言したのはそれっきり、相変わらず無口であった。その無口な彼の口から、美穂と結婚していることを聞き出すのには多少時間を要した。そして美穂が現在妊娠三ヶ月であることも。

「貴女達も結婚していたのね。おめでとう! 今まで知らずにいて、ごめんなさいね。赤ちゃんが産まれたら、見に来ていい?」

亜矢は、目の前で照れくさそうにしている淳一と、恥じらっている美穂にお祝いの言葉をかけた。

確かにお似合いだわ、と亜矢は思った。いつか、捨て猫を見つけて懸命に世話をしていた淳一を思い出す。その優しさが美穂を幸せにしていることは、容易に推測できる。

「ところで、君たちの剣は何故黒いんだ?たしか剣士は白が最高レベルのはずだが。」

また二人きりになった時、徹が尋ねた。

彼は、これからは古い要素が強い忍び言葉や、乱暴な船乗り言葉を封印して、一般的な市民言葉を使い続けようと決めた。それを亜矢にも宣言すると、彼女もとても喜んだ。

「そうね。貴方もこれからは一般市民なんだもの。それが良いわ。」

彼はまだ警察官級剣士が創設されていることを知らなかったのだ。亜矢は、アイユーブ警察学校のことをより 詳しく教えた。

「そうか。忍びの技が使える剣士か・・・。それを君と桔梗とで教えたのだね。

忍びは、もう組織としては存在しないと、昨日、村長(むらおさ)からも聞いた。確かに、最強の剣は、警察官が持っているほうがいいのかもしれない。時代は移り変わるものだな。」

とりあえず明禅館の客間で式までの日々を過ごしていた彼らの元に、クファシルからの封書が届いた。開けてみると、二通の手紙が入っており、クファシルとホルスからのものだった。

「結婚おめでとう。結婚式には行かせてもらおうと思っている。アレクセイも行きたがっているが、二人同時にライランカを留守にするわけにもいくまい。許してくれたまえ。だが、レオには何とか都合をつけさせる。

また、ホルスのことだが、海賊と呼ばれている以上、海洋警察ゆかりの結婚式に姿を見せるわけにはいかぬと 言い張って聞かぬ。それなら手紙を書けと説き伏せ、このような形にした。

それでは、結婚式当日に会おう。 クファシル」

ホルスの手紙には、こう書いてあった。

「結婚おめでとう。海賊の俺では、二人の晴れ舞台に姿を現すことはかなわないが、心からお二人の幸せを祈っている。 ホルス」

(ホルス殿、貴方が一番の恩人なのに・・・。いつかまた会ったらお礼を言います。本当にありがとう!) 徹は、子どもをあやしているホルスを思い浮かべた。



当日、二人の結婚式場になった明禅館の小広間はたくさんの薔薇で飾られた。

結婚式はささやかなものだったが、これまでに二人と縁があった人々が参列している。戸籍課の課長・保坂守もいる。

祝福役は、玄洋帝自らが買って出た。彼も、亜矢の一途さを見守ってきた一人である。

それから、ライランカのクファシル公卿。アイユーブ警察学校の前校長・加賀篤史警視正の今の姿である。 (ファーニャ、春野君の願いが叶ったぞ。君も今、見てくれているね。・・・)

ライランカ警察本庁所属、レオニード・カンザキ警部。亜矢の警察学校時代の同期生である。当時の名は、神崎リュウ。

海洋警察長官シオン・マーベラス。亜矢の現在の上司だ。彼は亜矢に言った。

「おめでとう。遂に君の苦労が報われたな。海洋警察に入った時の約束、覚えているだろうね?これからは、本 庁で後進の指導に当たってもらいたい。

そして・・・・烏丸君だったね、君を海洋警察にスカウトしたいのだが、どうかね。やってみないか?」 「えっ?僕でもいいんですか?!」徹は驚いた。

「我が海洋警察は、常に優秀な人材を求めている。これまでは多少過剰防衛らしきこともやったらしいが、長いあいだ一般商船を守ってきたのだろう? それは功績に値する。

君ならばおそらく筆記試験さえ通れば、少なくとも巡査試験くらいには受かるだろう。受かったら、是非うちに来てくれたまえ。歓迎するよ。」

「マーベラス長官・・・ありがとうございます。」亜矢が応えた。

「どうする、徹?」

「その筆記試験、受けさせていただきます。彼女と少しでも一緒にいられるのなら。」 即答だった。

大型商船ボイド・ポセイドン号の船長のシャルル・ボワール。徹が記憶喪失になった時、用心棒として雇ってくれていた人物だ。

「あの海賊の話は本当だったようだね。」彼は言った。

「今度会ったら、友として迎えてもいいな。向こうが良ければの話だが。」

今井はるか警部。元の名は桔梗、幼馴染みにして同じ忍び仲間だった。今では、アイユーブ警察学校で教鞭を 執っている。彼女もまた、亜矢を抱きしめて喜んだ。

「おめでとう!とうとう願いが叶ったのね。セルジオと滝田警部からも、よろしく伝えて欲しいって。」「あれ?どうしてセルジオって呼び捨てなの?」

亜矢がわずかに違和感を感じて尋ねると、はるかはクスッと笑った。

「実はね・・・彼とは婚約しているの。貴女達と同じように、私も今、とっても幸せなのよ。」



玄洋帝が祝福の言葉を述べ、宮部淳一と小久保美穂が、指輪を運んできた。徹と亜矢は、お互いに相手の左手薬指に指輪を差し込んだ。ここに、また一組の幸せな夫婦が誕生したのだ。

七. 臨時同窓会

結婚式のあと、玄洋帝の計らいで式場はそのままアイユーブ警察学校の同窓会の会場となった。かつてのアイユーブ警察学校の関係者が六人、これだけ揃うことはまずないであろう。

「みんな、元気そうで何よりだ。特に、春野君の夢が叶って結婚に至ったことは、誠に喜ばしい。更に今度、宮部君と小久保君のあいだには、子供が産まれるらしい。

本当におめでとう! 乾杯!」

クファシルが乾杯の音頭を取った。

「はるか、セロさんと婚約してるって言ったわね?本当なの?」

亜矢が問いただす。そのことは、同じくアイユーブ警察学校に残って指導している滝田光昭にしか伝わっていなかった。

「えぇ。でも、みんなに知らせる機会がなくてね。申し訳ありません。」

はるかは謝った。

「しかし、良い機会ができたじゃないか。これで警察学校の卒業生の結婚は私も含めて五組目か。とても感慨深い。

この際、馴れそめを聞かせてくれたまえ。ここにまだ一人独身が残っている。」

クファシルはレオニードの肩をたたきながら言った。

「クファシル殿下、そんな・・・困ります。」

レオニードは俯いた。

「レオ、君もそろそろ結婚適齢期じゃないか。大いに参考にしたまえ。幸せは多いほうがいい。

今井君も、何かきっかけがあったのだろう?」

「はい。実は・・・。」はるかは語り始めた。

はるかは三年間の派出所勤務を終えて、警部資格試験に合格、再びアイユーブ警察学校に指導官として戻った。セルジオ・カルルと滝田光昭が喜んで迎えてくれたことは言うまでもない。始めは、やはり同期生同士の付き合いだった。

それが、およそ半年前、ある日曜日の昼に三人で食事をしようという話になり、街中を歩いていた時のことである。微かな声が聞こえた。

「誰か・・・助けて・・・」

声がしたほうに走っていくと、一人の女性が川に流されている。前の晩に降った雨のせいで川は濁り、流れも 幾分か速くなっていた。はるかが咄嗟に飛び込み、セルジオと光昭は、たまたまそばの消防用具箱に入っていた ロープを取り出して投げ、流されていく二人を追いかけて走った。

はるかは、女性の体を捕まえてロープを巻きつけた・・・と、そこまでは記憶にある。



目を覚ましたのは、何故か病院の手術室だ。医師と看護師に名前を呼ばれていた。起き上がろうとすると、後頭部と右脇腹が痛い。

「痛っ!」

「お、気がつきましたか!よかった!」医師が笑顔を見せる。

「意識が戻れば、もうここから出られますからね。」

看護師が優しく声をかけ、彼女をストレッチャーごと運んでいく。灰色の扉を抜けたとき、聞き慣れた声が聞こ えた。

「はるか!」

セルジオが横にいた。

「手術は無事に終わりました。あとは快復を待つだけです。」医師が言った。

はるかは病室に運ばれ、セルシオがそのベッドのそばの椅子に腰掛けた。

「セロさん・・・私、どうして・・・?」

「君は、川で女性にロープを括り付けたあと川岸の流木に後ろから激しく打ちつけられて意識を失ったんだ。たまたま岸辺に引っかかったところを、タキさんと僕で引き上げて、女性と君を救急車に乗せて、ここに運んでもらった。 君は脳振とうを起こし、右脇腹に木が刺さって緊急手術したんだ。」

「そうだったの。それで、あの人は?」

「無事だ。少し水を飲んだらしいが、かすり傷一つなかったそうだ。」

「良かった・・・。」

「まぁ、な。でも、君が緊急手術だろ?心配したよ。」

「だけど私、しくじったのね・・・。怪我して意識を失うなんて。」

「今井君・・・。君は人を助けたんだ。名誉の負傷だよ。

それから、君に一つ謝らねばならないことがある。家族でなければ付添はできませんと言われ・・・。僕は君の婚約者だと言ってしまった。」

「えっ?どうして・・・?私、一人でも平気なのに。貴方だって知ってるでしょ。」

セルジオは、彼女を見つめた。

「セロさん?」

彼は、思い切って言葉を吐き出したようにみえた。

「君のことが放っておけなかった。助け上げたとき、君の体は軽かった。そのとき僕は、君が女性だということに気が付いてしまったんだ。眠っている時の君を見たら、とても帰ることなんてできなかった・・・。はるか、僕の婚約者になってくれ!」

セルジオは、彼女の左手を取って、薬指に口づけた。それは、オルニアにおいては婚約の証だった。 はるかは驚いた。

「セロさん、むやみにそんなことしちゃいけないわ。」

「むやみじゃない。僕は君を愛してるんだ!これからは名前で呼んでくれ。」 彼は、さらに指を絡めた。



それからセルジオは、彼女が退院するまで毎日、仕事帰りに通い続けた。彼女の怪我は完治まで一ヶ月を要するものだった。

(彼はただ怪我人の私を励ましてくれているだけなのよね。でも、それでもいい、今だけでも甘えていたい・・・。) いつしか、はるかはそんなふうに思うようになっていた。彼に手を触れられていると心が温まるのだ。

もちろん光昭も見舞いに来てくれるが、セルジオの時とは明らかに何かが違う。

「セルジオは、本当に君を心配している。あれは本気だ。」

光昭にもそう言われた。光昭自身は、あの当時から妻子持ちだった。既婚者だからこそ分かる勘がある。 「でも、まさか。」その時のはるかは本気にしていなかった。

そして、退院を一週間後に控えた頃には、もうほぼ傷も癒えていた。

セルジオが現れる時間に、彼女はわざと屋上庭園に行った。できればそのままやり過ごすか、他に人がいない 場所ではっきり断ろうと考えたのだ。

しばらくすると、セルジオが彼女を探してやって来た。

「ここにいたのか。」

彼は近づこうとする。彼女は距離を置く。

「はるか?どうした?」

「セロさん、私、もう大丈夫だから・・・。もう恋人の振りしなくていいから・・・。元に戻りましょ。」 彼女は後ろを向いた。涙を見せまいとしたのだ。後ろから、彼の声が聞こえる。ゆっくりとした声だ。

「はるか、僕は本気だ。愛してるんだ! 君が動けないうちに告白するのは、男として卑怯だと思い、愛の言葉や 口づけは控えてきたけれど、君もわかってくれていると思っていた。意外だったよ。君でさえも自分のことはわか らないんだね。

お願いだ、こっちを向いてくれ。近づくのを許してくれ。はるか、愛してる!」

「セルジオ・・・。」

まるで箍が外れかのように、はるかの心はセルジオに流れていった。彼女は振り返った。一瞬で抱きしめられ、唇を奪われた。彼が、再び自分の左手薬指に口づけするのもそのまま許した。

「私で、良いのね・・・。」

「君じゃなければ嫌だ。」

彼の胸は温かかった。

. . .

「感想はどうだ?」

話にすっかり聞き入っていたレオニードは不意を突かれた。クファシルだった。

「誰しもが通る道だ。君も自分一人のことを考えてくれ。止めはせん。」

「加賀警視正・・・。」

八. 閉ざされた藍色



「僕には恋することが遠く感じられてならないのです。結婚することが怖い・・・。」

レオニードは、うつむき加減で話し出した。二人はあのあと、レオニードの両親に会いに行き、今はライランカに 帰る船のデッキで潮風に吹かれている。

「両親にも、お前いつ結婚するんだと言われましたが、僕には人を幸せにする自信がないのです。

ライランカ人と結婚しても、僕はきっと相手の髪を見て、昔のつらさを思い出してしまうでしょう。そうかといって、もし他国の人と結ばれたら、また混血児が産まれる・・・僕は自分の子供にまた同じ苦しみ悲しみを味あわせたくないのです。

僕を産んでくれた両親には、とてもこんなことは言えません。」

クファシルは黙って聞いていた。そうか、君はそんなことを考えていたのか。手抜かりだったな・・・。

「みんな、僕を追い越していきます。子供の頃からそうでした。いつの間にか友達同士で食事していたり、旅行していたり、僕が知らない人と愛を実らせていたり、普通に生活している。それぞれに姿を変えていきます。

だけど、僕には何故かその普通の生活ができないまま、月日だけが過ぎていくのです。

混血児だからとひねくれるのも大人げないし、僕は僕なりに誇りを持って生きてきました。でも、やはり過去は捨てきれずに追いかけて来る。みんなを見ているのがつらい時もあります。

警視正もファイーナ様も、僕には分け隔てなく接して下さいました。また永遠に目上の方でもあります。だから、 お話ししています。」

レオニードは、船に切り裂かれ大きくなっては消えていく波のうねりを見ていた。

クファシルが口を開く。

「そうだったのか。今までそこまで考えが及ばず、すまなかった。話してもらえて嬉しいよ。それだけ信じてもらっているということだからね。

それにしても、普通の生活というのは一体何だろうね。

私だって、ファイーナを愛するようにならなかったら、何事もなくそのままオルニア警察の制服を着続けて生きていくつもりだった。君たちの卒業式の朝、私は万感の思いで袖を通したものだ。しかし、悔いはなかった。

人を愛するということは、全てを超えることなのだ。君にも、そのうちに分かる時が来る。何故なら君も今井君の話に引き込まれていたのだからね。」

ライランカに帰ったレオニードは、アレクセイの勧めで警視資格試験を受け合格、それを機に本庁宮廷警護課に課長補佐として転属になった。

「これからは、ここで後進の指導に当たってくれ。また、時々僕と立ち会うことで、一層の効果が期待できるだろう。それに、僕ももっと君と話したいしな。やっと念願が叶うよ。」

アレクセイはそう言ったが、実はこれには他に二つの意図が隠されていた。アレクセイとレオニード、二人の友情で孤独を緩めることと、レオニードの嫁探しのためだ。警護官になれば、王族の警護であちこちに行くことになる。つまり、派出所にいるよりはずっと行動範囲が広がるのだ。

レオニードが宮殿内の護衛警官詰め所に赴任して来ると、警護官たちは次々と彼に打ち合いを申し込んできた。

「是非ともお願いします、レオニード警視。」

(警視、か・・・懐かしい役職名だ。)



アイユーブ警察学校においては、警視といえばソフィア警視・・・ファイーナ姫のことだった。これからは自分が そう呼ばれるのかと思うと、誇らしい反面で気恥ずかしくもあった。

転属して二カ月ほど後のことだ。アルティオ上帝の護衛で、彼は栽培技術研究所に同行した。極北のライランカにおいては農業栽培研究も重要課題である。

「ここは、各国からの帰化人も多い。これはと思った者を招いて来てもらっている。途中帰化の者は、みな顔見知りだ。」

アルティオが言った。レオニードたちがそうであったように、途中帰化するには皇帝直々の許可を必要とする。 その時に帰化する者たちは全て皇帝と面会することになるのだ。

そのうちに何だか懐かしい香りが漂ってきた。

「上帝陛下、こちらをどうぞ。アップルティーでございます。」

一人の女性がティーセットを持って来た。アルティオとレオニード、随行した農林局次長、もう一人の護衛官に 茶を配る。

「あぁ、懐かしい香りだ・・・。」

レオニードが思わず漏らした言葉が聞こえたらしい。その女性が彼に声をかけた。

「あら、貴方も帰化された方なのですか?」

「はい。そうなんです。オルニアの籠野市出身なんですよ。」

「あら、私も同じです。」

「そうですか!」

彼は、懐かしさでいっぱいになった。

「ここは、本当に良いところです。でも、この国は閉ざされてもいますね・・・。」 彼女は他の人には聞こえないように言った。

「幼い頃、近所にオルニア人とライランカ人のご夫婦がいらして、お二人のあいだにはお子様がいらっしゃいましたが、髪が緑色で、お友達も少ないようでした。ライランカの方々はあまり国外にはいませんから・・・。 寂しかったんじゃないかと、今でも思います。 たしかその子、リュウ君、って言ったかしら。」

「えっ?!それ、僕です!」

「えっ?貴方、リュウ君?」

「僕の元の名前は神崎リュウ。貴女のお名前は?」

「私、歩(あゆみ)よ!吉川歩!まさかリュウ君だなんて。」

「なんだか話が弾んでいるようだね。知り合いかな?」

アルティオが二人の会話を聞きつけた。

「あ、上帝陛下!申し訳ございません。どうやら彼女は僕の幼友達のようです。」

「そうかそうか。それならばしばらく話していなさい。私は、他の部署を回ってくるから。」

「は、ありがとうございます!」

彼は敬礼した。アルティオは他の人たちと他の部屋に移動していった。



「驚いたよ、歩ちゃんがライランカ人になっていたなんて。」

「私も。あなたも帰化していたのね。あ、私の今の名前はエカテリナ・キッカワ、愛称はカーチャね。」

「僕はレオニード・カンザキ。レオって呼ばれてる。見ての通り、宮廷警護官だ。オルニアの警察学校でたまたまファイーナ様と出会って、連れてきていただいたんだ。

本当に懐かしいな。君はどうして帰化したの?」

「私は、家族ごと招かれたの。リュウ君、覚えてるかなぁ、うちの父が林檎栽培の研究者だったこと。」

「そういえば、君のお父さんは何かの学者さんだったような・・・。それでか。」

彼女とは、家が近所でよく遊んでいた。彼が十歳頃、彼女の家族はどこかに引っ越して行ってしまった。当時の彼には行き先が判らなかったが、まさかライランカだったとは・・・。

「うん。それにしても懐かしいな。今度、遊びに来て。父と母もきっと喜ぶわ。住所はここ。」 彼女は紙に住所をメモして渡した。

「どうもありがとう。それじゃ、今度の非番が土曜日なんだ。昼過ぎに行っていいかな?」

九. 頭もたげる獅子

約束の土曜日、レオニードは、エカテリナのメモを頼りに彼女の家を訪れた。

先方では、彼女とその両親、弟のイリヤが待っていた。

「こんにちは。レオニード・カンザキです。」

「こんにちは。ようこそ。エカテリナの父、エヴゲーニーです。娘から聞いて驚きました。まずは中へ。」 彼女の父親らしき人物が出迎える。家の中には、オルニア料理の香りが漂う。おそらく彼のために用意をしてくれているのであろう。

「リュウ君、大きくなったね。君のことは覚えているよ。ご両親はご健在かね?」

「はい。お蔭様で二人ともまだ警官として働いております。」

「それは何より。お父さんとは、散歩の時によくお会いしていたからね。もっとも、君のお父さんはパトロール中だったが。親の職業を継ぐなんて、君は親孝行だね。それに引きかえ、うちの子は・・・。」

「お父さん!」

部屋に入ってきたのはエカテリナだ。

「リュウ君は、久しぶりに来てくれたのよ。いきなり愚痴を聞かせるなんて!リュウ君、ごめんなさい。父は、この頃こうなのよ。」

「いや、かえって仲が良い証拠ですよ。僕も、むやみに帰ったりすると怒られます。だから、手紙を書くんです。」 「君のお父さんは厳しそうだったからな。今でも顔が思い浮かぶ。でも、それだけに優秀なのだろうね。」

そこへ、母親のマリアと弟のイリヤも入って、いろいろ懐かしい話をした。そして、お互いに何故ライランカに帰 化してきたのかも。

「そうすると、君はアレクセイ帝陛下とも親しいという訳か。」

「そうですね。友達づきあいをさせていただいてます。そのために呼ばれたようなものですから。とても気さくな方ですよ。」



レオニードは、少し不思議に思った。彼女のお父さんは、やけに話しかけてくるけど、学者なのに元からこんなに話好きなのだろうか・・・。

それに、肝心のエカテリナは、不思議なことに初めは話に加わっていたものの、だんだん奥に引っ込んであまり出てこなくなった。

彼が不思議そうな顔をしたのを認めたのであろう、エヴゲーニーが急に声を潜めてこう言った。

「・・・・実は、カーチャは一度乱暴されたことがあるんだ。それ以来、男を怖がるようになってしまった。幼なじみとはいえ初対面の男に、よく住所を教えたものだと思っていたが、今日いろいろ話してみて理由がなんとなくわかったような気がするよ。

君には包容力や冷静さを感じる。また、君もどこか恋愛を怖がっているようなところがあるね。あの子は、自分と同じものを君にも見つけたのではないか、と思う。」

「彼女が・・・。」

レオニードは愕然とした。上帝たちに茶をふるまったあの時の彼女は明るくて、とてもそんなふうには見えなかったのだ。

「もしよかったら、娘と付き合ってやってはもらえないだろうか。君はどうやら頼りになる男のようだ。」 レオニードは、しばらく考えて答えた。

「僕で良ければ、お付き合いさせていただきたいと思っています。今日も、半ばそのつもりで来ました。

でも、それにはまず彼女自身の気持ちを確かめてからでなければなりません。今伺ったお話のあとでは尚更です。」

「立ち聞きはいけませんよ、カーチャ。」母親の声が聞こえた。レオニードとエヴゲーニーは一瞬凍りついた。 エカテリナが母親に付き添われて入ってきた。

「カーチャ、お前、今の話を・・・。」

エカテリナは、かすれた声で言った。「聞いたわ・・・。」

「でもお父さん、お父さんの言った通りなの。私、彼なら愛することができるかもしれない、って思ったの。あの事件の前からのお友達だから。それに、頼れそうなところがあって。」

「カーチャ・・・。」

エヴゲーニーは娘を抱きしめた。

「カーチャ、僕で良いんだね?」

レオニードが言った。彼女は、父親から離れて頷いた。

「慌てることはない。ゆっくり行こう。まずは、僕をレオって呼ぶところからだ。それから、僕は非番の日にここに来る。それ以外は手紙の交換。いいね?」

「うん。」

彼女は、少し笑顔を見せた。

家を出たところで、彼はイリヤに呼び止められた。

「レオニードさん・・・。姉のこと、どうかよろしくお願いします。それが言いたくて。」



イリヤは深々と頭を下げた。

「ま一君、いやイーリャ、僕は自分の意思で君のお姉さんとのお付き合いを決めたんだ。それ以外はないよ。でも、この恋はきっと成就させてみせる。僕を信じてくれ。それから、僕のことは、レオって呼んでくれていい。」 もはや彼に迷いはなかった。彼女を幸せにしたい・・・それしかなかったのだ。

(ただ、手順をひとつでも間違えたら取り返しがつかなくなる。慎重にいかなくては。)

十. 飛び立て!

海洋警察の本部は、海洋貿易国・カレナルドの港湾都市ポルテアスルにある。

亜矢と徹は、ポルテアスル市内に新居を構えた。賃貸アパートメントの一室だ。この国では、都市部に暮らす者はほとんどがアパートメント暮らしである。それが一般的なのだ。

徹は、しばらくのあいだ警察官試験の勉強に専念することになった。

もともとは忍びである。大概のことはすぐに習得できるはずだが、法律についての知識となると、一筋縄ではいかない。

「私だって、警察学校でかなり厳しくやられて、一年かかったんだから。覚悟しときなさいよ。」 亜矢は笑った。目の前には、最愛の人がいる。幸せいっぱいだった。

「でも、それは一度に警部レベルまで教えていただいたからみたいだけどね。巡査だからって侮っちゃ駄目。満点を取る気でやらないと通らないから。・・・もっともこれは、ファイーナ様からの受け売りなのだけれど。」「ファイーナ様って、どんな方だったんだ?お顔は知ってたけど。」

徹も忍びとして各国要人の顔は頭の中に入れてはいたが、実際に会ったことなどなかった。

「そうね。法律学の講義の時は厳しくて、週末テストで良い点を取らないと、日曜日の自由時間は無しで居残りだった。今から考えると、その厳しさも、訓練生みんなが筆記試験では困らないようにわざと作られた厳しさだったのね。

でも、それ以外の時間は気さくに話しかけて下さった。他の訓練生は身元を知らないから、当たり前だったかもしれないけど、私と桔梗にはとても優しい方だと思えた。

本当に惜しい方をなくしたわ。当時の校長だった今のクファシル殿下とも愛し合っておられてね。お幸せそうには見えたけれど、きっとお命の短いことには悲しまれていたと思う。クファシル殿下は、その悲しみをすべて受け止めて癒されていたに違いないわ。私たちは、そのファイーナ様とクファシル殿下の教え子。そう思うと、また胸が熱くなってくる。」

亜矢は温かかったファイーナを偲ぶ。

「だから、貴方も試験は一発合格して。それから先もあるんだからね。」

「先?警部にかい?」

「そう。巡査で三年の実地勤務のあと、初めて警部の資格資格が受けられる。警部になると、指導官にもなれる。それが当面の目標ね。」

「ずいぶん先の長い目標だね。だけど、頑張ってみるよ。でないと、恩人たちに申し訳が立たない。」



徹はその年、国際剣術認定試験を受けて、警察官級剣士の資格を取得した。そのとき試験官になったのは、 警視になったばかりのセルジオだ。

(さぁ、かかってきたまえ。 君が春野君を幸せにできる男かどうか見てあげよう!)

(ここで負ける訳にはいかぬ。亜矢のためにも!数多くの恩人たちのためにも!)

本当に激しい戦いだった。素人ではとてもではないが見ていることさえ追っつかない速さで打ち合う。少しでも隙を見せたほうが負ける・・・互いに強く感じた。やがて、相手の手腕を見極めたセルジオは木刀を収めて、審判員たちに彼の腕を保証した。

試合後、控え室に戻ると、セルジオが徹に話しかけた。

「先程は失礼した。さすがは春野君の旦那様だ。」

徹は驚いた。亜矢は、どこまで顔が広いのだ。

「亜矢をご存じなのですか?」

「私は、セルジオ・カルル。アイユーブ警察学校で春野君と同期だった者です。実を言えば、剣術試験において 現時点で『警察官級剣士』の試験官を務められる者は、我々の同期生しかいないのです。貴方のことも知ってい ました。更に私は、今井はるか=桔梗の婚約者です。」

「では、貴方が桔梗の婚約者でしたか。お話は伺いました。どうか、桔梗のこと、よろしくお願い致します。彼女にも、どうかよろしくお伝えください。」

二人は固く握手を交わした。

「できれば、今後は友になっていただきたいが・・・。」

「それはもう、喜んで!」

そして、彼は晴れて黒い剣を下げることを許された。

しかしこの日は、黒い剣は用意されておらず、とりあえず白い剣が授与された。

玄洋帝から黒い剣の製作依頼を受けた科学者・周公沢は、嬉しそうに困って見せた。

「また作るんですかいな。まぁ、今回は一本だけやさかい、わしにもまだ作れますやろうけど。今後は章英に引き継いでもらうしかありまへんな。

それにしてもさすがに亜矢はんの旦那はんや。そりゃもう、わしも精魂込めて作らしてもらいますよってに。」

更に九月、徹は巡査資格試験にも合格した。海洋警察本庁で行われた任命式で、徹の制服姿を見た亜矢は 感動して涙ぐんだ。

「君は、いつからそんなに泣き虫になったんだい、警部殿?」

その夜、徹は笑って彼女のおでこを突っついた。

「いつぞやの時は、本当に殺されるかと思ったよ。」

「もうっ、いじわる・・・。」

言葉とは裏腹に、亜矢は改めて彼の大きさに引き込まれていく自分を感じ取っていた。

間もなく彼の最初の護衛任務が知らされた。



「なんだって?!ボイド・ポセイドン号?」

彼は、指導役のヨセフ・ヤン警部、先輩のメイプル・ジョンソン巡査と共にボイド・ポセイドン号に向かった。船長シャルル・ボワールは、笑顔で彼らを迎えた。

「いや一、よく来て下さいました。この船はこれまで、自警団で守ってきましたが、これからはあなた方海洋警察に護衛をお願いすることにいたしました。今後ともどうかよろしくお願い致します。」

他の二人の手前、船長はこう挨拶をしたが、数時間後に徹と二人きりになる機会ができると、彼は親しげな笑顔を見せた。

「久しぶりだね。とにかく元気そうでよかった。その制服姿も似合っているよ。君が海洋警察官になったあかつきには、初めての護衛任務は是非うちにと、マーベラス長官にお願いしておいたのだ。」

「あぁ、それで・・・。初めての警護船がこの船だと知った時は驚きましたよ。そういうことだったのですね。ありがとうございます、船長。船長から受けたご恩は生涯忘れません。また、我々の結婚式にも来ていただいて。」 「いやいや、乗組員だった君が本当に幸せになったかどうかを見届ける義務も私にはあったからね。

それに、その時にマーベラス長官の知己を得たことも、有意義だった。」

「しかし、自警団のみんなは、どうしました?姿が見えませんが。もうこの船にはいないのですか?」 「うん。皆には君と同じ道に進んでもらうことにしたんだ。今頃は、海洋警察の訓練所でしごかれてるんじゃないか。」

シャルル船長は、ほくそ笑んだ。

「そうだったのですか・・・。でも何故?そのままでもよかったはずでは?」

「私ももう若くない。後を継ぐ子もいない。この船は、いつまでもこのままというわけにはいかないのだ。 そうしたら、皆の生活は誰が面倒を見るのか、と思ってな。海洋警察なら、生活は安定する。 君が良い手本になってくれたのだよ、烏丸君。」

最初の任務を終えて帰った彼に、亜矢は自分が身ごもっていることを告げた。四カ月だった。

ーー. 薔薇の花束

次にレオニードがエカテリナの家を訪れたのは、次の土曜日の昼頃だ。扉越しに声をかける。

「カーチャ!レオニードだ。開けてくれ。」

「ほら、リュウ君よ。貴女が出てあげなさい。」

マリアが彼女を玄関に追いやった。実は家族でエカテリナには内緒で、いくつか取り決めをしていた。エカテリナが彼を『レオ』と呼ぶようになるまで、家族もそれに合わせようというのも、そのひとつだった。

彼女は、ひと呼吸おいてから思い切って扉を開けた。レオニードがピンク色の薔薇の花束を持って立っている。 「カーチャ、ごめん。女の人に何をあげたらいいか、さっぱりわからなくて・・・これ。」 彼は照れくさそうに笑った。

「そうぉ?これでいいと思うけど・・・。嬉しいわ。どうもありがとう!」



エカテリナは、本当に嬉しそうにピンク色の花束を受け取った。大きくはないが、それでいて密やかな華やかさがあるその花束は、彼の心遣いそのもののように思えた。

「僕はだいたい週末は来られると思うけど、臨時で変わることがある。だから、来られる日も時間だけは揃えたいと思うんだ。君の仕事の都合も考えると、だいたい今くらいで良いかな?」

彼は言った。時刻はおおよそ午後二時頃だ。

「いいんじゃない?」

彼女は、気楽に答えた。

居間には、エヴゲーニーとイリヤもいて、彼が入っていくと、まず父親がこう言った。

「やぁ、ようこそ、リュウ君。

家族でも話したのだが、君はカーチャの友達だ。私も君の子供の頃のことを覚えている。だから、この家では君には家族としてくつろいで貰うことにした。言葉も丁寧語は禁止だ。それでいいかね?」

エヴゲーニーは親しげに微笑んだ。

「え、いいんですか?」

「もちろんだとも。これは、カーチャも承知している。そうだね?」

「はい、お父さん。」

父親が彼女をどう説き伏せたかはわからないが、レオニードにとっても、それは有難い提案だった。

「それじゃ、そうさせてもらおうかな。」

お茶とお菓子をご馳走になりながら、彼は話し始める。

「僕はこれまで、いろいろな愛を見てきた。結婚までに短くて数ヶ月しかなかった例や、十数年かかって許嫁を探し続けて結ばれた人もいる。これからしばらくはそんな話をしていきたいと思っている。」

彼はそう前置きしてから、最初にファイーナとクファシルの物語から話し始めた。

クファシルには予め許可を取ってあった。詳細は伏せたが、やはりそこは元警視正である。おそらく即座に彼女 ができたのだと見破られていることであろう。

・・・ここでは詳細は割愛して、レオニードが締めくくった言葉のみを述べておく。・・・

「クファシル殿下は、自ら警視正の職を辞されてまでも、ファイーナ様という余命いくばくもない女性を愛された。 限られた時間の中で大きく育まれた愛がある。その様子をずっとお二人のお側近くで見ることができた者は少ない。僕もその一人だ。

あるひとつの愛の時間は限られていても、その愛がまた多くの愛を生んでいくことがあるのだね。僕が君と出会えたのも、広く見ればそのひとつなんだ。」

レオニードはそこで一つ目の話を終えた。

そう、彼がこの国に来なければ、私も彼には会えなかったんだわ、とエカテリナも思った。 「確かにそうだわ。だけど、貴方は何故まだ独り身なの?今まで周りに女性はたくさんいたでしょう?」



その時にはすでに、家族は気を利かせて席を外していた。果実酒が入れられたクミナ茶の香りが仄かに漂う。 レオニードは、彼女を見つめながら言った。

「実を言うとね、カーチャ・・・。僕は結婚するのが怖かったんだ。女の人を抱きしめたりする自信がなかった。 君も知っているように、オルニアにいた頃の僕は明らかな混血児だった。みんなからは異形として扱われてき たんだ。その、なんとなく遠ざけられてきた理由が、僕の心がどこかおかしかったせいじゃなくて、単に混血児だ からだとわかって、僕は却ってほっとしたくらいさ。

だから、今までは結婚すること自体が怖かった。ライランカの人と恋をすれば、その髪の藍色を見るたびに子供の頃の自分を思い出すかもしれない。かといってオルニアの人を愛したら、また自分の子供が混血児になってしまう。どっちつかずだったんだ・・・。

こんなことを話したのは、君で二人目だ。一人目は、今の話に出たクファシル殿下なんだけどね。あの方は永遠に目上の立場だから冷静に見て下さる。」

それは、エカテリナにとって、思ってもいなかった理由だった。異形だなんて、そんな!

「・・・リュウ君・・・。」

「だけど君となら・・・子供の頃の僕をよく知っている君となら、恋ができるかもしれないと思ってる。そして僕は 今、君の前にいるんだ。」

彼はそう言い残して帰っていった。

自室に戻ったエカテリナは、花束からほどかれて花瓶に挿された薔薇の花々を見つめた。彼の顔が目に焼きついて離れない。

子供の頃の彼の髪は、ただ綺麗だとしか思っていなかった。彼自身が、そのために孤独に耐えていたなんて、 考えもしなかった。確かに友達が少ないのは知っていたけれど・・・。

ピンク色の薔薇の花言葉・・・彼女は、本をめくって調べた。

「しとやか」「上品」「可愛い人」「美しい少女」「愛の誓い」

「愛の誓い」・・・この言葉を見つけたとき、彼女は胸が押しつぶされそうだった。彼は、彼女に指一本触れることなく、愛を誓ってくれていたのだろうか・・・。

(リュウ君・・・レオ!)

その夜、彼女はベッドの中で体を丸くして泣いた。何かがこみ上げてきてたまらなかった。

一二. 逆光

湖畔宮殿の『合歓の間』は、譲位後のアルティオの居室である。アレクセイが呼ばれていた。

「つかぬことを訊く。レオの結婚について、お前は何か聞いていないか?」

アルティオの質問に、アレクセイは一瞬首をかしげたが、思い当たる節がないわけでもない。

「レオですか・・・。そういえば、兄上からこんな話を聞きました。レオがこのあいだ兄上と姉上のことを一人の女性にだけ話してもよいかどうか、承諾を得に来たというのです。兄上は、きっと彼女ができたのだろうと言っていました。」

「そうか、クファシルのところへなぁ。ならば、私がもはや口利きをするまでもなさそうだな。」

「どういうことなんですか?僕にはさっぱり・・・。」

「無理もない。お前は事情を知らぬのだからな。

先だって栽培技術研究所に行った時に、レオに警護して貰ったのだが、その際、偶然にもそこに幼友達がいたらしい。女の子だったから、もしかしたらと思って、お前に尋ねてみたのだ。」

「そうでしたか。彼は慎重な男です。彼女ができたからといって、すぐに手を出すようなことはしません。おそらく婚約が本決まりになるまで僕たちにも話さんでしょう。それまで待ってやってください。」

次の土曜日、エカテリナは、家の中ではなく、玄関脇に設えてある小さな腰掛けに座って彼を待っていた。訪ねてきたレオニードは、少し驚いたが、彼らしく冷静に声をかけた。

「やぁ、カーチャ!」

彼女は振り向いて彼の顔をじっと見つめる。見つめながら、彼に近づいた。

「カーチャ・・・どうした?」

彼女は、彼の胸に薔薇の花が挿してあるのを見つけた。

「レオ、このピンク色の薔薇、花言葉を知って付けてるの?」

彼は、優しく笑った。

「もちろんだ。『愛の誓い』、この言葉を君に贈るためさ。・・・君はきっと気づいてくれると思っていた。」

「レオ・・・。」

彼女は、もっと近づいて、彼の首に手を触れ、胸の中に入った。

レオニードは、ゆっくり両手を彼女の背中に回す。

「怖くない?大丈夫かい?」

「うん。大丈夫。」

「ロづけも?」

彼女は返事の代わりに自ら口づけた。短いキスだったが、その時の二人にはそれで充分だった。

「カーチャ・・・好きだよ。」

「レオ・・・。」

「実は、今日のこの薔薇は布製なんだ。こうして髪飾りにもなる。君へのプレゼントだ。」

彼は、彼女の髪に花を挿してやった。

「ありがとう、レオ・・・。」

お茶の後、レオニードは彼女と二人きりになった時も、彼女のあとからソファーに座り、静かに寄り添って手を握るに留めた。

「しばらくは、またこうしていよう。それにしても今日は大進展だ。僕は、キスまで時間がかかるものと覚悟していた。」

「レオ、貴方って本当に優しいのね。私、もっとずっと貴方といたい・・・。」

「ありがとう。僕を信じてくれるんだね。



今日、話そうと思っていたのは、同期生同士で結ばれた二人の話だ。二人とも剣の腕は凄かった。ある時、女性のほうが怪我をして緊急手術するに至った。彼の話によると、その時に相手が女の人なのだと改めて気がついたのだそうだ。

でも、病院では家族以外の付き添いはできないと言われて、咄嗟に婚約者だと名乗った。意識が戻った彼女にそのことを詫び、左手薬指にキスした。・・・君にもこの意味はわかるね。」

「婚約の証・・・。」

「そうだ。それから彼は病室に通って、彼女の手を握って指を絡め続けた。彼女が動けないうちは、告白するの は卑怯だと考えたのだそうだ。

それが、退院間際になって彼女から、恋人の振りはもう止めて良いと言われ、彼は自分の気持ちを初めて打ち明けた。

その二人、もうすぐ結婚式を挙げる・・・。僕も、こうしていいかな?」

レオニードは、エカテリナの手に触れて指を絡めた。左手薬指に口づけもした。彼女は抵抗しなかった。 帰り際に彼は言った。

「今日は嬉しかったけど、これからは家の中で待っていてくれ。そのほうが僕も気が楽だ。」 「わかった。」

エカテリナも、彼が自分を心配してくれているのがわかっていた。

彼が訪ねるごとに、エカテリナの家族達は席を外すことが多くなった。エカテリナとレオニードに早く結婚してもらおう、というのが家族の暗黙の了解だったのだ。やがてレオニードは二階のリビングに案内されるようになり、二人はそこで静かに抱きしめ合う時間が多くなっていた。

そんな日々が半年も続いたろうか、あるとき彼女は俯いて言った。

「実はね、これは父達には言ってないのだけれど・・・。私が暴行されたのは、一度ではなかったの・・・。私は突然攫われて同じような女性たち数人と牢屋のような所に捕まってた。そこに、小さな子供が連れて来られた。その子を救いたくて、私達は犯人達を挑発した・・・。あとは・・・想像つくでしょう・・・。それでも私を愛してくれる?」胸の中にいる彼女が微かに震えているのが分かった。心の奥底に秘め続けるはずの辛い記憶を、彼女は自分に話してくれたのだ。

彼は話の内容から、ある事件を思い出した。記録には、被害者の国籍や名前は記載されていなかった。ウユニ側からは、各国の警察に被害者の情報は徹底的に伏せられて参考事例として送られたのである。

「グラーヴェランド事件・・・君はその時の被害者のひとりだったのか・・・。辛い思いをしたんだね。」レオニードは心を決めた。彼女をきつく抱きしめる。

「君が本当に僕で良いのなら、僕は君を心から愛する。今話してくれたことだって、君が優しく正しいことの証じゃないか。そんな君と恋仲になれたことを、僕は誇りにさえ思うよ。・・・結婚しよう、カーチャ・・・。」

彼は諭すように囁いて、彼女の唇を吸った。

「レオ・・・。」

しばらく経って、エカテリナは彼の腕を掴んで、別の部屋の中に入って鍵をかけた。彼女の寝室のようだった。「レオ、今ここで私を抱いて・・・。

家族には、今日は夜まで帰ってこないでって頼んであるの。だから、しはらくは誰もいないわ。

実は今日はさっきの話のあと、もし貴方が去ってしまったら、そのまま一人きりで泣き続ける覚悟をしていたの。でも、貴方は逆にプロポーズしてくれた・・・。」

彼女は真っ直ぐに彼を見つめる。

「私、もうこれ以上は耐えられない・・・。貴方が私を気遣ってくれてるのはわかってる。でも、普通の男女なら、もう結ばれててもおかしくないわ。だから、変に遠慮しないで。レオ、貴方になら抱かれても怖くない・・・。きっと・・・。それに、これは結婚したら必ず通る道・・・。」

彼女は、自ら服を脱いだ。まだ陽の光が差している。胸を手で覆っていたが、逆光に映る彼女の曲線は美しかった。

「カーチャ、僕が悪かった。君に、そんな思いをさせていたなんて。・・・わかった。今、ここで互いの心をぶつけ合おう!」

陽の光の中で二人は深く愛し合った。

それから間もなく、レオニードは、オルニアの両親に手紙を書いた。

父さん、母さん、お元気ですか。

僕は今度、エカテリナ・キッカワという女性と婚約しました。

彼女は、昔うちの近所に住んでいた、吉川歩ちゃんです。偶然にも彼女の家族はライランカに帰化していたのです。父さんは知ってましたか?

結婚式を挙げる予定ですが、父さんと母さんにも来て欲しいので、そちらの都合に合わせます。日にちを教えて下さい。

レオニード

「あいつ、やっとその気になったか。」

父親の京一は、息子の結婚を喜んだ。

たしかに昔、近所に吉川という家族が住んでいて、そこのお父さんとは巡回中によく会っていた。あそこの娘さんのことはよくは覚えていないが・・・。

母親のサシャのほうが彼女のことをよく記憶していた。友達が少なかった息子と遊んでくれた、数少ない友達のことを、母として記憶していないわけがない。

「あの子は良い子だったわ。少し気が強かったけど。ふふっ・・・。」

一三. 祝福

レオニードとエカテリナの結婚式が行われたのは、その年の十一月二十八日である。

双方の家族は、実に二十年ぶりに顔を合わせた。

「やあ、これはこれは・・・。お久しぶりですな、吉川博士。」

ロ火を切ったのは、神崎京一だ。大人の顔はそう変わるものではない。髪の色が変わっていても、顔を見分けるのは容易い。

「神崎さん、どうもご無沙汰いたしまして。うちの娘がお世話になります。今後ともよろしくお願いします。」

「こちらこそ、息子のこと、どうかよろしくお願いします。しかし、この広い世界で、よくあの二人が再会できたものです。これも運命というものですかなぁ。」

すぐ横では、母親同士が話をしていた。サシャとマリアだ。

「本当にお懐かしいですわ。こちらへ移って来るときに、いろいろ教えていただいたこと、今でも昨日のことのようです。坊ちゃんもたいそうご立派になられて。娘もすっかり頼りにしているようです。不東な娘でございますが、何 卒よろしくお願い致します。」

「恐れ入ります。こちらこそよろしくお願い致します。お嬢様はお美しくて、うちの子には勿体ないくらいです。息子は、結婚後はそちら様にご厄介になるとか。本当に何を考えているのやら。ご面倒をおかけしますね。」

「いえ、それは私共の希望を坊ちゃんが聞いて下さったのです。私共家族は、まだ子離れができていないのかもしれませんね。下の子は小説家になるのだと言って、まだ同居しておりますし。」

「まぁ、作家さんですの?羨ましいですわ。」

「作家とはいっても何を書いているのやら。親には見せてくれないんですよ。」・・・

と、まぁこのようなやりとりをしていた。

京一は、何気なく端のほうの席に座っているクファシルを見つけて近づいた。隣には警護官とおぼしき人々が 幾人か並んでいる。皆、レオニードとは同僚のはずであり、また恐らく王族たちの警護も兼ねて参列しているの であろう。

「クファシル殿下。お久しぶりでございます。息子がお世話になっております。この度は、式にもお越し下さり、誠に光栄に存じます。もう少し目立つ席にいて下されば、もっと早くご挨拶に参りましたものを。」

「神崎警視、この度は、おめでとうございます。しかし私は、お宅のご子息を異国へ赴任させた張本人です。どう かお許し頂きたい。」

「何を仰います。そのお話は、前にも伺っているではありませんか。

息子からもいろいろ伺っております。息子が今あるのは殿下と姫様のお陰・・・感謝こそすれ、謝られることは何もございません。本当にありがとうございます。」

エカテリナの弟イリヤは、会場となった宮廷警護課の建物があまりにも質素で実務的なことに驚いていた。ここは、たしかに宮廷の敷地内ではあるが、れっきとした役所の一部なのである。

(想像と実際とは、違うんだな・・・。)

彼は、自分の未熟さを恥じた。

やがてその時刻になった。レオニードとエカテリナ、立会人のアルティオ、アレクセイ、その妃のマリンが入ってくる。一同は三人の王族に敬意を表して一旦立ち上がる。マリンは、この時妊娠八ヶ月、お腹がかなり目立っていた。

アルティオが立会人として挨拶する。

「この度はおめでとう。二人は、長きに渡る空白を埋めつつ、ここに結ばれる。今後も、互いに寄り添い、様々な 困難を乗り越えていって欲しい。ライランカ上帝アルティオ、この場にて君たちを心より祝福しよう!」 アレクセイがレオニードに指輪を渡す。

「おめでとう、レオ!幸せにな。」

「ありがとう。」

マリンはエカテリナに近づいて、指輪を渡す。この二人は、婚約の報告時にレオニードから引き合わされて会っていた。マリンはエカテリナのことをしっかりした人だと感じ、エカテリナはマリンを本当に可愛らしい人だと思った。

「お幸せに!彼を離しちゃ駄目よ。」

マリンは、はち切れんばかりの笑顔で言った。

「どうもありがとうございます。そして、どうか元気な赤ちゃんが産まれますように。心より願っております。」 エカテリナの笑顔も彼女に負けないくらい美しいものだった。こんなにたくさんの人々に祝福されて結婚できる なんて、想像もしていなかった・・・レオ、貴方と会うまでは・・・。

「ありがとう。」マリンの声が聞こえる。

指輪を互いに相手の指にはめ、誓いのキスを交わす。会場から拍手が湧き起こった。ここに、また一組の夫婦が誕生したのである。

と、その時だ。天井から無数の花びらがサラサラと舞い降りてきた。

「これは?・・・」

一同は顔を見合わせた。

「レオ、カーチャ、結婚おめでとう。お幸せにね。・・・私は守護精霊テティス・・・。」

「驚いたな。テティスが結婚式に花びらを降らせて祝福したという話など聞いたことがない。」

アルティオが感動して言った。長年皇帝を務めたアルティオ上帝でさえも知らないということか・・・。その場の者は皆一様に驚いた。アルティオは態勢を立て直して言った。

「君たち二人は、テティスによほど気に入られたらしいね。名誉なことだぞ。本当に幸せになるんだ。いいね。」

その夜、二人はアレクセイの許可を得て、テティス湖に向かった。彼女に花びらのお礼を言うことと、その理由 を聞くためだ。

帰化礼の時と同じように霧が湖を覆い、テティスが姿を見せた。

「レオ、カーチャ、よく来てくれましたね。」

レオニードが尋ねる。

「テティス、昼間はどうもありがとうございました。そのお礼を言いに来ました。でも、何故あのようなことを?王族でもない僕たちのために・・・。」

テティスは、二人を見つめて、こう言った。

「私は、守護精霊といわれながら、あの時カーチャを守れませんでした。そのことをずっと悔いていたのです。私が眠っている間に、あの男は貴女を私の力が及ばないウユニまで連れて行って犯してしまった・・・。

あの男は人買いの一味で、女の子達を攫っては売り飛ばしていたのです。一味は全員、その数日後にウユニ 警察に逮捕され、全ての能力と記憶を剥奪されました。魚に変えられ、聖獣クラーケンの餌として供されたので す。そして聖獣クラーケンの魂は、決して変容することはありません。 惑星市民条約機構では死刑を禁じていますが、姿を変えて他の生命体の栄養素になることは、この範疇には 含まれないはずです。

いずれにしても、カーチャ、貴女に危害を加えた者たちはもう二度と現れないことになります。」

二人はただただ驚くばかりだった。能力と記憶を剥奪?聖獣クラーケン?

「レオ・・・話はカーチャから聞いていますね。貴方は誇るべき人を娶ったのよ。そして、貴方なら、きっとカーチャを幸せにできる。

カーチャ、貴女の心はこの上なく尊いものよ。私は貴女たちに最大の祝福を贈ります。それに、これからは貴女 の傍にはレオがいる。幸せになるのですよ。」

精霊は姿を消し、再び天から花びらが降ってきた。

「カーチャ・・・本当に幸せになろう。僕がついてる。」

「うん、貴方となら、愛し合える・・・。」

舞い散る花びらを浴びながら、二人は帰った。

一四. 樫の広場

五年後の晩秋の朝である。今朝もクファシルは日課のジョギングで宮殿近くの森を走っていた。何年か前にファイーナと星祭りの夜を過ごした、あの森である。

(ファーニャ、君と過ごしたこの森を、僕は毎朝走っているよ・・・。)

だが、彼女が『樫の広場』と呼んでいた場所は、敢えて避けていた。そこは毎朝走るにはあまりにも思い出が大きすぎたのだ。

その朝はとりわけ霧が深かった。彼は慣れた道から逸れていることに気が付かなかった。霧が晴れかけた時に、彼は自分が普段とは違うところを走っていることを知った。見覚えのあるその場所は・・・

『樫の広場』!

ファイーナとの思い出が彼を押しつぶす。彼の意識は、そこで絶えた・・・。

その頃、アレクセイとマリンのあいだには、二人の女の子が生まれていた。名前は、フローラとオリガ。「んー、よしよし・・・いい子だ。」

その朝、アレクセイは、生まれて五ヶ月のオリガをあやしていた。自分が父親になるとは・・・こんなに可愛く思うとは、想像もしていなかった・・・。

マリンとフローラは、並んでぐっすり眠っている。

この子たちもやがては成長していく。そして、おそらくフローラが将来の皇帝になる・・・。良い子に育てなければな。マリンのように親しみやすく、ファイーナ姫のように優しく・・・。

そんなことを考えていると、宮廷医のウラジミルとナディアが何やら慌てて駆け込んできた。

「皇帝陛下、大変なことが・・・。姫様たちは、妻がお預かりしますので、とにかく医務室までお越し下さい!」 「どうした?!」

嫌な予感がした。

「クファシル殿下が・・・お亡くなりになりました。・・・。」

「何?!どうした?何があったんだ?!」

彼は狼狽した。昨日まで何事もなかったではないか!

アレクセイは、赤ん坊をナディアに預けると、医務室まで走った。ウラジミルも後を追う。

医務室では、多くの看護師たちがひとつのベッドを取り囲み、アルティオやレオニードもついていた。涙を流している。

「アリョーシャ・・・。クファシルが、死んでしまった・・・。」

アレクセイは、放心状態でベッドに近づいた。静かに横たわるクファシルの姿が、そこにあった。

「今朝、森の中で倒れられていたところを、警護官が発見しました。その時にはもう・・・。」 ウラジミルが話した。

アレクセイは、冷たくなったクファシルに触れ、抱きついて泣いた。

「兄上・・・。加賀警視正・・・。」

クファシルの体は人ひとりで運ぶには重そうだったが、アレクセイは湖まで一人で運ぶと言って聞かなかった。 「おい、アリョーシャ!僕もいるんだぞ!警察学校の仲間を忘れたか!」

レオニードはアレクセイの胸ぐらを掴んで怒鳴った。友の叫びが頑なになっていたアレクセイの心を揺さぶった。

「レオ・・・。そうだったな。すまん。・・・」

クファシルの体は、アレクセイとレオニードの二人が担架に乗せてテティス湖に葬ることになった。

「アレクセイとレオニードは、ファイーナとクファシルが選んで連れてきた。さぞかし辛いであろう。彼らの好きにさせてやってくれ。」

アルティオはそう言い残すと、自分も少し遅れて湖についていった。

湖にはまた霧が垂れ込める。アレクセイとレオニードは、クファシルの体を担架から下ろして湖面に横たえた。 アレクセイが語りかける。

「加賀警視正・・・今まで、本当にありがとうございました。貴方は、僕にとって目標そのものでした。・・・この期に及んで、加賀警視正なんて呼ぶのはおかしいですよね。でも、貴方はいつまでも警察学校にいた時の、凜として制服を纏っていた、優しさを内に秘めた加賀警視正のままなのです。

僕は、姫を貴方に託して良かったと、心から思っています。どうか姫の元に帰って差し上げて下さい。・・・」

レオニードも冷たくなったクファシルに話しかけた。

「加賀警視正・・・これまでどうもありがとうございました。貴方は常に冷静で、全てを優しく包み込んでくれていました。僕も将来、貴方のようになっていたいです。お疲れさまでした。どうか安らかにお休み下さい・・・。」 クファシルの体は、湖面を滑るようにして見えなくなった。

「レオ・・・君は僕が姫に憧れていたと聞いても驚かないのか・・・。」 アレクセイが呟く。



「あぁ、前から知っていた。ここに来る船の中で、君は珍しく酔いつぶれた。その時にな。」 「そうだったのか・・・。僕はお二人の幸せをどうしても見届けたかった・・・。それももう終わったんだな・・・。」

後から来たアルティオは、この二人の言葉を聞いた。

謙虚を絵に描いたようなアレクセイという男が、皇太子の重責を引き受けたのも、なかなか妃を探そうとしなかったのも、そのような理由からであったか・・・今にして思い当たる。

クファシル、君は私にとっても、本当の息子であり、またどこかで補佐役のライブラのままだったよ。

君は、心からファーニャを愛してくれた。ファーニャとアレクセイを懸命に支え続けてくれた。ありがとう、そして永遠にファーニャと共に眠れ・・・。

アルティオは、アレクセイたちの言葉は聞かなかったふりをして、彼らに近づいた。

「アリョーシャ、レオ・・・。クファシルはよくやってくれた。きっと今頃はファーニャと再会しているだろう。・・・皆が待っている。帰ろう。」

環境局長官のイリーナがクファシルの死を知ったのは、さらにその二時間後、出仕したときである。「そんな・・・。兄上・・・。」

彼女もまた、泣き崩れた。

彼女こそが、クファシルの本当の妹だった。同じように環境設計家ヴィクトル・ルマールによって、子供の頃から 一緒に育てられ、ライランカに送り込まれた補佐役・カーサル・・・それが彼女の元々の姿だ。

血の繋がりはなくとも、数年に一度しか会えずとも、世界各国に散った七人は互いにきょうだいであった。絆は深い。

彼女は、他の五人に直ぐさま電報を打った。

「ライブラ シス カーサル」

ライブラ、加賀篤史、クファシル・・・生涯で三つの名を持つことになった一人の男は、こうして湖に消えていった。享年五十・・・。

運命は、こうして生命を生み出し、また消してゆく。人は、その中で懸命に生きているのだ・・・。

一五. グラーヴェランド事件

ウユニは、極南の大陸にある。

その事件のことは、数年が過ぎた現在においても『グラーヴェランド事件』として国全体の汚点となっている。 ウユニ国民の多くは、何らかの超能力者である。未来を見たり、惑星全体を揺るがすような大きなことはできないが、その力は決して侮れない。事件は、その最たるものだった。・・・

そもそも、それまでは細々と続いていたマフィアの中に、強大な精神バリアを張ることができるグラーヴェという 男が入ったことが、事件を大きくした要因だった。



つまり、悪事を画策しても、外からは見えなくなってしまったのである。また、そのこと自体が知られぬまま放置されることにもなっていた。

グラーヴェを武器に加えた十人ほどの一味は、やがて国の内外を問わず多くの金品を奪い、人をさらい始めた。警察がこの事実を察知し動き始めたときにはかなりの数の被害者が出ていた。

ライランカのエカテリナもその一人だ。彼女は何の前触れもなく突然見知らぬ場所にテレポートされた。乱暴され、牢のようなところに閉じ込められた。そこには、同じようにされたらしい女性たちが数人いた。皆、服を剥ぎ取られている。おそらくは、そうして逃げられないようにしてから売り飛ばすのであろう・・・。

数日後、まだ五、六歳くらいの子供が来た時も、奴らはやはり暴行しようとした。それをエカテリナは食い止めた。

「あんたら、そんなガキしかいたぶれないなんて、そんなにアソコが小さいのかい!いっちょ前の男なら大人を相手にしな!この臆病者が!ライランカ人のほうがよっぽど珍しいだろ?ほら、この髪!」

彼女は、本で読んだ『ヤクザな跳ねっ返り』役を演じた。私はもうやられてしまったんだ。何度やられようと変わりはしない。だけど、その子はまだ間に合う・・・。

「おぉ、姉ちゃん、いい度胸だなぁ。跳ねっ返りほど抱きたくなるぜ。ほいじゃ、その分う一んと楽しませてもらおっかなぁ!」男たちが近づいてきて、牢の鍵を開けた。

「そんなら、あたいも抱くがいい!」

同じく牢にいた茶髪の女性が叫んだ。彼女だけではない、他にも何人もの声が聞こえた。

「おい、てめぇら、多少は大目に見てやるがやり過ぎるなよ!そいつらも売り物なんだからな!」 毒々しい男の声も耳に入った。

そのあとのことは官能と苦しみ以外、よく覚えていない。気がついたとき、彼女のそばではその子が抱きついていて泣き、他の女性たちが身を寄せ合って彼女を暖めてくれていた・・・。

しかし幸いにして、エカテリナたちの悪夢は数日で終わった。

ー味の一人が人を攫う現場に、たまたま非番の警察官が居合わせて、跡をつけたのである。その警察官、名をストラと言い、類い希なる能力を幾つも持つ凄腕の警部だった。

(いい度胸してるじゃねぇか。このストラの前で、人さらいとは片腹痛い!)

彼は初めそう軽く考えていた。跡を付けて、ねぐらを特定、人手を揃えてから突入し、人質を解放する、それがいつものやり方だった。

しかし、その人影は追跡の途中で忽然と姿を消した。辺りの気配をより広く探ってみても、それらしき犯罪感が 感じられなかったのである。

おかしい・・・。何らかの痕跡が感じられるはずだが。悪意や被害者の叫びが、全く感じられないとは。

ストラは、直ぐにそのことを上司のカニショヌ警視正に報告した。その時もやはりテレパシーである。

「確かにそれはおかしいな。被害者がいる限り、何らかの痕跡が残るはずだ。ベテランの君にもわからんとは。とりあえず現在位置の情報をくれ。こちらでも検討する。」

「わかりました。」



ウユニ警察では、このようにして捜査を進める。各個人が持つ能力を駆使して事件を収めるのだ。防犯率と検 挙率から言えば、もしかしたら世界一かも知れない。

なかでも、ストラは捜査能力に長けていた。その彼が犯罪感を察知できない・・・これは尋常ではないと考えられる。

ウユニ警察局のダッタンゲ長官は、早急に警察幹部を集めた。

地理を熟知する者マントラ、心理を読むモクレンビ、指揮カー番と謳われるフドゥクータが率いる特殊部隊の面々だ。そして、当該地域をくまなく捜索したが成果はなかった。かといって、事態は一刻の猶予も許されぬ。こうしている間にも被害者が何をされているか、わかったものではないのだ。

ダッタンゲ長官は、この事態をオンネト帝に報告した。皇帝は、しばらく考えてから、環境局長官を呼び出した。 その名はムーム・・・ヴィクトル・ルマールの忘れ形見だった。

「陛下、何故ムーム長官をお呼びになるのです?環境局は、犯罪とは関わりのない部署ではありませんか。」 「実は、彼女は我が国全体の参謀なのだ。この一件、おそらく短期頭脳戦となろう。こちらも全力を尽くす。もはや 隠し立てしている時ではない!我々は何としても奴らに負けるわけにはいかぬのだ!」 「参謀・・・・。」

ムームがやって来た。皆から一件の詳細を聞いた彼女はこう言った。

「もし私が頭目だったら、ねぐらは何カ所かに分けます。そして定期的に変える。その候補としては・・・。」 彼女は地図で五カ所を差した。環境設計学は、こういう所にも威力を発揮する。

「港町の近くで人目につかぬここ、山に囲まれたこの辺り一帯、多くの金脈に恵まれたこの村と、大きな市が立つ この都市、あるいは・・・この時間城の地下深くの地点・・・です。」

「何ですと!まさか!」ダッタンゲは耳を疑った。

「そう。誰しもが思わぬ場所・・・それが狙い目です。

これらの付近を重点的に、今度は『気配がはっきりしていて、ここではない』というところを候補から外していってください。必ず『空白』ができるはずです。それが私たちが行くべき場所です。」

「なるほど・・・消去法ですか。やってみる価値はありますな。」

捜索は実行された。空白を探せ!

果たして、その『空白』は、港町アンダンテと、時間城の地下二十メートルの深さにあった。

その二カ所に、一気に特殊部隊が突入した。時刻はちょうど午後三時、夜働きをする者にとっては昼寝の時間帯である。虚を突かれた一味は、あっという間にテレキネシスで金縛りにされて拘置所にテレポートされた。中でもグラーヴェを最初に抑えられてしまった一味は、もう手も足も出なかった。

捕まっていた被害者たちは、城の中で手厚く介抱された。オンネト帝は自ら被害者の元に出向き、深々と頭を下げた。それぞれを家まで送り届け、家族にも謝った。外国人の被害者に対してもそれは変わらず、自らの船で送り届けた。

ここで特筆すべきは、やはりライランカのエカテリナの場合であろう。



ライランカには守護精霊となったテティスがいる。おそらく自国民を守れなかったことを人一倍悔いているはず だ。彼女にも謝らなければならない。

オンネトは、女医によって癒されたエカテリナにフードが付いた法衣を着せて、無名の従者に仕立て上げた。エカテリナが帰化礼の際にアルティオと会っていたからである。事が事だけに、事件のことは被害者とその家族以外には知らせるべきではないと、オンネトは判断していた。アルティオには、ただ話したいことがあるとだけ伝えて湖に通してもらった。女医も一緒である。

「テティス殿、この度は本当に済まぬことになった。こちらの手落ちだ。誠に申し訳ないっ!」 彼はまた深々と頭を下げた。

テティスは、エカテリナとオンネトの記憶を読み解き、事件の詳細を知った。

「・・・そうですか。・・・カーチャ、私も謝らなければなりません。貴女を守れなかった・・・辛い思いをさせて、本当にごめんなさい。」

テティスは、エカテリナのそばに来て頬に触れようとしたが、それは風が擦ったようにしかならなかった。

「駄目ね。実体がなければ触れてあげることさえできない・・・。」

「テティス・・・ありがとう。そのお心遣いだけで十分です。」

エカテリナは言った。

「エカテリナ、テティス殿・・・。今回の加害者たちは、我々ウユニが責任を持って厳しく処罰します。それは任せて下さい。」

後日、オンネトはテティスに処罰内容を伝えた。全能力と記憶の剥奪および聖獣クラーケンへの供物化・・・それはウユニにおいては最も重い刑だった。

一六. 少女アムリタ

ウユニには、聖獣と呼ばれろ生命体が何体かいる。空を行くガルーダ、海底深く潜むクラーケン、神出鬼没の ユニコーンなどである。

グラーヴェランド事件の被害者のうち、家族と再会できなかった者は一人のみ。それが当時六歳だったアムリタだ。彼女の住んでいた村は、グラーヴェー味によって滅ぼされてしまった。

「どこかに親戚はおらぬのか?」

オンネトは膝をかがめて優しく尋ねた。とりあえずの面倒は城で見るにしても、それもいつまでもというわけにはいかぬ。

少女は、首を横に振った。

「誰もいない。みんな殺された。」

この子だけは売り物になると思ったと、一味の者が白状した。たしかに成長すれば美しくなるであろう素質を、 この子は持っている。

「それで、お前は何を持っている?テレパシーか?」

少なくともテレキネシスやテレポートはなさそうだ。もしあれば、事件の時に使って逃れたはずだ。少女は、少し 考えて答えた。

「うーん、よくわかんないけど、動物たちとは話せるよ。今おじさんが考えてることもわかる。私、ここにいられないんだったら、動物たちのお世話ができるところがいい。」

「そうか。わかった。探してみよう。」

最初にオンネトは動物園の園長夫妻のところに連れて行った。彼女は渋った。

「ここは、あまりよくない。」

「どうしてだい?」

「あの女の人、台形してる。・・・」

「台形?」

どういうことを言いたいのだろうか。何かは分からぬが、きっとそれなりの理由があるのだろう。

次に、牧場に行った。

「申し訳ありません、陛下。うちはもう子だくさんで・・・。」 つまり、この子は預かりたくないのであろう、とオンネトは考えた。

さて、どうしたものか・・・。と考えていると、空から声が聞こえた。

「その子は、私のところで預かってもよいぞ。」

見上げると、精霊鳥ガルーダがそこにいた。本来は巨大なのだが、この時は人を二、三人乗せるにちょうど良い大きさで現れた。

「ガルーダ!」

オンネトが叫んだので、アムリタも空に現れた大きな鳥に気づいて驚いたようだ。思わずオンネトの腕にしがみついた。しかし、即座に相手に敵意がないと感じたらしい。恐れなくなった。

鳥は彼らのそばに舞い降りる。

「オンネト、その子には、私の世話を頼みたい。ときどき背中が痒くなるのでな。」

「しかし、食べ物はどうする?それに学問は?」

「私のところには、近隣の村々から貢ぎ物が来る。食べ物も書物も、そのついでに持ってきてくれれば良い。あとは引き受けよう。」

「有難い話だが、何故君がそこまでする?理由が分からぬ。」

「なに、私は、この子を気に入ったのだよ。この子の中の強さと純粋さにね。それに頭も良い。女性たちが自分を庇ってくれたことも、ちゃんと理解している。」

オンネトは。少女に訊いた。

「アムリタ、本当なのか?一緒にいたお姉ちゃんたちがどんな気持ちだったのかまで分かってるのかい?」「うん。青い髪のお姉ちゃんも、私を庇ってくれた。すごく感謝してる。」

「アムリタ・・・。君もウユニの子なのだね・・・。」

オンネトは、少女のことが急にいじらしくなってきた。

「ガルーダ、せっかく迎えに来てくれたところをすまないが、やはりこの子は私が引き取る。そうさせてくれないか。」

表情が分からぬ鳥の顔で、ガルーダは言った。



「ほほぉ、君が育てるというのか。まぁ、それもよかろう。しかしその前に・・・。」 ガルーダは、自分の羽根を一枚抜いて、己が腕に突き刺した。

「何をする?!」

オンネトが叫んだ。

鳥は腕から出た血の一滴を、少女の上に垂らした。赤い血は、少女の頭にかかってすぐに消えた。 「私の力を少しその子に分けてやっただけだ。オンネト、この子を頼むぞ。不幸にしたら、私が許さん。」

ガルーダは、そのまま大空へと飛び去った。

オンネトは、遠くへと消えていくガルーダを見送った。もしかしたらガルーダは初めから自分にこの子を引き取らせる気でいたのかも知れぬ。私にその気を起こさせるためにわざと試すようなことをしたのだ・・・。

「アムリタ、おじさんの子供にならんか?」

「んー・・・どうしよっかなぁ・・・。」

少女は、穴が空くほどオンネトを見つめた。

「いっかー。」

こうして、アムリタはオンネトに引き取られ、皇女として育てられた。彼とサトヴァ妃との間には子供がいなかったのだ。

それから十年の年月が経過した。

アムリタは、美しく聡明な少女に成長していた。ただ、あの日自分を救ってくれた女性たちのことは、ずっと忘れない・・・。

そんな彼女に、あるとき変化が起きた。突然『繭』のようなものが彼女をくるんでしまったのである。

それはウユニでは、さほど珍しい事ではない。子供から大人になるとき、しばしば起こる現象だ。力が強い者に ほど、それは起こる。

「アムリタは、どんな姿になるのでしょうね。」

サトヴァが言った。彼女自身も、両肩が鱗で覆われている。

「アムリタは、ガルーダの血を受け取っている。強い力を持つことは確かだが、どこまでいくか・・・。」
今では、彼はアムリタが可愛くて仕方がない。

「この子には私と宮廷医のサラがついていますから、貴方は何日間か席を外していてください。殿方には見せられません。」

それはウユニの掟だった。繭から出た時、その体は裸体だ。異性が見てはならない。オンネトには長く感じられる数日間だった。

五日後の朝、オンネトのところに使いの者がやってきて、サトヴァからの伝言を伝えた。

さっそく部屋に駆け込むと、容態の落ち着いたアムリタが椅子に座っていた。頭からは二本の捻れた小さな角が生えている。

「アムリタ!」

オンネトは娘を抱きしめた。背中には違和感があり、妖力も強くなったように感じる。サトヴァが言った。「オンネト、この子は角が生えた他にも、背中に羽を持っています。」

「羽か。それはやはりガルーダの血かな。」

「お父様・・・。私、今までよりも遠くのことも見えるみたい。それに、テレポートも・・・。」

いろいろ試させると、読心術はより強くなり、炎と雷(いかづち)、治癒術、能力操作など多くの力が備わったようだ。オンネトは特に能力操作が出来ることに注目した。もしかしたらこの娘(こ)は本当に皇位を継ぐに相応しいのやもしれぬな・・・。

「ガルーダのところに行ってもいいですか?この姿を見せたいの。」

一七. 皇女の家出

ウユニでは、それぞれの能力の成熟度合いによって『成年の礼』が行われる。

「お前はまだしばらく先にしたほうが良さそうだな。」

オンネトは娘の成年礼をしばらく見合わせることにした。力が強い分、自分で制御して使いこなすまでには時間がかかりそうだ。

「でも、お父様、私は、どうしても他の国に行きたいの・・・。」

「駄目だ。とにかく待て。」

そんなやりとりが数日間続いたある朝、アムリタの姿は時間城から消えていた。

「あの子、きっと成年礼の前に行きたかったのですね。」

サトヴァは冷静だった。

「しかし、国外は、私が千里眼で守ってやることが難しい。あの子はまだ未熟なのだぞ!もし何かあったら・・・・!」 オンネトには心配しかなかった。

「あの子は、きっと大丈夫です。おそらくこうなるのではないかと思っていましたよ。

あの子は、グラーヴェランド事件で自分庇ってくれた人々に会ってお礼を言って回っていました。でも、七人のうち、国外のライランカとカレナルドの二人にはまだ会えていません。おそらくあの子は、ライランカとカレナルドに行こうとしているのです。」

「おそらくそうであろうな。やはり止められぬか。」

オンネトはがつくりと肩を落とした。

その頃、アムリタはすでにウユニ大陸を遥かに望む、孤島ナーダマの港町までテレポートしてきていた。オンネトの千里眼も、そこまでは及ばない。

「お父様、お母様、黙って出てきてごめんなさい。」

彼女は大陸に向かって呟いた。

けれども、彼女は別の気配を感じ取ってもいた。誰かが見ている・・・時間城からずっと・・・。でも、敵意はない・・・。

「誰?誰なの?姿を見せて。」

気配の主は、槍と鎧で武装した四十歳くらいの女性だった。槍を前に置いて彼女の前に跪く。

「流石は姫様、お気づきでしたか。ご無礼仕りました。水竜騎士ボーディにございます。明け方近く、姫様が城を 出られるのに気づき、急きょお供した次第。」

竜の角を生やし、厳しい顔つきをしてはいるが、アムリタにはその瞳が温かく思えた。

騎士階級は、惑星市民条約機構のもとで世界的に皇帝制に統一された後、ほとんどの国で廃止されたが、ウユニでは騎士たちの強い意志を尊重して、私的財産権を完全放棄して国に尽くすことを条件に、その名誉を維持していた。

「ボーディ、貴女でしたか。でも、騎士はあくまでも国の為に尽くすもの。私的な目的のために国外に向かう者を守ることは、騎士の任務を逸脱することになると思いますが。

それに、私はもともと皇帝の実子ではなく、引き取られただけ・・・。皇位とは関わりがありません。」 アムリタは言った。彼女は本当にそう思っていた。次期皇帝は、おそらく議会で決められた人がなるのだろう、 と。

しかし、ボーディの意見は違っていた。

「姫様、皇位とは関係なく、今の貴女様は紛れもなくウユニの姫様です。オンネト帝陛下とサトヴァ皇后陛下のお子様にあらせられるのです。

両陛下が姫様を思われる心は、まさしく親心というものです。姫様のお望みを叶え、無事に時間城までお帰しして、そのご心配を取り除いて差し上げるのも、我々騎士の任務と心得ます。

さらに、まだ繭から出られたばかりの、十六歳の姫様お一人をみすみす行かせては、それこそ騎士の恥。どうかお供することをお許し下さい。」

ボーディは懇願した。彼女には騎士としての誇りと使命感があるのだろう。

「わかりました、顔を上げて下さい、ボーディ。それではカレナルドとライランカまで護衛をお願いします。ただ、旅のあいだは名前で呼び合いましょう。」

「はっ!かしこまりました、アムリタ様。」

こうして主従二人の旅が始まった。

ボーディはまず搭乗できる船を探した。船さえ確保してしまえば、あとはカレナルドを経由してライランカまで行けば良い。

ところがその船の手配がなかなか難しかった。大方の船は、彼女たちの角を見ただけで断るのだ。

「ウユニ人?あー、ダメダメ!」

「他の船に乗せて貰いな。何もうちでなくてもいいんだろ?」

「ふん、獣が!あっち行けよ!口を利くのも汚らわしい!」

最もひどかったのは六艘目の女主人だ。彼女たちの姿を見るなり、目を三角にして、あからさまに嫌な顔を見せて扉を閉めてしまった。

「我々を一体何だと思っている!」

ボーディはたいそう憤慨した。騎士として、ウユニ人としての誇りが傷つけられたのだ。

「まあまあ、ボーディ。そんなに怒るだけ無駄です。人というものは、すぐ見かけで判断してしまう。そうしたものです。」

アムリタがなだめる。

「しかし、このままでは海を渡れません。・・・」

その時、二人の会話を途中から聞いていた者がいる。

「何なら、乗せてやろうか?ただし、その分働いてもらうが。」



見れば、ボーディと同じように武装してはいるがもう六十くらいの女性だ。肩にキャプテン・コートを羽織り、腰にサーベルを下げている。

「貴女も船を持ってらっしゃるんですか?」

アムリタが尋ねた。

「あぁ、持ってるよ。みんな乗りたがらないが。・・・あれさ。」

その指さす方向にあったのは海賊船だった。

「お前、海賊か!よもやこの方に変なことをさせる気ではあるまいな?!この方に指一本触れてみろ、ただでは おかぬ!」

ボーディは槍を構えた。

「ほぉ、お前たちには主従関係があるのか。嫌なら構わん。・・・と言いたいところだが、私も実は人手が少し足りなくて困っていたところなのだ。何分にも見ての通りの海賊なのでな。

それに、私も女であることに変わりはない。決して妙なことはさせぬ。料理、洗濯、皿洗い、掃除、船の帆の手 入れや甲板磨きなどの雑用だ。ウユニ人なら、それに嵐よけもできるだろ?こっちも好都合なんだよ。」

「お前、この方にそんな雑用をさせる気か!」

ボーディは怒ったが、アムリタは平気だった。

「いいでしょう。私、やります。」

「アムリタ様!」

「ふーん、あんた、アムリタっていうのかい?なんか良いとこのお嬢様みたいだけど、こんな海賊の言うことを真に受けるわけ?甘いねぇ、嘘かもしれないのにさ。」

「私には、人の心の良し悪しが分かります。貴女は見かけは偽っていても、実は優しい人。・・・私がこれから訪ねていく人たちと同じなのです。」

女海賊は、照れくさそうに微笑んだ。

「へぇ、そりゃどうも。どうやらお金持ちのお嬢様の道楽じゃないらしいね。さぁ、乗りな!海賊船ルナ・ブランカ号にようこそ!私は、キャプテン・マグダレナ。」

一八. 水竜騎士ボーディ

ルナ・ブランカは、禍々しい外見とは裏腹に、内部は所々にムーブメントなどが飾りつけられた美しい内装の船だった。

「見た目をああしておかないと、何かと物騒だからね。一応『海賊』なんて名乗ってるのも、そのためさ。」 マグダレナはアムリタとボーディをホールに案内した。

「もしや、この船には女性しかいないのではありませんか?」

アムリタが尋ねた。船内に男性の気配を全く感じないのだ。

「おや、お嬢ちゃん、察しが良いね。その通りだ。しかも、みんな訳ありでねぇ。」

そこへ、茶色い髪の女性が入ってきた。

「キャプテン、また誰か連れて来たのですか?」

その姿を見た瞬間、アムリタは駆け寄り、抱きついた。

「バレンシアお姉様!」



いきなり抱きつかれた本人は、唖然として相手のなすがままになっている。

「な、なに?!どうして、私の名前を?!」

「私、アムリタです!グラーヴェランド事件の時に助けていただいた、アムリタです!」

「アムリタ・・・・? そうだ、思い出した! あの時の女の子!」

バレンシアと呼ばれた女性は、一旦アムリタの顔を自分から少し離して改めてよく見つめ直した。確かにあの子の面影がある・・・。その頬を軽くさすってやると、彼女の目はますます潤んでくる。

「大きくなったわねぇ。無事で良かった。・・・こんなに立派になって・・・。」

バレンシアはアムリタを抱きしめて、頭を愛おしく撫で続けた。きつく抱き合った彼女たちの目には涙が溢れる。「・・・・そうだったのかい・・・。」

マグダレナはすべてを察した。

一方、ボーディのほうは訳が分からない。彼女はアムリタからまだ何も聞いていなかったのだ。

「アムリタ様?一体どうなさったのです・・・?」

歩みよろうとする彼女をマグダレナが止めた。

「今はそっとしといておやり。

そうか、あんたは何も知らずに付いていたのか。グラーヴェランド事件を覚えているかい?」

マグダレナがボーディに話しかけた。あの忌々しい事件は忘れようとしても忘れられない。いや、ウユニ人として絶対に風化させてはならない事件だと、ボーディも思っていた。

「バレンシアも被害者のひとりだった。いきなり連れ去られたんだそうだ。あの子は他の五人と捕まっていた。そこにまた、まだ年端もいかぬ小さな子供が連れてこられて乱暴されようとしたんだ。その時、その場にいた女たちがみな身を挺して女の子を庇った。あのバレンシアもそうだ。おかげでその子は何もされずに済んで、数日後に警官隊が突入して助かった。

その後、バレンシアは解放されて家に戻されたんだけど、それが厳格というか冷たい家族でね。不潔だとか何とか言って家から追い出しちまった。バレンシアはあてもなく街中を彷徨っていたところをあたしが見つけて船に乗せたって訳。だけど、あの子もまだ運が良かった。もし悪い男どもに見つかっていたらと思うと、ぞっとするねぇ。」

マグダレナは、溜息をついた。

「アムリタがカレナルドとライランカに行きたいと言ったのも、その時に自分を守ってくれた女たちに会うためなんだろう。バレンシアはカレナルド人、そしてもう一人はライランカ人だった。・・・」

「ひどい家族もいたものだ。それにしても、君は良い奴だったんだな。・・・疑ってすまなかった。私はボーディ。水 竜騎士ボーディだ。」

ボーディは手を差し出した。

「ウユニには騎士が残っていると聞いていたが、本当にいたとはねぇ。・・・その騎士さんが海賊なんかと握手していいのかい?でもまぁ、折角だから。」

マグダレナは、手を握り返した。

「待て・・・騎士のあんたが付き従っているとすると、あの子は・・・?!」

「そうだ。あの方こそウユニのオンネト帝陛下のご息女アムリタ様なのだ。



姫様が居城を抜け出されるからには、何かよほどの理由があるはずだとは思っていたが、そういうことであったとは。

姫様は六歳の時に、オンネト帝陛下が城に連れておいでになった。私たちには、ただ身寄りのない子供が森の中で迷っていたので連れて来た、としか仰らなかったのだ。」

アムリタたちが泣き止んだ頃を見計らって、マグダレナが言った。

「さて、アムリタ。これでカレナルドに行く目的は無くなった訳だが、どうするね?」

「出来れば、このままライランカまで乗せて下さい。お願いします、キャプテン!」

「回り道になっても、かい?こっちにもいろいろあるんでねぇ。」

「もちろんです!何でもやりますから。」

「わかったよ。分かったから、その懇願するような目は止めとくれよ。こっちが恥ずかしくなるじゃないか・・・。バレンシア、お前がいろいろ教えてやりな。世話係だ。」

その夜、アムリタはバレンシアと寄り添って眠っていた。

ボーディは、マグダレナを連れて甲板に出た。

「これから、私のもう一つの姿を見せる。驚かないでくれたまえ。そして、アムリタ様には内密に頼む。」

「姫様に隠し事作っていいのかい?それに、なんであたしを連れて来た?」

「君には、これから世話になる。キャプテンとして、己が乗組員をより詳しく知っておきたいだろうと思ってな。」 ボーディの姿がいきなり二つに分かれた。一つは角が無くなった普通の人間の姿、そしてもう一つは完全なる 巨大竜だ。

「紹介しよう。我が分身、スヴァーハーだ。

スヴァーハー、済まんが時間城まで使いを頼む。ここからならまだ往復できるはずだ。」

竜は、遙か彼方まで飛んでいって、あっという間に見えなくなった。

「そうか。あの子のことを知らせに走らせたね。」

マグダレナが言った。

「あぁ、ご両親はさぞかし心配されているだろうからな。私が付いて、更に君のような頼もしい味方も出来たことをご報告しておけば、きっと安心される。それに、多少の回り道になっても、目的地はもうライランカのみと定まった。それだけ大きな前進と言える。」

「ふーん・・・。それにしても、あんた、結構美人じゃないか。騎士なんかにしとくのは勿体ないねぇ。」 マグダレナは、ボーディの顔を覗き込む。騎士はわずかにはにかんだようだった。

「からかうな。・・・あぁ、もう帰って来たか。ご苦労であった。」

竜が再び現れ、ボーディはまた元の厳つい騎士に戻った。

一九. 雪の墓標

翌朝から、アムリタとボーディは船内で働き始めた。掃除、洗濯、皿洗いから帆の繕いまで、アムリタは何でも器用にこなした。彼女は六歳まで普通の村人として育った。何事にも人手が足りなかった小さな村で、子供にも役割が与えられていた。慣れていたのである。

それにひきかえ、ボーディは幼少期から武術しか教えられていなかった。料理はおろか、まともに箒や雑巾の使い方すらおぼつかない。モップを持たせても力の入れすぎですぐに穂先を擦り切らせてしまった。

これにはマグダレナも呆れたが、ボーディに悪意がないのは分かっている。

「あんたに家事を教え込むのは、相当骨が折れそうだね。そんなんじゃとても嫁には行けないよ。」 ボーディは、赤面して俯き加減になりながら言った。

「わ、私は別に嫁に行こうなどとは思っていない!・・・しかし、迷惑をかけた。・・・」

「ま、そのうちに覚えるだろ。しばらくは、みんなの師範役になれば良い。武術を教えるんだ。それなら得意だろう? 一応はあたしが教えてあるが、まだまだなところがある。そうさねぇ、毎日、朝夕一時間くらい練習時間を取るか。それから、操舵室で案内を頼むよ。嵐とかシケとかさ、分かるんだろ?」

操舵室で舵を握るのは、マグダレナと副船長のシャンメイ・ルトフ・リンだ。交代で船を進めているとのことだった。

「私のことは、サブキャップと呼んでね。」

シャンメイは四十代後半くらい、ちょうどボーディーと同じ年頃のもの静かな女性だった。しかし武術の稽古では、かなりの腕を持っている。

「なかなかの腕ではないか。生半可ではない。どこで習った?」

「父は、私たちきょうだいに剣術の家庭教師をつけたの・・・。もうすぐ分かるから言うけど、次の寄港地はスノー・ クリスタル。私の両親がそこに眠っています。」

「はて、そのような地名は聞いたことがないが・・・。」

それは、ウユニのナーダマ港とカレナルド大陸の中間地点にある小さな無人島だった。あちこちに凍結した岩が散乱し、その隙間を粉雪が覆っている。植物は一切見当たらない。極南に位置するウユニが他の国と同じように生活できるのは、大陸中から噴き出している『法カ』の影響と考えられているが、その一帯を離れた地は、やはりかなり寒い。すべてが雪と氷で覆われ、一切の生命体を拒む。

上陸したシャンメイは、真っ直ぐ歩いて行った。アムリタとボーディは、その様子をなんとなく見ていた。 やがて、彼女は一つの人工的な透明のモニュメントの前で立ち止まって座った。花を手向けて話しかける。 「お父様、お母様、ルトフが参りました。お久しぶりでございます。・・・ライブラ兄(にい)が亡くなったそうです。寂 しくなりますね・・・。」

彼女はその場に泣き伏した。雪の結晶の形をしたそのモニュメントには、二つの名前が彫られていた。 ・・・ヴィクトル・ルマール、マルカ・ルマール、ここに眠る・・・

「シャンメイを見てるのかい?」

アムリタとボーディの後ろからマグダレナの声が聞こえた。

「人様のことにはあまり首を突っ込むんじゃないよ。でも、あの子は毎年この時期にここに墓参りに来るんだ。あたしゃ、きっと命日に違いないと睨んでるんだがね。」

アムリタが言った。

「私には、目で見える範囲であれば、ほとんどの人の心が分かります。キャプテンが考えている通りですよ。彼女は、ご両親の命日に合わせてここに来るのです。

今年はそれに加えて、お兄様を亡くされたようですね・・・お辛いでしょう。」

そう言っているうちに、彼女は自分の実の家族を思い出した。家族は、グラーヴェの一味によって殺害された のだ。

「お父さん、お母さん、アグアお兄ちゃん、ヤーバーお兄ちゃん・・・。」 彼女も泣き出した。

「アムリタ様・・・。」

ボーディが優しく包み込む。彼女の鎧にしがみついて、アムリタは泣き続けた。

船に戻ってきたシャンメイは、元の穏やかな副船長に戻っていた。彼女は、あのモニュメントの前でだけ昔の自分に戻ると決めているのである。

「アムリタ、貴女には隠し事はできないようですね。もう私がこの船に乗った経緯も分かっているのでしょう?」 「はい。でも、貴女は今のままが一番いいと思ってらっしゃる。私がとやかく言うことはありません。」 「でも、お隣のボーディさんは知らないのでしょう?説明して差し上げますわ。」

シャンメイは、静かに話し始めた・・・。

私は科学技術立国アルリニアに生まれました。でも、実の両親のことは何も知らないの。シャンメイは、香り立つ梅っていう意味らしいけれど。

一組の夫婦が孤児院にいた私を引き取ってくれた。そこにはもう、子供が五人いて、本当の家族のようになっていったわ。私の後から、もう一人ウユニ人が引き取られて、きょうだいは七人になった。賑やかで温かい家庭だった・・・。

それだけ多くの子供を集めて、環境設計家の父が成そうとしたのは、人々の幸せと自然との共存。それぞれが 十五歳になるまで、父は環境設計学をはじめとする全ての知識と、自分の身を守るための剣術を私たちに身に つけさせた。そして、それぞれの母国に帰したの。参謀としてね。

でも、科学技術立国では、環境設計学を軽んじた。人間の力でできないことはない、とでも思っているのね。私は国を出た。そこをキャプテン・マグダレナが拾ってくれたの。

そして数年が経った頃、その両親・・・ルマール夫妻がこの海域で遭難したことを知ったわ。あれは私が二十八歳の時だった。そして、きょうだいが話し合って、あの墓標を建てた。・・・

「待て。すると君にはウユニ人のきょうだいもいるというのか?」ボーディが尋ねた。

「えぇ、名前はムーム。今は環境局の長官を務めています。」 二人はムームを知っている。

「あのムームが・・・。」

「ムーム長官が貴女の妹御なのか。」

「あなた方は妹をご存じなのですか?!」

シャンメイも驚いたようだ。

「実は、私は皇帝に引き取られた者。これはウユニに仕える騎士なのです。私が国外に行くのに付き従ってくれているのです。」

「では、貴女はウユニの姫様!ご無礼仕りました。」

「いえ、私はただ引き取られただけです。いわば貴女と同じ立場なのかもしれませんね。・・・お兄様のこと、心よりお悔やみ申し上げます。

それにしても、ご縁とは分からぬものですね。この船で、私は大恩あるバレンシアお姉様と、ムーム長官のお姉様のお二人に出会えたのですから。」

実は亡きヴィクトル・ルマールが縁を幾重にも結んでいたことを、この時の三人は知る由もなかった。

二十. 竜の親子

船はカレナルド大陸の端にあるリャベの港に着いた。海洋警察が本部を置く港町ポルテアスルとは反対側に あって治安はあまり良くないが、毎月市が立つ、賑やかな街だ。

マグダレナも、その海域ではここで商っている。交易品を売り買いして、その差額で暮らしているのだ。 力持ちのボーディが荷下ろしを手伝う。アムリタも、テレキネシスで荷物を動かしていた。

「アムリタ、ボーディ、おかげで助かった。いつもの半分の時間で済んじまったよ。」

「そうか?役に立てて何よりだ。私はいろいろなものを壊してしまったからな。」

「あたしらはこうして暮らしてるんだ。遠くの珍しい物を運んできて売る。ま一、言ってみりゃ手間賃だね。」

ふと見ると、バレンシアが海岸に佇んで海の向こうを寂しそうに眺めている。

「バレンシアお姉様・・・。」

アムリタが近づいて声をかけた。

「あぁ、アムリタね。この港もすっかり変わってしまった。橋だの桟橋だの倉庫だのが建ってしまって。昔は綺麗な水平線がいっぱいに広がっていたのに。」

「現実は変わっても、思い出は残っています。何らかの痕跡を見つけて懐かしむのも、たまには良いかもしれませんね。」

「痕跡・・・ね。アムリタ、貴女、本当にあの時の子なの?何だか私より年上の人みたいじゃない。」 彼女は微笑みながら、まだ自分よりは背が低いアムリタの頭を撫でた。

「よぉ、姉ちゃん、寂しそうだね。遊ばない?」

その時、船員らしき男が何人か近寄ってきた。

「悪いね。私は忙しいんだ。」

バレンシアは断って通り過ぎようとした。だが、男たちは諦めない。

「そんなつれないこと言うなよ。」

近寄ってきて、手を引っ張ろうとした。その時だ。

「止めなさい。さもないと怪我をしますよ。」

アムリタが毅然とした態度で言った。

「あれぇ?今なんか言ったぞ、このガキ。」

「ウユニ人か。だが、まだ子供じゃねぇか。こいつも連れて行っちまえ。」



どうやら良からぬ男たちのようだ。過去がフラッシュバックする。バレンシアは身震いした。私一人なら習い覚えた剣でなんとかなるかもしれないが、果たしてアムリタまで守りきれるかどうか・・・。

しかしその不安に反して、アムリタがバレンシアを庇って男たちの前に立ちはだかった。

「そうですか・・・・。では、力ずくでそこを通してもらいます。まだ力加減がわからないので、殺してしまうかもしれませんが、許して下さいね。」

アムリタの全身から雷が放たれた。稲妻が幾筋もの閃光となって男たちの体を直撃する。

「ひ、ひいい・・・。」

ある者は全身が痺れ、またある者は肌が焼けただれて気絶した。男たちが恐れ、悲鳴を上げて逃げていった あとを、アムリタはバレンシアを連れて進んだ。

無事に船に乗り込んでから、バレンシアはアムリタに礼を言った。

「アムリタ、ありがとう。今度は貴女に助けられたわね。でも、あの時にはあの雷はできなかったのね。」 「はい。ウユニ人は、成長しないうちは何も出来ません。力に目覚めて初めて、いろいろな特殊能力が使えるよう になるのです。もしあの時、今の力が使えていたらと思うと・・・本当に悔いています。」

「アムリタ・・・。貴女は小さかった。仕方がなかったのよ。それより、今ここにいる貴女自身を大切にして頂戴。そのほうが私は嬉しいの。」

「バレンシアお姉様・・・。」

アムリタはまた泣き出しそうになった。

「泣かないで。貴女はもう大人になったの。自分で立派に身を守れるじゃない。だから、もう泣かなくて良いのよ。」

その日からアムリタは改めて特殊能力の練習を始めた。たとえ悪者であったとしても、こちらの技術不足で相手の命を奪うようなことがあってはならないと気づいたのだ。

雷と炎を、自ら投げた小石に当てる。微妙に力加減を変えたり、幾つも同時に飛ばして狙ったりした。テレキネシスで空中に浮かせたりもした。

「ウユニ人ってのは、やっぱり凄いねぇ。」

マグダレナが感心して言う。

「いや、アムリタ様は恐らくまだ伸びる。」

ボーディは、彼女に秘められた力を感じ取っていた。アムリタはまだ飛ぶことを知らなかったが、背中に羽がある以上、もしかしたら空を飛ぶこともできるかもしれないのだ。ボーディ自身も、単独で、あるいは分身竜に乗って飛行することができる。

「アムリタ様、一度羽を試してみられては如何ですか?まだ空へはいらっしゃっていないでしょう? 気持ちが良いですよ。」

「うーん、どうかしらねぇ・・・。」

ところが、背中の羽は丸まっていて、自分の意志では広げることができなかった。

「私には無理かな・・・。」

アムリタはそう言ったが、ボーディはそうは思わなかった。何かきっかけが必要なのかもしれないと考えたのだ。彼女は、しばらく様子を見ることにした。

ルナ・ブランカ号はカレナルドを出て、オルニア大陸に向かった。その数日後のこと・・・。

突如として雷雲が船の上空にかかった。その時は、マグダレナがアムリタの案内のもとで舵を操っていた。

「おやぁ?暗雲がかかってしまったね。アムリタ、あんたは感じなかったのかい?」

マグダレナが尋ねた。ウユニ人なら、雷や嵐が分かるという噂だった。

「これは、普通の雷雲ではありません。竜族の気配です。キャプテン、真正面を見て下さい。」

「ん?あの山がどうかしたかい?」

前方、遥か遠くに仰ぎ見るような高い影が現れていた。

「あれは山ではなく、竜族の体です。」

「何だって?!」

あのとてつもなく大きな影が生命体だというのか?・・・マグダレナがそう聞き返そうとした時、ボーディが奥から ふらつきながら出てきた。目がうつろになり、まるで他の何者かに操られでもしているかのように、無言のまま甲 板に出て行く。

「ボーディ?!」

マグダレナが呆然としている中、アムリタは彼女を追いかけた。ボーディは竜族。あの竜に引き寄せられたとしても不思議ではない。

(お母様・・・。)

ボーディではない別の声が聞こえる。普通の人間には聞こえないであろうそれは、きっと竜の声に違いない。そうか、あの竜は、ボーディの分身竜スヴァーハーのお母様なんだわ。そして、我が子を呼んでいる・・・。

また別の声が聞こえる。今度はおそらく母竜の声なのだろう。

(娘よ、我が愛しき娘よ。・・・私にはおまえの顔が見えない・・・会いたい・・・。)

竜はかなり遠くまで見通せる筈だ。何かがおかしいと思ったアムリタは叫んだ。

「スヴァーハー!ボーディから出て、私を乗せなさい!貴女のお母様とお話をさせて!」

ボーディの体から分身竜スヴァーハーが抜け出た。ボーディはそのまま倒れ伏す。マグダレナが慌ててボーディの体を引き起こすが、ボーディはなおも眠ったままだ。

(姫様、お任せしてよろしいのですね?)

スヴァーハーが尋ねる。

「できるだけのことはするわ。私を信じて。」

アムリタは、スヴァーハーの背中に飛び乗った。仔竜は、そのまま高く高く空を上った。そして、ようやく母竜の 鼻の先までたどり着いた。

(我が子スヴァーハーよ、そしてアムリタ姫様、よく来てくれました・・・。実は、三十年ほど前に、何かが喉に引っかかって取れなくなってしまったのです。そのせいで、私には遠くの物事が分からなくなってしまった。ウユニの貴女の声も姿も分からなくなってしまった。さぁ、もっとよく顔を見せておくれ。我が子スヴァーハーよ。・・・)アムリタが言った。

「ならば、母竜よ。私が貴女の中に入って、その刺さっている何かを取り去りましょう。貴女が困っているのなら、助けてあげたい。」

母竜は、アムリタを見た。

(アムリタ様、私が怖くはないのですか?さらにこの身に入るなど・・・。)

「スヴァーハーのお母様を何故(なにゆえ)私が恐れることがありましょう。遠慮は要りません。口を開けて。」 母竜が口を開き、アムリタはその中を奥へと進んだ。暗闇のはずが、その奥で微かに光る何かが見える。 それは、一本の槍だった。黄金に光っている。アムリタは、それを引き抜こうとしたが、なかなか動かない。 「私がやらなくちゃ!ここには私しかいないんだ!助けたい!絶対に助ける!」

何回目、いや何十回目だったろうか、槍が急にぐらつき、力余ったアムリタは弾みで槍と共に後ろにふっ飛んだ。

「ぬ、抜けたの?!」

その手には確かに黄金の槍が握られていた。彼女は、その槍が刺さっていた傷口を焼いて止血してから外に 出た。

母竜は、たいそう喜び、彼女に礼を言った。

(アムリタ様、本当にありがとうございます。旅のご無事を祈ります。スヴァーハー、ボーディと共に、この心優しき姫様によくお仕えするのですよ。)

(はい。勿論です、お母様!)

スヴァーハーが応えた。

アムリタが帰ろうとしてまたスヴァーハーの背中に乗ろうとすると、母竜は言った。

(アムリタ様、飛行の際にはもはやその子に頼る必要はありません。貴女の美しい心がその翼を羽ばたかせてくれるはず。優しさこそが貴女の力の源なのです・・・。)

「え・・・?!」

アムリタは驚いた。試しに跳び上がってみると、確かに体が軽い。もう少し力を入れて跳び上がる。体が宙に浮いた。背中に意識を向けて跳ぶと、それまでは動かせなかったはずの羽が意識的に羽ばたかせられるようになっていた。

「私、飛んでる・・・。」

スヴァーハーが付き従って、一人と一体は船の甲板に舞い降りた。マグダレナが驚いた顔で見ている。スヴァーハーは、再びボーディの中に入った。ボーディは意識を取り戻し、その瞬間に事情を把握したようだ。「アムリタ様・・・。どうもありがとうございました。これで母竜も元通りになりましょう。どうぞこの鏡でご自分のお姿をご覧下さい。」

彼女は懐から鏡を取り出して、それを大きくした。アムリタが覗くと、そこには大きくて黄金色の翼を背負った自 分が映っていた・・・。

ニー. 聖槍か魔槍か

「それにしても、何故(なにゆえ)私をお使いにならなかったのです?」

ボーディが尋ねた。アムリタが自分の分身竜に乗って、その母竜のところに行ったのが不審だったのだ。本来ならば、自分の目を覚まさせて母竜の様子を見させるのが普通であろう。そもそも騎士たる自分が、己の分身竜の問題を引き受けなくてどうする!

アムリタは、その時の気持ちを懸命に思い出しながら首をかしげる。

「うーん。何故かしらねぇ。私、あの時は私が行かなくちゃ、って、夢中で・・・。」 マグダレナが言った。

「もしかしたら、その槍はアムリタにしか抜けなかったのかもしれないねぇ・・・。」

「どういうことだ?! 私のほうが力が強いぞ。このような槍一本、造作も無く抜いてみせるわ。」

「あたしにゃ、そういうことはさっぱりだが、もしその槍が物理的な力ではなく、心でしか動かせないとしたら? ボーディ、あたしゃ別にあんたの能力がどうとかって言ってるわけじゃないんだ。ただ、人には向き不向きというのがある。アムリタは義務感とは無関係に母竜を助けたいと強く願った。無償の慈愛ってとこかね。それともあんた、自分がアムリタより優れているとでもお言いかい?」

そんなふうに言われては、ボーディも引き下がざるをえない。ボーディとスヴァーハーは一心同体。ボーディの主(あるじ)はスヴァーハーにとっても主なのだ。

「アムリタ様、ご無礼仕りました。」

彼女は頭を下げた。

「いいえ、貴女がそう思うのは当然です。私も理由が分からないもの。だって、たとえスヴァーハーが貴女の意に 反して行動したとしても、いつもなら貴女は意識を失うことはないはず。あるいはあの母竜が貴女をこの槍から は遠ざけようとしてわざと眠らせたのかもしれない。

それにしてもこの槍・・・竜族の力を殺ぐなんて普通の槍じゃなさそうね。 聖槍か、それとも魔槍か・・・。」 アムリタは己が手に握った黄金の槍を見やった。

「とにかく、この槍の正体が分かるまで、ボーディ、貴女はこの槍に触れてはいけません。」 「かしこまりました。」

もしかしたらこの槍は竜族には悪い影響を与えるものであって、アムリタ様はそれを見越してらっしゃるのかも しれぬと、ボーディは考えた。

マグダレナが言った。

「アムリタ、あんたは平気なのかい?それに重たくないみたいに持ってるじゃないか。」

「別に何も感じないわ。軽いし。・・・そうだ、お父様に訊いてみたら分かるかな?もうすぐ陸地に着くでしょう?お手紙を書くわ。何もテレパシーを飛ばしたりスヴァーハーを使いに出したりする必要はありません。」 アムリタは悪戯顔でボーディを見た。

「アムリタ様・・・私が皇帝陛下に使いを出したことをご存じなのですね。」

「私に隠し事はできませんよ。その時には分からなくても、私はいつでも貴女の記憶を辿ることができるのですから。 ふふふっ。」

アムリタからオンネトとサトヴァに宛てた手紙・・・

お父様、お母様、黙って出てきてごめんなさい。でも、私はどうしても、カレナルドとライランカにいる恩人たちに会いたかったのです。

ご縁があって、カレナルドの恩人・バレンシアお姉様にはすぐに巡り会うことができました。 乗せて貰った船にたまたま乗り合わせていたのです。『ルナ・ブランカ』という海賊船ですが、 船長も海賊とは名ばかりの優しい女キャプテン・マグダレナです。そして副船長はシャンメイ・ ルトフ・リン、この人はムームのお姉様なのだそうです。なんという巡り合わせでしょうか。皆さん、いい方ばかりです。でも、この船には、男の人は乗っていません。

水竜騎士ボーディと分身竜スヴァーハーが付いていてくれていることは、もうご存じだと思います。彼女たちはとても心強い味方です。

私はこれからライランカに向かいますが、お父様に伺いたいことができました。

実は、スヴァーハーの母竜の喉に黄金の槍が刺さっていたので、何とか抜いたのですが、 これまで竜族の力を封じ続けた槍のこと、迂闊にボーディに触れさせる訳には参りません。 それが果たして聖槍なのか魔槍なのか、私には分からないのです。教えて下さい。

また、槍が抜けて外に出た時、私の翼は初めて大空に羽ばたきました。スヴァーハーの母 竜は、それを私の優しさ故だと言ってくれましたが、それは事実なのでしょうか。

ライランカに着くまで、まだ旅を終えるわけにはいきませんが、どうかそれまでお元気で。

アムリタ

手紙は、オルニアの港からウユニ行きの定期運航船に乗せられた。

オルニアは、世界一の穀倉地帯である。シャンメイが説明した。

「ここにいたのが、このあいだ亡くなった兄なの。宮廷の派手さを嫌って、警察官として働きながら皇帝陛下を補佐していた。それでもライランカの姫様と愛し合って、向こうで公卿になっていたのだけれど・・・。」

シャンメイは亡き兄を偲びながら、首都・油井岡市に足を踏み入れる。この町には、貴重なシルクの専門店があるのだ。その店での買い付けは彼女に任されていた。

「やぁ、シャンメイさん、いらっしゃい。お待ちしてましたよ。」

店主が愛想良く出てきた。向こうでも、彼女は妥当な値で買い付けてくれる良い客である。

「おや、今年はお連れさんもご一緒で。まるで天使と騎士のような方々ですな。」

店主は、背中に羽根があるアムリタを眩しそうに見て微笑んだ。シャンメイは、二人を安心させようとして言った。

「このご主人は、ウユニにも何度も行かれていて、慣れていらっしゃるの。それに、オルニアでは平等が尊ばれる。外国人でも同じなのよ。」

アムリタは挨拶した。

「私はアムリタと申します。こちらは従者でボーディ。」

シルクの買い付けはいつも通りで、さほど時間はかからなかった。ただ、店主はボーディの怪力に目を見張った。彼女は一年分のシルクの束をまとめて肩に担いで、あっという間に船に走って行ってしまったのだ。

「惜しいなぁ。うちも、あの方のような力持ちをぜひ雇い入れたいものです。」

「それは残念ですわ。この方々は、一回限りですの。」

荷物を運び終えて帰ってきたボーディと森で合流して港に戻ると、漆黒の帆船が停留していた。シャンメイは、その船を見つけると喜んで走って行って、見張りの船員たちに何か言った。彼らもシャンメイのことをよく知っているらしく、親しげに話し込んでいる。

そのうちに彼女はアムリタとボーディを手招きして呼んだ。

「ここの船長も兄なの。紹介するわ。」



シャンメイに付いていくと、やや大柄な船長が彼女たちを出迎えた。

「ルトフ!久しいなぁ!元気か?」

「ホルス兄(にい)!」

シャンメイが抱きついた。彼女が普通の女性であることを二人に見せるのは、あのスノー・クリスタルの墓参に次いで二度目だ。しばらくするとシャンメイは兄の胸にすがって泣き出した。

「ホルス兄・・・。ライブラ兄が・・・ライブラ兄が亡くなったって・・・。」

「うん。聞いた・・・。俺も数日前にライランカでカーサルの姉貴と会って、事情を聞いてきたところだ。ジョギング中に倒れたらしい。」

二人の兄妹は亡き兄を悼んだ。

二二. 伝承の詩

シャンメイは、ホルスにアムリタとボーディを紹介した。

「ほほう、南の端から北の端へ、恩人に会いにねぇ・・・。」

ホルスは目を細めた。

「で、相手の居るとこは分かってるのか?ライランカにしたって、人は五千万人いるんだぜ。どうやって見つける 気だ?」

「お名前と当時のご住所は分かってますが、行ってみないと・・・。」

「何でえ、行き当たりばったりか。しょうのねぇ姫さんだな。」

「無礼な!姫様に向かってその口の利きよう、シャンメイ殿の兄上といえども許しませんぞ!」

ボーディは腹に据えかねたらしい。アムリタが押しとどめる。

「ボーディ、この方の優しさが分かりませんか。澄んだ瞳をしておられる。」

「えっ?」

「貴女も先ほどシャンメイ殿との兄妹愛を見たはず。」

そうだった。この人はシャンメイ殿を優しく包んでおられた・・・。

「ご無礼した。」

ボーディは頭を下げた。

「ま、俺もこういう話し方しか出来ねぇから、無礼にはなるな。許してくれ。

さて、行き当たりばったりもいいがよ、もっと良い話があるぜ。ルトフ、お前はライブラ兄のことをどこまで話した?」

ホルスは、シャンメイに問いかけた。

「え、たしか・・・オルニアで警察官をしていて、ライランカの姫様と結婚したことは話したと思うけど。」

「えぇ、そう伺ってます。」

アムリタが言った。

「そうか。それでな・・・俺は当時の皇太子と引き合わされたことがある。今は即位してるそいつに手伝ってもらったらどうだ?名前が分かってるんだったら、一発だぜ。」

「ホルス殿、どうもありがとうございます。貴方はやはり優しい方ですね。」

アムリタは言った。ボーディもこの男の度量を察して主の傍らに静かに控える。

「ま、ウユニのお姫様が来たってことになれば、宮殿でもおそらく通してはくれるだろうが、俺からもライランカにいる姉貴に一筆書いとこう。今の名前は、イリーナ・タラノヴァ、環境局長官をしている。着いたら、先にそっちに行け。

ときに、ボーディと言ったな、騎士だったら当然腕は相当立つんだろう?俺と立ち合い稽古をしてくれねぇか? 俺は強い奴と戦うのが大好きなんだ。」

ボーディはアムリタを見た。彼女は頷いた。戦って良いという許可である。

「喜んでお相手仕ります。ただ、ここでは手狭ゆえ、甲板のほうで。」

「おお、有難え。よろしく頼んまあ。」

船員たちも見物に加わって、船上のほとんどの者が甲板に出た。

「私はこれから姿を変えます故、しばしお待ちを。」

ボーディは、一旦背を向けて分身竜と分かれた。

(お、素顔は可愛い顔してるんだな。)

そう思ったのは、ホルスだけではない。ジャッカルはいつになく胸が疼いていた。

手合わせがしばらく続いた・・・。

「さすがに騎士だな。なかなか手応えがある。」

ホルスは、息を弾ませながら剣を納めた。久しぶりに良い相手を見つけて喜んでいる。

「貴殿こそ。とてもお強い。シャンメイ殿ともお手合わせしたが、それ以上とお見受けする。先ほどは誠に失礼した。お許しいただきたい。」

「それは気にしなくていいぜ。貴女の強さに敬意を表して、更なる情報を提供しよう。

ライブラの兄貴は、オルニアの警察学校でとてつもなく強い剣士たちを育て上げた。警察官級とかいう階級らしい。ライランカのアレクセイ帝も、その一人だそうだ。奴に会ったら、その黒い剣を見せてもらえ。それが目印だ。ルトフ、お前もだ。もし黒い鞘で青白く光る刀身の剣を持った奴と出くわしたら、決して敵に回すな。それは、ライブラ兄の教え子の可能性がある。・・・これは兄貴の遺言だ。」

「黒い鞘の剣・・・。」

シャンメイが呟いた。

その頃、ウユニの時間城では、オンネト帝が娘からの便りを読んでいた。

「竜族の力を殺ぐ黄金の槍・・・か。」

世に『黄金の槍』は数多ある。竜族の力を殺ぐというからには、おそらくウユニとも何らかの関連があるものであろうが・・・。彼が知るアムリタの翼の色が黄金色だというのも引っかかる。

黄金の槍が現れる時 黄金の翼が舞う 六波羅蜜の満つる時 永き魂もまた満つる 地は虹に覆われ 海は光を放つ



ウユニに伝わる伝承である。その意味するものは、現在全く伝わっていない。しかし今現在、黄金の槍と翼が 同じ場所にあって、海を渡っているのだ。

オンネトには胸騒ぎがしてならなかった。彼はこの詩を併せて娘に返事を書いた。

「その槍が何物であるかは私にも分からない。しかし念のため、ウユニに伝わるこの伝承の言葉を踏まえて、慎重に行動しなさい。良きにつけ悪しきにつけ、何か大きなことが起こるかもしれぬ。十分に気を付けるのだぞ。」

手紙を書き終えた時だった。上からバサバサという音と、彼に語りかける声が聞こえた。

「オンネト、時が来た。上に来い。私と共にライランカへ行くのだ。」

城の屋上に出てみると、ガルーダがいた。

「ガルーダ、どういうことなのだ?」

「もうすぐ一つの魂が尽きる。・・・ライランカはその形を変えるのだ。・・・」

二三. 魂の揺りかご

ウユニからライランカまで、船では最短でも十四日ほどかかる。その距離をガルーダは三時間で飛ぶ。 オンネトは、そのあいだにガルーダから詳しい事情を聞くことができた。彼の話によれば・・・。

精霊の寿命は三千年。そもそも精霊には、地上に何らかの強い思いを残した魂が形となったものも含まれる。 そうした形の精霊は、その思いが叶えられた暁には消滅するものなのだ。

そうした精霊たちの魂を本来あるべきところに帰すのに必要なものが二つある。それが莫大な『法力』を内包する黄金の錫杖とそれを操る人間だ。アムリタは、この務めを担うに相応しい力量を持っている。彼女が生まれた時から、ガルーダはその能力を認識して秘かに見守ってきた。あの忌まわしい事件は、ほんの些細な事故に過ぎない。あるいは、人が強くなるためには悲しみや苦しみをも経験しなければならず、そのために必要なことだったのかもしれないが。

そして錫杖のほうは、様々に形を変えながら、三十年ずつ百代にわたって各々の生命体に受け継がれた。スヴァーハーの母竜の場合は、それが最後の代となるため、槍の形を成して喉に突き刺さり、その血を吸収し続けるに至った。それも魂を帰すのに必要な力を得るためなのだ。

今回帰される魂・・・ライランカのテティスは、およそ三千年の寿命の間際にその強い思いが叶えられ、その魂が今まさに尽きようとしている、とのことだった。

「十年前、君はアムリタを引き取ると言った。あれもこの時のためだったのか?それに何故君と私まで行く必要があるのだ?」

「それは違う。あの子は人間だ。人間は、やはり人間によって育てられるのが一番なのだ。あの子にもあの子の 未来がある。たとえ運命といえども、あの子から未来そのものを奪うことはできぬ。

君に来てもらうのは、あの子を守ってもらうためだ。そしてその時に間に合わせるためには、私が送り届けなければならぬ。そして私は・・・。」

ガルーダはそこで言葉を切った。



「私は、まだルシャナ様が悟りを開かれる前に、あの方の体を借りた星の精ルシア様の手で、精霊のひとつが 『魂のゆりかご』に帰された場に居合わせたことがあるのだ。この星の中心にあたる『魂の揺りかご』に。

つまり『魂帰しの儀式』は、宇宙の理(ことわり)によるものであり、星の精ルシア様および覚者ルシャナ様のご意志でもあるのだよ。」

オルニア大陸を越えた海域で、オンネトは娘の姿を捉えた。彼は一羽の鷹を自らの内から取り出して手紙を持たせて放った。

「我が僕ソージュよ、行け。我が子の元へ!」

アムリタも父帝がガルーダに乗って上空を過ぎていくのを見た。

「お父様?ガルーダ?何故私を通り越して行ってしまうの?」

しかし彼女は父親の気配を感じる一羽の鷹が手紙をくわえてきたのを見て、その意図を悟った。父とガルーダは何かの事情で先にライランカに着かねばならないのではないか・・・。

彼女は鷹から手紙を受け取った。彼女が手紙を読み終えた時を見計らって、鷹が父親の言葉を追加した。 (私はお父様の僕ソージュにございます。そのお手紙に間に合わなかった内容をお伝えいたします。

ライランカを守ってきた精霊の魂が今その寿命を終えようとしています。その時に貴女様がその錫杖を使って、 その魂を星の中心にあたる『魂の揺りかご』に帰すのです。そのため、我が主は先にライランカに行って貴女様 をお待ちになられるのです。)

「お父様・・・。」

アムリタは安堵した。やはり理由があったのだ。

「分かりました。お父様に、アムリタは務めを果たしますと伝えてください。」

(たしかに承りました。それでは。)

鷹は飛び去った。傍に控えていたボーディにも、鷹の言葉は分かった。

「アムリタ様、どうかお役目をご無事に果たされますよう。ボーディも願っております。」

「ありがとう、ボーディ。この槍は、形を変えた錫杖だったのですね。」

「それで、ガルーダ、魂はどのようにして帰されるのだ?私にあの子を守れということは、何らかの危険が伴うということなのか?」

オンネトは娘を案じた。

「悪いが、それは私にも分からぬのだ。私が見た『魂帰しの儀式』は、星の精ルシア様ご自身によるもの。それを 覚醒したばかりのアムリタが行(おこな)ったら、どうなるのか。あの子の身が案じられてならぬ。

ときに、先ほどすれ違った船にもウユニ人の気配を感じた。君も気づいていたかね。」

「あぁ、何か戸惑っているような感じだったな。何故だろう。」

その頃、ルナ・ブランカ号と別れたホルスのローズナイト号は、オルニア大陸を離れて南へ進んでいた。ホルス もスノー・クリスタルを訪ねるつもりだった。

だが、先ほどからどうも副船長ジャッカルの様子がおかしい。何度も後ろを振り返っている。

「ジャッカル、お前どうかしたのか?さっきからずっと後ろを気にしてるみてぇじゃねぇか。」

ホルスは部下の異変にいち早く気づいていた。

「お前、もしかして惚れたのか。」

「お、親方!冗談は止めてくださいよ!あちらは騎士さま、竜族のエリートです!とても私など・・・。」 ジャッカルは顔を真っ赤にした。

「ジャッカル、俺は別にどちらとは言ってねぇぜ。なるほど騎士さんのほうか・・・。」

ジャッカルは、はっとした。そうだ、親方はただ惚れたのかとしか言わなかった・・・。まんまと親方に引っかけられたのだ。

「親方!ひどいです!」

「なんだよ。俺は別に何も言ってねぇぜ。だけど、ま、そのうちにまた会うだろ。そん時にゃ男らしく告白なり何なり するこったな。

お前も、もうこの船に乗って長い。そろそろ所帯を持ったらどうだ。」 ホルスは前を向き、舵を握りながら言った。

まだ二艘の船が揃ってオルニアに停泊していた時、ジャッカルは、アムリタのところに挨拶に訪れていた。母国を出て久しいが、彼もウユニ人の一人である。

「私は、ローズナイト号の副船長で、ジャッカルと申す者にございます。先ほど立ち会いの際にお姿を拝見し、改めてご挨拶にまかり越しました。」

ジャッカルもホルスとボーディの立ち会いを見ていて、側に佇む少女が母国の皇女だと気づいていたのである。彼はアムリタの前に跪いた。普段の眼帯は外してあって、ひときわ大きく赤い眼球が剥き出しになっている。 「ご挨拶ありがとう。ホルス殿に付いて長いのですか?」

「もう二十年ほどになります。ほうぼうの船に断られていたところを、親方に拾われて、ようやく船乗りになることができました。」

「そうですか。貴方はホルス殿を親方と呼んでいるのですね。いかにもホルス殿らしい。」 アムリタは微笑んだ。

「はい。とても包容力のある方です。」

「それに、信頼するに値する人物である、ということでしょうな。」

ボーディも口を開いた。たった数日前ではあるが意図せずして離れることとなった母国はすでに懐かしい。同じウユニ人と話していると安心する。

「あれほどの剣豪、早々いるものではない。大らかささえ感じる。貴方も良い船長に付かれているな。」

今やボーディもホルスをすっかり信頼している。剣豪にして、あの知識と人脈。もし騎士になっても十分通用するであろう。しかし、彼は何よりも自由を重んじる性格らしい。それが残念だ。

「ありがとうございます、騎士殿。貴女も直接姫様に仕えられて。」

「私は、姫様が城を出られるところをたまたま見つけて付いて来た。帰国後は規律違反の誹りを受けるかもしれぬが、この姫様のお供することができて良かったと思っている。悔いは無い。」

「騎士殿・・・。」

「ボーディ、貴女は私を案じて来てくれたのです。私は貴女をできる限り擁護しましょう。」

「姫様・・・。」



ジャッカルは、そこに美しい主従愛を見た。自分は何の目的も責任もなく親方に拾ってもらった。しかし騎士殿は、帰国したら何らかの処罰を受けるかもしれないことを承知の上で姫君を守り抜くために旅に出たのだ。騎士の顔は、眩しいほどに輝いていた。

「姫様、騎士殿、旅のご無事を心よりお祈りいたします。」 彼は深く頭を下げた。

二四. 法力の移譲

オンネトがガルーダに乗ってライランカに向かうことになる日の前夜・・・。

ライランカのアルティオとアレクセイ、マリンの三人は、テティスに呼び出されていた。フローラとオリガも一緒だ。湖に着くと、二人の幼い皇女たちは眠ってしまった。

「今日は、とても大切なお話をします。明後日の朝、私の寿命は尽きます。だから、これから私に託された力の全 てをあなた方ライランカ王室に委ねます。」

テティスは静かな声で言った。

「テティス、それは誠か?!」

アルティオが問いただした。

「えぇ、本当よ。そのための手筈がもう整いつつあるわ。明日はまず、ウユニのオンネトがガルーダと共に来る。 それから、黄金の翼と錫杖がここに着く。儀式はおそらく明後日の明け方になるでしょう。」 アレクセイが言った。

「それじゃやはり貴女は消えてしまうというのか?!ライランカは、これからどうなるんだ?」

「私がこの国に来た時の話は、貴方たちにもしましたね。その時にはもうこの国の人たちの髪は藍色だったと。帰 化礼に必要な力・・・正確には法力というのだけれど、その真髄はもともとあなた方ライランカ王室に伝わってい たの。それを元に戻すだけです。」

テティスは手をかざした。天から無数の花びらが舞い降りてきて、幼な子を含む王室一家を覆った。彼らの身体が一瞬光り、また元に戻った。

「これで、私に託された法力はあなた方に戻されました。ライランカにはもう私は必要なくなったのです。これから はあなた方がライランカの大地を守り、帰化礼を司るのです。」

「テティス、そんな!今まで見守ってくれたじゃない!何故なの?」

マリンが泣きそうになりながら叫んだ。彼女はテティスに歌を聴かせながら、実の姉と同じように思っていたのだ。

「マリン、泣かないで。どんな命にも寿命はあるものよ。私にも、ただその時が来ただけ。もし永遠の命というものがあるなら、それはまた永遠の悲しみや苦しみをも齎すでしょう。どうか私をライランカの大地から開放させてちょうだい。」

彼女の言うことも、もっともだった。

「それに、私は寿命尽きる間際に夢を叶えてもらった・・・それで幸せなの。これが、精霊になる前の私・・・。」 彼女の傍らに一人の女性の幻影が現れた。それを見たアルティオとアレクセイは本当に驚いた。黒い髪に植 物が蔦となって絡まり、魚のヒレを耳と尾に持つウユニ人・・・その顔がファイーナそっくりだったのだ。

「ファーニャ!」「姫!」

アルティオとアレクセイが叫んだ。マリンも亡き姫君の顔は知っていたが、実際に話したことはない。 テティスの話は続く。

「ファーニャが成長するに従って、かつての私自身に似てきたのには、私も驚いたわ。それに、彼女が婚約者としてここに連れてきたクファシルも私が恋したあの人にとてもよく似ていた。だから、ファーニャたちの愛が深くなればなるほど、私の心も幸せで満たされた。

千年前、覚者ルシャナ様は、こう仰ったわ。私を救うのは、私自身が阿頼耶識に咲かせる花だと。それがファーニャとクファシルだったのよ。

私は本当にあの人を愛してた。彼からも愛されたかった。その思いが杭のように私の心に突き刺さって、私を精霊にした。そして、あの二人が咲かせてくれた阿頼耶識の花は、それを満たして消してくれた。・・・もう、思い残すことはありません。・・・」

「テティス。それでは貴女はもう救われていたのだね。」

アレクセイが言った。テティスは微笑んだ。

「それから、この星の成り立ちを言うとね、北と南にある自転軸からは、法力が噴き出している。この星の原動力は法力なの。ウユニが極南にもかかわらず温暖な気候なのも、人々の姿が変わっているのも、またライランカの人々の髪が藍色なのも、この湖の水が普通でないのも、噴き出している法力を間近にしているから・・・。そして、この星に生まれた魂たちは、寿命を終えると、法力に溢れる『魂の揺りかご』に帰っていく。

あなた方ライランカとお別れするのは辛いけれど、寿命は尽きるもの。誰にも止められないわ。」

翌日の昼、その言葉通りにウユニのオンネト帝が巨大な鳥に乗ってやって来た。鳥は、彼を下ろすとみるみるうちに普通の鷹と同じ大きさになって、肩に止まった。

「オンネト帝陛下、お久しいですね。ガルーダ殿も、ようこそ。当地の皇帝アレクセイと申します。」 アレクセイが、アルティオとマリンを伴って湖畔宮殿の門の前で彼らを出迎えた。

「アレクセイ帝陛下、お久しぶりです。私たちが来ることをご存知でしたか。」

「昨夜、テティスから聞きました。彼女の魂が帰される、そのために貴方とガルーダ殿が来る、と。」

「私は話をガルーダから聞いたのです。後から着く黄金の翼というのは、我が娘アムリタ。その子はすでに黄金の錫杖を手にしているようです。どうやら運命は着実に進みつつあるようですな。」

「そうですか・・・。テティスと別れるのは、我々としても辛いことですが、仕方の無いことなのですね。」アルティオも言った。

「それにしても、何故儀式は明日の朝なのか・・・。」

オンネトの肩に止まったガルーダが口を開いた。

「黄金の錫杖を司る者の心には、いささかも迷いがあってはならぬ。魂帰しの儀式の前にそれをまず取り除かなければならぬ。そのための時間だ。」

オンネトは、アムリタがライランカに来ることになった理由を思い起こした。

「エカテリナか!」

そして彼はアレクセイたちにこう尋ねた。



「アレクセイ帝陛下、こちらにエカテリナ・キッカワという女性がおられませんか?我が子は、その女性に会うために国を出たのです。」

その名はアレクセイがよく知る名だった。

「どこかで聞いたような・・・。あっ!カーチャだ!父上、レオの妻のカーチャが確かその名前でしたよ!」

「あぁ、あの子か!」

「おぉ、お心当たりがお有りか?!それは有難い!」

「すぐに呼びます。」

アレクセイは、すぐ警護課の建物の中に走った。

「レオ!レオはいるか?」

アムリタを乗せたルナ・ブランカ号がライランカの港に着いたのはそれから間もなくだった。アムリタは黄金の槍を背中に括り付け、下船するとすぐボーディを伴って空を飛んで湖畔宮殿を目指した。この国に来たのは初めてだったが、すでに到着しているオンネトの気配を辿ったのだ。

「お父様!」

地上に降りたアムリタは槍の穂先を上にして地面に突き立ててから父親に抱きついた。父帝は愛おしく娘を抱きしめた後、真剣に話しかける。

「アムリタ、無事で良かった。が、事は重大だ。心を強く持て。よいな!」

「はい。」

「まず、お前に引き合わせる者がいる。・・・アレクセイ帝陛下、お願いいたす!」 アレクセイが二人の人物を連れてきた。アムリタの目に涙が浮かぶ。

「エカテリナお姉様・・・!」

アムリタとエカテリナは、どちらからともなく近づいて抱き合った。エカテリナも泣いている。

「アムリタ・・・話は貴女のお父様から聞いたわ。ほんとにアムリタなのね!・・・大きくなって!」

ボーディは、もらい泣きしている。まだ少女の姫様が遠くライランカまで来られた目的が遂に果たされたのだ。

「水竜騎士ボーディ、よくぞここまで我が子を守って来てくれた。礼を申す。」

気が付くと、オンネトが彼女の傍らに立っていた。

「皇帝陛下!」

ボーディは慌てて跪いた。

二五. 錫杖

来客者たちは、それぞれゲストルームに案内された。オンネトとアムリタ。ガルーダとボーディ。レオニードとエカテリナ。レオニードに関しては本来は宮廷警護課所属なのだが、その晩だけゲストルームに泊まるようにアレクセイから指示された。

「ガルーダ殿、私などと同じ部屋でよろしいのですか?」

ボーディは恐縮した。ガルーダはウユニでは精霊鳥として敬われている。皇帝と同格といってもよい。

「なぁに、私は所詮鳥だ。気など使わんで良い。それに、久しぶりに親子が時を過ごすのだ。私とて邪魔であろう。

しかし、まだ昼間のうちにやらねばならぬことが残っている。ボーディ、ちょっとアムリタのところまで付き合って くれぬか。」

「心得ました。」

一人と一羽は、隣の部屋に行った。扉をノックする。

「水竜騎士ボーディ、ガルーダ殿のお供をして参りました!」

「ボーディか。入りなさい。」

オンネトの声だ。

「ガルーダ、まだ何かすることがあるようだな。夜明けまで時間を取ったのも、そのためなのだろう?」 ガルーダは直接それには答えずにアムリタに話しかけた。

「アムリタ、バレンシアもここに呼んで、エカテリナと話したいのではないか?とにかく、やれるだけのことはしておくがいい。」

「ガルーダ・・・。そうですね。そうします。」

アムリタは、港に停泊している船にテレパシーを飛ばした。

(キャプテン、バレンシアお姉様・・・。バレンシアお姉様にアムリタの居るところまで来て貰って良いですか?エカテリナお姉様がいるの。)

キャプテン・マグダレナはバレンシアと話した。

「バレンシア、アムリタがああ言ってるが行くかい?エカテリナというのは、あの事件の被害者なんだろ?」「えぇ、そうです。私も久しぶりに会いたいです。彼女が幸せかどうか。」

「そうかい。・・・じゃ、アムリタ!話は聞こえてるんだろ?連れてっておやり。」

(ありがとうございます、キャプテン。・・・それではバレンシアお姉様、目を閉じて下さい。)

「こう?」

バレンシアの姿はその瞬間に消えた・・・。

「目を開けて。」

バレンシアが目を開けると、目の前にアムリタとボーディがいた。

「アムリタ。エカテリナもいるって?・・・それに、ここは?」

「ここは湖畔宮殿、ライランカの中心です。その前に、私の父を紹介します。それに、精霊鳥ガルーダ。」 バレンシアはそのとき初めて他の者もその場にいることを知った。大柄の男性が言った。

「久しぶりだね。私を覚えているかな?ウユニのオンネトだ。」

「オンネト帝陛下!・・・。その節はどうもありがとうございました。」

彼女は、事件後オンネト帝が自分を家まで送り届けてくれたことを忘れてはいなかった。その肩には鳥が止まっている。

「私がガルーダだ。今は都合上このような大きさだが。」

話ができる鳥なんて!やっぱり精霊鳥なの?

「お初にお目にかかります。ルナ・ブランカ号の乗組員でバレンシアと申します。」

「うむ。師表な心がけの娘御だ。気に入った。では、アムリタ、話をしてくるが良い。」

「行ってきます。」



アムリタとバレンシアは、エカテリナとレオニードの部屋を訪れた。再会するないなや、バレンシアとエカテリナも泣きながら抱き合った。

「会えないと思ってた・・・。」

「私も・・・。」

レオニードが見守っている。

「私の夫よ。レオニード・カンザキ。警察官なの。」

「貴女は結婚したのね。良かった・・・。あ、でもあのことは・・・。」

「大丈夫。彼はすべて知ってる。彼は承知の上で私を受け入れてくれたの。」

「カーチャ、僕は、君でなければ愛せなかった。それだけだ。そして君は僕の誇りだ。」

「レオ・・・。」

二人は、本当に仲睦まじい様子で見つめ合い、エカテリナは頬を赤らめて目を伏せた。

「幸せになったのね。私も貴女を『カーチャ』って呼んでいい?」

「もちろん。・・・貴女も幸せになってね。」

「でも、カーチャ、私は・・・。」

たじろぐ彼女に、アムリタが言った。

「バレンシアお姉様、私と父がお姉様の今を知って放っておくとお思いですか。このアムリタにお任せ下さい。」 「アムリタ・・・ありがとう。」

さすがは姫様だ、とボーディは思った。アムリタ様は、ご自分では意識されていなくとも、もうすっかりウユニの 姫君としての力量を身につけてらっしゃる。この方を差し置いて一体誰がウユニの未来を担えるというのだ・・・。 その時だった。アムリタが持っていた黄金の槍が急に眩いばかりの光を放ったかと思うと、その姿を変えた。一 つの大きな輪に幾つもの小さな輪が繋がっている杖・・・錫杖だった。

「これが、黄金の錫杖・・・。」

「機は熟した・・・。」

ガルーダが言った。

「そのようだな。私にも大きな力が感じられる。」

オンネトは、アルティオとアレクセイ、マリンに湖に来るようにと、宮殿の係員に伝言を頼んだ上で、自らもガルーダと共に湖に向かった。オンネトたちとアレクセイたちは、ほぼ同時に湖への道に入って合流した。

湖ではテティスが静かにその時を待っていた。

アムリタが錫杖を携えて来ると、テティスは彼女に話しかけた。

「貴女が私を帰してくれるのですね。」

「そうです、心優しき精霊よ。これまでご苦労でした。私が貴女を『魂の揺りかご』に帰します。ゆっくりお眠りなさい。」

アムリタが応えた。いや、それはアムリタの意識を通して語りかける惑星ルシアの意思であった。

アムリタは体の中に意識を集中させる。彼女の体の中で、暖かな光が大きくなっていった。さらにその光が彼女の体内からはみ出て、一点に集まって錫杖の先に宿る。

アムリタはその光り輝く錫杖をかざした。その場にいた人々は、テティスが一つの眩い光となったのを見た。白く、あるいは七色に輝く光の玉は、アムリタから出てきた大きな光に包まれて、湖の中央部まで行って消えた。

そしてその時、白夜のライランカが朝を迎え、澄み切った青空に大きな虹がかかった。近海の海も朝の陽の光を受けて輝いた。ライランカの守護精霊・テティスの魂が、星の中心に導かれ、それと一体化したのだ。

虹は、星の中心『魂の揺りかご』そのものが新たな精霊を歓迎し、地上全体を祝福した証だった。

このとき、もしも惑星ルシアを宇宙から眺める人あらば、ルシアの自転軸の双方に全く同じ薄い膜が張られた光景を確認できたことであろう・・・。

「さようなら・・・。」

アムリタは泣いていた。ライランカの王家の人々も、エカテリナもレオニードも泣いていた。 ガルーダとオンネトは、精霊の最期を静かに見守っていた。

「さらばだ・・・テティス殿・・・。」

オンネトの声が湖面に響いた。

アムリタが突然ばたっと倒れた。持てる力を全て出し切ってしまったのだ。

「アムリタ!」「アムリタ様っ!」

オンネトとボーディが彼女のところに駆けつけ、父帝が抱き起こした。

「大丈夫だ。しばらく休めば気がつくだろう。・・・私が運ぶ。お前は錫杖を持て。」

「はっ。」

ボーディは錫杖を探して辺りを見渡した。しかし見当たらなかった。

「陛下、錫杖が見当たりません。」

「はて、どこへ消えたのだろう・・・。まぁ良い。この子のことが先だ。」

アムリタは、それから三日間眠り続けた。

二六. 星を守護する者

アムリタが眠っているあいだ、その傍を片時も離れなかったのは、オンネトとボーディ、ガルーダだった。 「ボーディ、そなたも少しは休め。付きっきりではないか。」

「いえ、皇帝陛下こそ、どうかお休みを。私は騎士。これくらい、どうということはございません。」

二人は互いに譲らない。見かねたガルーダが折衷案を出した。

「二人とも、いい加減にせんか。アムリタを思いやるのは結構だが、それでは二人とも保たぬ。交代につけば済むであろうが。うるそうて敵わん。」

そういうガルーダも付きっきりだった。精霊鳥ゆえ、人間ほどは眠りを必要としないらしいが。

ライランカの人々も、時折様子を見に来た。アレクセイが見舞いに来たときにボーディが手紙を差し出した。「アレクセイ帝陛下、こちらにイリーナ・タラノヴァという方が環境局長官でおられるとか。ホルス殿からその方宛てに手紙をお預かりしております。」

「ホルス殿ですか!懐かしいな。お会いになったのですか?」

「は。たまたま同じ港に寄港いたし、貴方様にお会いするには、その方の紹介が必要であろうということで。・・・お 手紙の内容そのものはもはや必要なくなりましたが、他にも何か書かれているかもしれません。」

「なるほど。それでは、早速呼びましょう。」

「それから、もう一人テレポートさせてよろしいでしょうか?港に停泊中の船には、ホルス殿ともイリーナ殿ともごきょうだいの関係になられるシャンメイ・ルトフ・リン殿が乗っておられるのです。」

「そうでしたか・・・。たしかにごきょうだいが多いとは聞いておりましたが。もちろん構いませんよ。私も亡きクファシル公卿のごきょうだいには是非お会いしたいと思っているのです。あとお三人かな。」

「やれやれ・・・。今度はシャンメイかい。あんまりうちから人を持っていくんじゃないよ。ドロボー。」 マグダレナは、笑いながらシャンメイの上陸を許してくれた。

「カーサル姉(ねえ)・・・もう何年会っていないかしら。」

シャンメイは姉の顔を思い浮かべながら、ボーディのテレポートに乗った・・・。

そのカーサル=イリーナは、もう部屋に来ていた。

「久しぶりね、ルトフ。」

「カーサル姉!」

きょうだいとは良いものだ・・・と、アレクセイとボーディは思った。

アレクセイは一人っ子だから羨ましかったし、ボーディには兄が一人いるのだが、騎士の家系では仲が良いというよりも武術の練習相手である時のほうが多かった。

「弟からの手紙を届けてくださって、どうもありがとうございました。今回は妹にも会えて嬉しゅうございます。」 イリーナがボーディに言った。

「いえ。ホルス殿には、ご助力いただきました。こちらこそありがとうございます。それにしても、ごきょうだいとは 良いものですな。我が家は騎士の家系ゆえ、武術の稽古相手にしかなりません。」

「きっと、そんなことはないと思いますよ。貴女のお兄様も、貴女の身を案じていらっしゃるはずです。」 イリーナは言った。

「私たちの一人は、亡くなりました。でも、その代わり新たな弟や甥と姪たちを残してくれたと思っています。皇帝 陛下、貴方もそうです。」

「えつ?私が?」

突然言われたアレクセイは驚いた。

「貴方も亡き兄から弟と呼ばれましたよね。私も同じ思いなのです。姉でもある臣下がいるというのも、面白いか と存じますよ、陛下。」

「リーナ・・・ありがとう。」

アレクセイは嬉しそうだ。シャンメイが言った。

「ホルスからは、陛下に剣を見せていただくようにと言いつかってきました。拝見してよろしいでしょうか?」ボーディも思い出した。ホルスが言ったとおり、アレクセイが下げているのは黒い剣だ。

「これですね。たしかに兄上が関わって創設された剣です。

しかし今ここでは、アムリタ様が休まれている。警護課の武道場に行きましょう。」



たしかに、姫君が眠っている近くで剣を抜くのは適切ではない。

アレクセイは、イリーナとシャンメイを連れて部屋をあとにした。アムリタの周りはまた静かになる。

(アムリタ様、どうかお目覚めください。)

ボーディは祈った。

三日目の朝、アムリタが目を覚ました。

「気が付いたかね。」

ガルーダの声ではっきり目が覚めた。

「ガルーダ、私・・・?」

「君は魂帰しの儀式を無事に成し遂げた後、三日間眠っていたのだ。私は眠らずとも良いのだが、オンネトとボーディはどうしても君についていると言って聞かぬでな。身を起こして横を見なさい。」

彼女は起きてベッドの上に腰掛けた。傍らには、オンネトがうとうとと眠っている。

「オンネトは、君に回復術をかけ続けたのだ。親心とは有り難いものだな。」

「お父様・・・。」

アムリタは涙ぐんで父親に抱きついた。父帝は、その時ようやく疲れから目覚めた。

「ん・・・目が覚めたか、アムリタ。」

「お父様、心配かけて、ごめんなさい・・・。」

「何故泣く?お前は無事に務めを果たした。それで良い。」

「お父様はずっと私に回復術をかけ続けて下さったと、ガルーダが。」

オンネトはガルーダを見た。

「君も言わんでもよいことを。」

「そう言うな。君とボーディが付きっきりだったのは紛れもない事実だ。私は事実を伝えたに過ぎない。・・・さて、ボーディを叩き起こすか。」

ガルーダは、扉をすり抜けて行ってしまった。

「アムリタ、よく頑張ったな。テティスは無事に帰っていったよ。空には虹がかかり、海も陽の光に輝いた。お前に送った詩の通りになったのだ。」

「よかった・・・。」

「アムリタ、帰ったら、お前の成年礼と立太子礼を行う。そのつもりでいなさい。」

「えつ・・・。立太子礼って・・・お父様?」

「次の皇帝はお前だと言うておるのだ。よもや他の者がなるなどとは思ってはいまいな。」 驚くアムリタに、別の声が聞こえた。

「左様でございますよ、姫様。」

ガルーダを肩に乗せたボーディが戸口のところに控えていた。

「魂帰しの時の姫様はご立派でございました。その記憶を辿った者たちは、みな必ず姫様に敬意と忠誠を誓うことでありましょう。次期皇帝は貴女様に相違ございません。」

「ボーディ、貴女まで・・・。」

オンネトが優しく語りかける。



「お前には、やることがたくさんあるのではないか。このボーディの処遇、バレンシアやマグダレナをどうする?そしてガルーダもそれを望んでいるのだ。そうだな、ガルーダ?」

「その通りだ。ウユニの地を統べるのは、心優しき者。人の心を理解し、行動できるものに他ならぬ。」 さらに今、アムリタの耳には、惑星ルシアの声がはっきりと聞こえる。アムリタ・・・汝、星の守護者たれ、と。 「わかりました。アムリタはこの身を尽くします。ガルーダ、これからもウユニを守ってくれますか?」 「無論!」

鳥は力強い声で答えた。

「そして、ボーディ・・・。重大な規律違反につき、そなたの騎士としての任を解きます。」

「ア、アムリタ様・・・。どうかお許しを!」

ボーディは、より深く跪き頭を垂れた。彼女にとって、騎士の身分を失うことは死に等しい。だが、アムリタは言葉を続けた。

「そして、本日只今より私の直轄となり、生涯にわたり私の警護を申し付けます。その際は海洋騎士の称号を名乗るがよい。・・・それでよろしいですね、父上。」

「うむ。見事な裁きだ。」

父帝が言った。アムリタは今、父である私を『お父様』ではなく『父上』と呼んだ。それは、すでに自分を皇太子として認識したということなのだ。そして星の意思は彼の耳にも聞こえていた。

星の守護者、星を守護する者・・・それはウユニ皇帝の別称だった。

ボーディの目から涙がこぼれた。

「はっ!この上なき幸せ!この身に代えても必ずや姫様をお守りいたします!」

アムリタは彼女の肩に手を触れた。その瞬間、ボーディは竜めいた顔から普通の人間にかなり近い顔に変わった。

「そなたの力を、分身竜より強くしました。以後、変わらぬ忠誠を期待します。」

「はっ!ははぁっ!」

ボーディは、感激のあまり涙が止まらず、しばらくその場を動けなくなった。

二七. キャプテン・マグダレナ

その日の昼、オンネトとアムリタ、ボーディは、ライランカ王家の人々に帰国する旨を伝えた。

「思いがけず長居をし、お手数をおかけした。このご恩は忘れません。お名残惜しいが、我々は帰国いたす。」 オンネトは言った。アレクセイが応える。

「そうですか。本当にお名残惜しいですね。お礼を言わねばならぬのは、我々のほうです。守護精霊テティスの 魂を助けていただいた。心より感謝申し上げます。今後とも、兄弟国として友好を深めましょう。」

「そして、ご報告とお願いがあるのですが、聞いていただけますかな。」

「何でしょう?」

「このアムリタを次期皇帝に決めました。近いうちに立太子礼を行う所存。皇帝陛下か上帝陛下にご列席をお願いしたいと思うのだが、お越しいただけるか?」

「おぉ、アムリタ姫を!それはおめでとうございます!是非とも参加させていただきますよ。」

アレクセイたちは顔を綻ばせた。精霊を帰した時の姫は、たしかに皇帝の器に相応しいと思われる。

「私はガルーダに乗せていってもらうので直ぐですが、アムリタとボーディは、ルナ・ブランカという船で帰国したいと申しております。今しばらくのご猶予をいただきたい。出立は、おそらく本日中かと。本当にお世話になり申した。」

主従三人は揃って頭を下げた。

「ときに、アレクセイ帝陛下、貴方の立太子礼の時のお約束、覚えておいでですかな?いつか立ち合いをすると。ここには我が国でも指折りの騎士もおりますし、この機会にぜひお相手をお願いしたい。」

指折りの騎士・・・ボーディは、その言葉を噛み締める。

(皇帝陛下、ありがとうございます。ボーディは、果報者にございます。・・・)

「もちろん覚えておりますとも。もう一人、お相手を務められる者がおります。騎士殿のお相手はその者にさせましょう。それでは、これからご案内いたします。」

アレクセイは三人を宮廷警護課の武道場に案内した。そこには、レオニードの姿があった。

「貴方は、エカテリナお姉様の・・・!」

アムリタは、思わず声を出した。レオニードはきちっと敬礼しながら微笑んだ。

「は。ライランカ警察本庁宮廷警護課所属警視レオニード・カンザキと申します。」 アレクセイが説明する。

「実は、彼は私の警察学校時代の同期生にして友人。共にファイーナ姫から選ばれて、オルニアから帰化した者なのです。シャンメイ殿の兄上、クファシル公卿はその警察学校の校長でした。ボーディ殿、彼は私より強い。多少の手応えは感じられるはずですよ。

それから、私の剣をご覧になりたいとのことでしたね。シャンメイ殿には先日お見せして、立ち合いも致しました。」

彼は、いつかホルスに見せた時と同じように、黒い剣を鞘ごと抜いて縦に持ち、青白く光る銀色の刀身を半分くらい見せた。

「これが警察官級の剣です。その名の通り、現在は警察官しか所持していません。」

それから、各々が木刀と木槍に持ち替えて立ち合いが始まった。アレクセイとオンネト、レオニードとボーディ・・・周りに居合わせた警護官達は息を呑む。アムリタも本格的な立ち合いを見るのは初めてだったが、それが尋常なレベルでないことは、警護官達の表情から判る。

二時間くらい経ったろうか、アレクセイが立ち合いを止めた。

「もう満足されたことと存じますが、オンネト帝陛下。」

「左様ですな。我々も退きましょう。よいな、ボーディ。」

「は。・・・それにしても、レオニード殿はお強い。感服仕りました。」

「貴女こそ。さすがは騎士殿。貴女のような騎士が数多おられるウユニというお国、私も行ってみたくなりました。 しかしながら、その腕に加えて特殊能力を使われてはとても太刀打ちできませんね。」

彼は笑った。オンネトが言った。

「いや、良い汗をかかせていただいた。感謝申し上げる。それでは本日はこれにて失礼いたす。次回はレオニー ド殿も是非ウユニにお越し下され。」

オンネトはガルーダに乗せられて去って行った。

アムリタもボーディを伴って、エカテリナのところに寄ってから港に向かった。マグダレナが待っていた。「まったく・・・バレンシアとシャンメイを連れていったかと思えば、アムリタは三日も寝込んでいたというじゃない

か!あんまり心配させるんじゃないよ!」

マグダレナはアムリタを抱きしめた。アムリタが何かの儀式を為して倒れたらしいという話は、シャンメイを通じて彼女の耳に入っていたのである。

「・・・キャプテン・・・心配かけてごめんなさい。・・・でも、あったかい・・・。」

それは、母親の温もりだった。

「大きな虹が出てたよ。海もきらきらしてさ。それも、あんたと何か関係があるんだろ?ま、うちらにはあまり関わり合いはないだろうがね・・・。さあ、出航だ!」

「はい。」

二人は船に乗った。船はもう当地での貿易を終え、あとは二人を迎えるだけの状態にしてあったのである。 舵が落ち着いて、シャンメイに任せられるようになると、マグダレナは二人をまじまじと見た。

「おやぁ?ボーディ・・なんか綺麗になってないかい?」

「さあな。見てくれには興味ないのだが。しかし私はアムリタ様の直属となり、新たに『海洋騎士』の称号をいただいた。なお、アムリタ様は、帰国された後には正式に皇太子となられることになった。くれぐれも失礼のないように。」

「おや、そうかい。それはめでたいねぇ。だが、この船ではこれまで通りだ。ちゃんと働いてもらうよ。」「はい、勿論です。」

アムリタが答えた。

「アムリタ様!」

「良いのです。アレクセイ帝陛下も、時折武道場に通ってらっしゃるそうですよ。普通でいられることの有り難みを 忘れてはなりません。

ときに、キャプテン・・・この船ですが、ウユニ船籍の公船にしませんか?何も海賊を装わずとも、公船にすれば 海洋警察の警備官をつけられます。女性警官限定で指定することも可能ですよ。

それに、キャプテンもご承知の通り、我が国の国民を乗せてくれる船はまだまだ少ないのです。少しでも誤解を解いていきたい。

貴女も、別に我が国の国籍にならずとも良いのですし。一度、考えてみていただけませんか?」

アムリタは、すでにマグダレナの経歴を承知していた。アムリタがマグダレナの記憶を辿ってみたのは、まだ彼女たちが出会ったばかりの頃だったが・・・。マグダレナは、もともと商船の船長の妻で、海賊に襲われて亡くなった船員たちの妻子を援助するために貿易を始めた船長夫人だったのだ。

「そうさねぇ・・・あんたが王室にいるとなれば、安心は安心だね。ただ、バレンシアがどう思うか・・・。」

船が沖まで出た時、アムリタとボーディは何か幕のような透明なものが自分たちの体をすり抜けるのを感じた。 やがてライランカ大陸全体を視野に収められる場所まで進んで振り返ると、大陸を虹のような気配が覆っている のが見えた。



二八. ウユニの虹

ウユニの近海上空まで帰って来たガルーダとオンネトが見たのは、ライランカ大陸と同じように形を変えた祖国の姿だった。

惑星ルシアの北端と南端に位置する二つの国では、季節は逆になる。ライランカが夏で白夜の今頃、七月のウユニは冬で昼間でも太陽は地平線近くを動くだけで夕方は早くから暗闇同然になっているはずだった。それが今日は、仄かに街並みや森の風景が見えるのだ。ライランカ大陸を覆っていたオーラと同じものがウユニ大陸にも被さっている。その幕の光が反射しているとでもいうのか?

海辺の岸壁に近い時間城の前の広場に降りたつと、ガルーダが言った。

「オンネト、案ずることはない。二つの大陸に被さっているオーラは、惑星ルシアの祝福の印だ。よいか、アムリタが帰って来たとき、国じゅうに響き渡る星の声を聞き逃さぬように皆に命じておくのだ。それを以て、皆がアムリタの立太子を受け入れることになるのだからな。」

「わかった。そういうことか。・・・ガルーダ、改めて礼を申す。ありがとう。」

「とにかく良かったな。私はルシャナ様にお会いしてから帰る。」

ガルーダは時間城の中へ飛び去った。

オンネトが城に帰って来たのを見た妃のサトヴァと臣下たちが、慌てて彼の元に駆けつける。

「あなた、アムリタは、あの子は・・・?!それにこの異変は一体・・・?!」

オンネトはひと呼吸おいてから言った。

「サトヴァ、それから皆の者、急に城を留守にしてすまなかった。よく聞いてくれ。

アムリタは無事だ。今、船で帰国の途についている。あと十日ほどで着くだろう。私は、アムリタを次期皇帝に 定める。これは、この星の意思でもある。」

周りから響めきが起こった。アムリタが国を出たとき、彼女はまだ繭から出たばかりで特殊能力はさほど強くは感じられなかった。いずれは皇帝が姫君を後継者に指名するにせよ、それは少し先のことだと思っていたのである。

「アムリタは、ライランカにて守護精霊テティスの魂を『魂の揺りかご』に帰すという大切な役割を果たした。その様子は、各々私の記憶を辿るがよい。

『魂帰しの儀式』を行うには、それ相応の妖力と星の意思を伝えられる力を併せて有していなければならぬ。アムリタは、それを見事にやってのけた。よって、次の皇帝はアムリタ以外ない。

また、これは精霊鳥ガルーダから教わったことだが、今、この大陸にて起こっている異変も、惑星ルシアが清き 精霊の魂を迎え、この地とライランカ大陸とを祝福していることの現れなのだそうだ。

そして、アムリタが帰国する際、星の意思がこの国中に鳴り響く。それを聞き逃さぬように、全土に命ずる。 改めて、皆の者に申し渡す!明日より、アムリタの成年礼と立太子礼の準備をせよ!時期は、三カ月後の十 月十八日とする!」

その日は、アムリタ十七歳の誕生日であった。



オンネトは自室に戻った。ほんの四日ほど空けただけなのに、ひどく懐かしい気がした。遠く離れた異国での娘との再会と次期皇帝の決定、守護精霊テティスの『魂帰しの儀式』、ボーディの処遇問題、エカテリナとバレンシアとの再会、アレクセイ帝との親睦・・・ひとつひとつが重く、大切な事ばかりであった・・・・。

サトヴァが静かに近づいてきて。彼の胸の中に入った。

「オンネト・・・あの子は・・・。あの子はどうして貴方と一緒に帰って来ないの?あの子は私の娘なのよ!」「サトヴァ・・・一人きりにさせてしまったね。心配をかけて済まないと思っている。

あの子はね、自分をライランカまで乗せてくれた船で帰って来るのだ。おそらくその船をウユニ船籍の公船にするつもりなのだろう。それに、傍らには騎士ボーディがついている。我々はただ待っておれば良いのだ。」 オンネトは妃を暖かく包んだ。気持ちが落ち着くと、サトヴァは彼の留守中に起きた出来事を話し始めた。

彼がいつの間にかいなくなったその次の日の夜明け前、突如として空がほんのり明るくなり、大きな虹が架かった。彼女を含む、妖力の強い者たちには、大陸全土が薄く暖かく爽やかなオーラに覆われたのがわかった。そしてその三日後、香りたつ無数の花びらが降ってきて、どこからともなく妙なる声が聞こえた。『アムリタ・・・・汝、星の守護者たれ』と。

「その声は、私もライランカで聞いた。それは、この星の意思なのだそうだ。あの子は、『魂帰しの儀式』を無事に終わらせると、三日三晩眠り続けた。しかし、もう心配は要らぬ。あとはあの子の帰国を待つだけだ。・・・私も疲れた。君には申し訳ないが、少し休ませてくれ。」

「オンネト・・・。」

彼女は、夫に付き添って、彼が眠りにつくまで見届けた。自分も寄り添って眠ろうとした時、彼女は彼にも異変を見つけた。数日前より妖力が強く感じられる。そして、それまであった獅子の爪や尾が無くなっていたのである。オンネトに残されているウユニの印は、獅子のたてがみと耳だけだった・・・。

翌朝、オンネトは騎士団長・天空騎士パラガテを呼び出した。彼はボーディの実兄である。

「ボーディがアムリタに付き従ってくれていることは、先日話した通りだ。騎士が皇帝の指示なしに持ち場を離れることは重大な規律違反となるが、ボーディはそのことを覚悟の上で娘に付いて守護してくれたのだ。

私の目の前で、アムリタはボーディに処罰を与えた。水竜騎士の称号を取り上げて規律違反の罰とし、新たに アムリタ自身の直轄部下として召し抱え、海洋騎士の称号を与えた。よって、そなたはもはやボーディを咎めだ てする必要はない。帰国したら、妹を労ってやれ。」

オンネトは跪いているパラガテの肩に軽く手を置いた。

「皇帝陛下・・・。お心遣い、誠にありがとうございます。しかしながら、私は騎士団を束ねる者。勝手に持ち場を離れた者を自らがそのままにしては、皆に示しが付きません。・・・騎士たちの前で一発殴ってやります。」

ウユニ国内の新聞各紙は、挙って皇帝の帰還とアムリタ姫の立太子礼の予定、それに先立つ『惑星ルシアの 意思』についての記事を大々的に報じた。

数日後、アムリタたちが乗った船が接岸した時には、彼女の大いなる妖力が近づいてくるのを感じ取った市民たちで、港が埋め尽くされていた。

オンネト、サトヴァ、ムーム、パラガテと彼が率いる騎士団は、その最前列で待ち受ける。

この光景には、マグダレナやシャンメイが驚いた。

「ありゃー、なんか凄いことになってるねぇ・・・。ま、仕方ないか。姫様のご帰還だもんねぇ。」 マグダレナは溜息をついた。

「いよいよお別れって訳か。寂しくなるね。」

「いいえ。私はこの船を公船にすることを諦めていませんよ。出航までにまたお会いすることになります。ふふっ。」

アムリタは、明るくそう言って、母国の地に舞い降りた。ボーディも続く。

「私も姫様のお供で来るかもしれぬが、一応言っておこう。

君たちとの航海は楽しかった。私の称号は海洋騎士。必ずやどこかで会えるものと信じている。それまで、さらばだ。」

そうして、アムリタがウユニの地に足を着けた瞬間、澄み渡った青空から再び無数の花びらが舞い降りてきて、妙なる声が響きわたった。

『アムリタ・・・汝、星の守護者たれ。ウユニの守護者たれ・・・。我はルシア、星の意思なり。・・・ウユニの地に祝福を・・・。』

港にいた市民たちから、惜しみない拍手と歓声が上がった。オンネトが近づき、サトヴァが彼女を抱きしめた。「アムリタ・・・おかえり。」

「母上、ただいま戻りました。」

パラガテは、ボーディに近づくと、いきなり雷を落とした。

「ボーディ!勝手に持ち場を離れるとは、重大な規律違反だぞ!皇帝陛下や姫様はお許しになっても、兄の私が許さん!一発殴ってやるから、歯を食いしばれ!」

「はい、兄上!申し訳ございませんでした!」

ボーディは、彼の前に顔を差し出した。パラガテは、妹の頬を平手打ちした。

「・・・心配かけおって・・・。」

小さく呟いた。騎士団が見守る中、兄は妹をそっと包み込んだ。

「・・・兄上・・・。」

その光景を、アムリタとオンネトも見ていた。騎士の涙が見えた。

一方、ルナ・ブランカ号の入口では、ムームがシャンメイのところまで来ていた。この二人も数年ぶりに顔を合わせる姉妹だ。

「ムーム、立派になったわね。」

「お久しぶりです、ルトフ姉(ねえ)・・・。待ち遠しかった。」

マグダレナは、改めて今は亡き環境設計家に思いを馳せた。これほど多くの優秀な人材を育て上げて、世界 各国に放つなど、ドクター・ルマールとは果たして如何なる人物であったのだろうか・・・と。



二九. 架け橋

キャプテン・マグダレナは、とうとうアムリタの熱意に負けた。ルナ・ブランカ号は、正式にウユニ船籍の貿易船に登録された。壊れていた箇所もきちんと修理され、外観も真っ白く塗装された。側面にはウユニ王家の紋章 『空飛ぶ鷹』が付けられている。

「あや一、ずいぶんと変われば変わるもんだねぇ。ま、仕方ないな。」

マグダレナは、しみじみと己が船を眺めた。これまで、船員たちの家族を援助してきた船、故郷を離れた女たちを受け入れてきた船、世界を回って珍しい物を売り買いしてきた船・・・。

「この船が果たす役割は変わりませんよ、キャプテン。船長は貴女です。」 アムリタはそう言った。

「ただ、公船となれば、海洋警察から警護官を呼べます。申し訳ないけれど、キャプテンとシャンメイさんだけが強くても限界があります。キャプテンご自身も、バレンシアお姉様も、シャンメイさんも、私には大切な人なのです。そしてどうか、ウユニとライランカ、二つの国の架け橋になって下さい。」

やがて、アムリタの立太子礼の日が来た。船がまだ工事中だったので、マグダレナはウユニにいた。そこへ、ボーディが使いとして訪れた。

「キャプテン、久しいな。元気か?」

「おや、ボーディじゃないか。何の用だ?」

「忘れたか、今日は姫様の立太子礼の日だぞ。」

「それがどうしたね?あたしらには関係ないね。」

「嘘をつけ。本当は気になっているのだろう?迎えに来てやったのだ。これは、姫様のご希望でもある!」 ボーディは、半ば強引にマグダレナとシャンメイ、バレンシアを一緒くたにして分身竜スヴァーハーに乗せ、時間城へ飛んだ。テレポートでもよかったが、ウユニの国を空から見ておいて欲しかった。

「これが我が祖国だ。遠くに高い山があるだろう。あそこにはガルーダが住んでいる。」 ガルーダには、バレンシアが会ったことがある。

(あぁ、あの鳥さんね。)

バレンシアはライランカで会った喋る鳥のことを思い出した。たいそう偉そうな話し方だとは思ったが、それでいて嫌な印象は受けなかった。

美しい前庭を抜けて城内に入る。

大広間には、すでに大勢が集まっていた。最前列にアレクセイの姿が見え、彼女たちが案内された席のそばには、エカテリナと警察官の制服を着たレオニード、それにバレンシアが知った顔が五人いた・・・あのとき身を盾にした仲間たちだ。彼女たちは、それぞれに違う名目で招待を受けていた。久々の再会を喜び、短く近況を語り合った。バレンシアとエカテリナは、その時初めてアムリタがずっとウユニ国外にいた自分たちを探したいと言っていたことを知った。国内の被害者たちは、幾度もアムリタの訪問を受けていたのだ。

「そして、私とカーチャに会うために国を離れたのか・・・。」

バレンシアが呟いた。



最前列では、アレクセイが後ろにいたムームに声をかけていた。ムームは丸顔だったが、茶色い髪からは尖った三角形の耳が突き出し、狐のようにふさふさした尾を持っている。

「貴女がホルス殿とルトフ殿の妹さんですね。ぜひお目にかかりたかった。」

「お話は伺っております、アレクセイ帝陛下。ライブラ兄(あに)とカーサル姉(あね)がお世話になったそうで。姉のこと、今後ともよろしくお願いします。」

「お世話になっているのは、私のほうです。特にライブラお兄様には大恩があります。かけがえのない人を亡くしました。・・・でも、私はあなた方ごきょうだいの末っ子にしていただいているようで。嬉しく思っています。

アムリタ姫は、とてもご立派なご活躍をされました。私はこの場にいられることを誇りに思います。」

アレクセイが次に話したのは、音楽の国・カルタナの皇子ブルクハルトだった。前回ライランカで会った当時まだ七歳だった彼は、今ちょうどアムリタと同じ十七歳。今回は一人で数人の臣下を率いてやって来た。

「ご成長されましたね、ブルクハルト皇子。私を覚えておいでですか?」

「お久しぶりです、アレクセイ帝陛下。私も陛下のそのお優しいお顔をよく覚えております。次回はぜひカルタナをご訪問ください。」

式典が始まった。オンネト、サトヴァ、アムリタが入って来る。オンネトが式典を取り仕切る。

「お集まりの来賓の方々、この度は、我が娘アムリタの立太子礼にお越し下さり、どうもありがとうございます。王家の力は十分に備えておりますが、この子はまだ若い。どうか暖かく見守ってやって下さい。

また、臣下の者。先日の美しい星の祝福を見たことと思う。アムリタは、紛れもない星の守護者。以後、忠誠を 尽くすよう。」

父帝は、跪く娘に王冠を与えた。

「アムリタ、汝、星の守護者たれ。ウユニの守護者たれ。・・・これからは国に尽くせ。国民のために尽くせ。よいな。」

「はい、父上。アムリタは、この国を守り、星を守ります。」

大広間は、拍手と歓声で満たされた。

「やはり来てよかったであろうが。」

ボーディがマグダレナに言った。船長は涙ぐんでいる。

「バカ、こっちを見るんじゃない。あんたは、姫様だけ見てりゃいいんだ。」

「君たちはもう我が国の船の乗組員だ。この城にも堂々と入れ。何かあれば、私から皇太子殿下に取り次いでやる。」

「皇太子殿下・・・か。何だかあの子が遠くなっちまいそうだねぇ・・・。」

ところが、その新しき皇太子は、実に気楽に国じゅうを飛び回った。自力で飛行できることもあったが、気持ちの有り様として自国のことをできうる限り知りたかったのである。

そんな彼女はある日、もう数日で出航予定のルナ・ブランカ号を訪ねた。ボーディのほかに、三人のウユニ人を 連れている。

「キャプテン、船員希望者を三人連れて来ました。きっとお役に立ちますよ。」

「おや、これはこれは。皇太子殿下じゃないですか。わざわざのお運び、誠に恐悦至極に存じ上げます。」 マグダレナは、わざとおどけた調子で挨拶した。内心は寂しかったのだ。

「キャプテン、冗談はやめて下さいよ。アムリタで結構です。」

「そう言われてもねぇ・・・。それじゃ、姫さんでどうだい?そう呼ばれたこともあったんだろ?」

「え。まあ、それなら。・・・紹介します。魚族サッタ、鳥族ハンナ、霊族シャリナです。海に出たい者を募集したら、

三十人集まって、その中から選びました。使ってみて、あとから補充するなり何なりしましょう。

みんな、この方がキャプテン・マグダレナです。口は悪いけど、優しくて頼りになりますよ。」

「何い?あたしの口がどうしたって?ま、いいや。あたしが船長のマグダレナだ。よろしく。」

アムリタとマグダレナは、お互い顔を見合わせて笑った。

「それじゃ、キャプテン・・・また会いましょう!」

アムリタは空へ去って行った。三人の若き船員希望者を残して。

三十. 時間城の秘密

ルナ・ブランカ号は三人のウユニ人と二人の海洋警察官を加えて出航していった。

その日の夜、オンネトがアムリタの部屋を訪ねて、こう言った。

「ルナ・ブランカは海に帰った。これでもうお前の懸念はなくなっただろう。これから、お前に教えておかねばならぬことがある。それは、ウユニ皇帝が代々一子相伝で受け継ぐ伝統であり、知識であり、ウユニ最強の盾となるものだ。十分に心せよ。」

彼はアムリタを城のほぼ真ん中に位置していると思われるところにある扉の前まで連れて来た。アムリタはその扉の向こうを知らない。鍵穴のない『開かずの扉』だったからだ。

オンネトは、少し後ろに下がった。

「この扉が開くように念じてごらん。」

アムリタは、魂帰しの時と同じように意識を体の内側に集中させた。扉のほうに青い光を感じ、それに波長を合わせる。

(私を通りたいか・・・。星の守護者の後継者よ。・・・)

静かな声が聞こえる。

(私はアムリタ。ウユニの国を守る者。扉よ、中に入るのを許して。)

まもなく彼女の体を何かがすり抜けた。それはまるで走査されているような感覚だった。

扉は音もなく静かに開いた。

「扉はお前を認めた。これからはお前が来るだけで、この扉は開いてくれるだろう。先に進むぞ。」

扉の向こうは、昼間のように光があり、上下左右どこを見渡してもただの『空間』にしか見えなかった。確かに 『立っている』感覚はある。しかしそこは、床でもなければ地上を見渡す空でもない。アムリタにはまるで異空間 に迷い込んで浮いているかのように思えて、目眩を起こしそうになった。

「これ、しっかりせい!父がついている。慣れるまで父に掴まっていなさい。」

アムリタは必死で父親の腕にしがみついた。

「お前は、何故この城が『時間城』と呼ばれているか、考えたことはないか?



それは、この『空(くう)の間』であらゆる『現在』と『過去』を見ることができるからだ。例えば・・・。」

目の前に、火山の噴火口が現れた。見知らぬ男性がウユニの五つの種族を前にして何かを話している。 『これよりは、皆が手を取り合い、この大陸全体を大いなる楽園とするのだ。種族間の違いで争うことはもうない。全ての国民は、平等に幸せに暮らす権利を有する!良いな!』

人々が『ウユニ万歳!』と叫んだ・・・。

「あれが、我がウユニ統一の祖・アヒムサーだ。約二千年前にあたる。種族間の争いを終わらせ、他国からの攻撃をエネルギーバリアで守るきっかけを作った。」

オンネトが説明した。

次に、今いる空間と思われるところで、瑠璃色の髪をした黒衣の男性が二人いて、そのうちの一人がもう一人と重なった。

「今から千年前、この時間城は、星の精ルシア様直接のご指示により、惑星の真の自転軸であるこの場所に建てられた。 覚者ルシャナ様は、人間としての生涯を終えられた後、ルシア様と同一存在になられたのだ。そして、今も我々を見守り、導いて下さっている。

我々は、その法理によってこの城で過去も現在も見せて頂けるのだ。故に、この城は時間城と呼ばれ、ウユニ 皇帝は代々『星の守護者』の別称を持つ。」

また場面が変わった。どこやら学校のような風景が現れた。二十人くらいの人々がグラウンドを走っている。心持ち遅れて走っている人影があり。先を走っていた中から一人が抜けてその遅れている人影に近づく。『おい、カゲトキ、大丈夫か?』・・・『あぁ、大丈夫だ。いつも済まんな。』・・その二人は、彼女が見知った顔だった。「あら?アレクセイ帝陛下とレオニードさん?でも髪の色が違う・・・。」

「約十年前のオルニア、アイユーブ警察学校というところだ。あの二人は、もともと同じ警察学校にいたらしい。」 アムリタは、アレクセイがレオニードを紹介した時、彼が自分の警察学校時代の同期生だと言っていたことを思い出した。 あの時は何気なく聞き過ごしてしまったけれど、こういうことだったのね。 そして、レオニードさんは今、宮廷付きの警護官になって、エカテリナお姉様やアレクセイ帝陛下を守ってる。・・・

「場所を変えるぞ。」

また目の前の光景が変わった。

今度は、オンネトがガルーダと話をしている。傍らにはまだ幼い女の子がいた。『オンネト、その子は私が引き取ってもよいぞ。』ガルーダが言った。・・・

「あ・・・。覚えてる・・・。私が父上に引き取って貰った日・・・。」

「今までお前が辿れたのは限定的で主観的な、目の届く範囲の者の『記憶』のみであった。

それが、これからはお前にも、こうした『客観的な過去』を見ることができるようになる。だが、それはあくまでも国のため、世界のために、過去を見て学ぶためのものだ。今お前に見せたのも、これからウユニをお前にも任せるにあたって役に立つ知識だ。」

オンネトは、アムリタの頭に手を乗せ、現在と過去を知るための大いなる妖力を伝授した。 「何か見てみなさい。これから役に立つと思われるものをな。」

*

アムリタは少し考えてから念じた。それは、『魂帰しの儀式』で彼女が意識を失った直後の場面だった。 「あの時、黄金の錫杖は消えてた・・・今どこにあるかを知りたいの。」 「そうであったな。すっかり忘れていた。」

アムリタが意識を失い、オンネトとボーディが駆けつける前の、ほんの一瞬のあいだに、ガルーダが丸く形を変えた錫杖を呑み込んでいた・・・。

「我々は、精霊たちの心までは読み取ることは出来ない。ガルーダは、覚者ルシャナ様の命に従う。ルシャナ様から務めを終えた錫杖は回収するように指示されていたのかもしれぬな。」

オンネトは言った。そういえば、儀式に間に合うように自分を迎えに来たのも、覚者ルシャナ様のご命令によるものだったのだろう。そして帰国後も報告に行ったのだ。

「あの錫杖は、もともと私が使っていたものだ・・・。」

聞き慣れない声が聞こえた。人影が二人の前方はるか先から近づいてくる。

始めはぼんやりしていたその人影は、だんだん輪郭がはっきりしてきて、人の姿になった。

「覚者ルシャナ様・・・。」

オンネトは、その人影をそう呼んだ。

「久しぶりだね、オンネト。今日は、後継者を連れて来たのだね。」

ルシャナと呼ばれた人物は足を組んで坐し、視線をアムリタたちに合わせるかのように少し高く浮かんで優しく 親しげにアムリタを見た。墨染めの僧衣を纏い、瑠璃色の髪を後ろで緩やかに束ねていた。眉間には金色の点 が柔らかく光っている。

「私はルシャナ。また星の精ルシアと同一存在である。長きにわたり、ずっとこの星を見ている。君のことも知っているよ。私は、星の守護者の相談相手だ。何か迷ったら、私と話してみるといい。助けになると思う。

さて、黄金の錫杖のことだが、あれは私が各地を巡っていた時代に作って使っていたものだ。平たく言えば、災難除けの杖だな。もともとは樫の木から彫り出して作ったものだが、あちこちを歩いているうちに、星の法力が積み重なり、初めの材質と完全に入れ替わった。純粋な法力の塊だ。あれは今、次の『魂帰しの儀式』のために、また法力を宿す生命体の中に入っている。

そして私は、人々が互いに何の区別もしないこの地に留まっている。

アムリタ、君は私の精神的な子孫なのだ。君だけではない。全ての生命体が私の子孫である。私はその生命体たち全てにとっての相談相手なのだよ。オンネトも、時々私に会いに来る。」

アムリタは、ルシャナのことをひと目で安心して会える人だと思った。柔らかな眼差し、漂う安定感、全てを正確に観ているような清らかさ・・・こんなに心が大きな人には会ったことがない・・・。

「ルシャナ様・・・と私も呼んでいいのですか?」

アムリタは尋ねた。

「もちろん。皆ずっとそうだったからね。私は君たちの相談相手、ただそれだけだ。いつでも来るといい。」 ルシャナは消えた。

何の区別もない土地・・・アムリタは、ルシャナがここを選んだ理由がわかるような気がした。

分別という名の無分別、無分別という名の分別・・・ウユニの中にこそ智恵の欠片が覗いているのだ。

+++

